

学内広報

for communication across the UT



平成23年度役員等の紹介
平成22年度卒業式・学位記授与式
平成23年度入学式・大学院入学式
平成22年度第2回「東京大学総長賞」
広報担当者座談会

平成23年度役員等を以下のとおり、紹介します。

総長

濱田 純一

(任期) 平成21年4月1日～平成27年3月31日

理事(副学長)

清水 孝雄

(担当) 学術企画 病院

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

理事(副学長)

佐藤 慎一

(担当) 教育 入試 評価

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

理事(副学長)

松本 洋一郎

(担当) 研究 産学連携 情報システム

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

理事(副学長)

前田 正史

(担当) 財務 施設 資産管理 総務

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

理事(副学長)

武藤 芳照

(担当) 学生 コンプライアンス 危機管理

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

理事

江川 雅子

(担当) 広報 社会連携 経営管理

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

理事

久保 公人

(担当) 人事労務 法務 事務組織 監査

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

監事

石黒 光

(任期) 平成22年4月1日～平成24年3月31日

監事

有信 睦弘

(任期) 平成22年4月1日～平成24年3月31日

副学長

田中 明彦

(担当) 国際本部長

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

副学長

小島 憲道

(担当) 環境安全本部長

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

副学長

吉見 俊哉

(担当) 教育企画室長 大学総合教育研究センター長

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

副学長

西村 幸夫

(担当) キャンパス計画室長

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

総長顧問

小宮山 宏

根岸 英一

副理事

杉山 健一

(担当) 渉外 (渉外本部長)

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

副理事

尾越 和博

(担当) 業務改革 最先端研究支援プログラム
(業務改革推進室長)

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

副理事

宮川 光雄

(担当) 柏地区事務機構 (柏地区事務機構長)

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

副理事

中塚 数夫

(担当) 経理・調達

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

副理事

鈴木 敏之

(担当) 教育制度 (経営支援部長)

(任期) 平成23年4月1日～平成24年3月31日

総長特任補佐

光田 好孝

(担当) 財務戦略

総長特任補佐

難波 成任

(担当) EMP

新役員等の略歴および就任の挨拶

新理事(副学長)、新副学長、新副理事の略歴、および、就任に当たっての挨拶を以下のとおり、掲載します。



理事(副学長)
清水 孝雄

昭和 48年3月 東京大学医学部医学科卒業
昭和 54年2月 医学博士取得
平成 3年4月 同医学部 教授
平成 15年4月 同評議員 兼任
同大学院医学系研究科附属疾患生命工学センター長 兼任
平成 19年4月 同大学院医学系研究科長・医学部長
平成 23年4月 同理事(副学長)

専門分野：

生化学・分子生物学(脂質生物学、細胞情報学)

研究内容(著書)：

1) 清水孝雄編「脂質生物学がわかる」、羊土社、2004年

2) Shimizu, T. "Lipid mediators in health and disease"
Annual Review of Pharmacology and Toxicology, 49 (2009)
123-150.

理事就任にあたり

4年間にわたり医学系研究科長・医学部長の任を果たして参りましたが、ほっとするまもなく、4月より理事(副学長)を務めさせて頂くことになりました。担当は「学術企画」と「病院」が主ですが、図書館(新図書館構想)、博物館、保健・健康推進本部、ライフサイエンス、科学研究規範なども担当します。「学術企画」は新しい分野で、「研究」「教育」の両分野とも重なりますが、より長期構想にたつて、東大のアカデミックプランを考え、さらに我が国における高等教育と研究、社会への展開などのあるべき姿を提案し、実行していくということです。大学の最も基本となる重要な課題であり、責任の重さを感じています。言うまでもなく、社会が東大に求めているのは、高度な学術の展開と知の創造、さらに、創造的人材の育成です。東大での学術展開をより促進するために、東大内で出来る改革などを実施すること、国レベルでの法改正、予算措置などを必要とするものに分け、後者に関しては国大協や日本学術会議などと連携しながら、政策提案をしていくことになると思います。医学部附属病院は、教職員、医療従事者、非教員医師などの努力で、研究レベル、医療内容で、経営でも我が国の名実ともトップを走っています。しかし、さらに必要な改革は沢山あり、医学部、病院執行部、さらに医科研、保健センターなどの医療、健康関連部門と協力して進めたいと思っております。3月11日の未曾有の震災により、当面、緊急に判断し、解決すべき点も多くなってきましたが、この様な混乱、混迷を乗り越え、日本を再建する時期ですから、大学の発展を含め、長いスパンでの「学術企画」の役割が以前以上に重要となっていると思います。慣れない仕事ですが、皆さまのご指導、ご助言とご協力をお願い致します。



理事(副学長)
武藤 芳照

昭和50年3月 名古屋大学医学部卒業
昭和55年3月 名古屋大学大学院医学研究科修了
同年4月 東京厚生年金病院整形外科長
昭和56年8月 東京大学教育学部 助教授
平成5年4月 同教育学部 教授
平成21年4月 同大学院教育学研究科長・教育学部長
平成23年4月 同理事(副学長)

専門分野：身体教育学、健康スポーツ科学

研究内容：

1) 武藤芳照(編)『転倒予防医学百科』

日本医事新報社、2008.

2) 武藤芳照『よみがえれ風の子-子供の体の

育み方-』中央公論社、2002.

3) 武藤芳照『からだの理』丸善、1996. 等

情理を尽くす

未曾有の大災害となった3月11日午後2時46分の東北地方・太平洋沖地震の国内外への様々な影響が未だ続く中、4月1日より、理事(副学長)として、主に「学生」、「コンプライアンス」、「危機管理」等を担当し、東京大学の経営・管理及び教育の一翼を担うこととなりました。30年に及ぶ本学教師としての経験と教育、スポーツ、保健、医療、福祉等の分野・領域での研究・実践活動で培った現場感覚を基盤に、身の丈に合ったやり方で、一つひとつの課題に着実に取り組む所存です。

明治10(1877)年に創設されて以来、一貫して東京大学の主役は「学生」であり、その優れた力と鋭い感性を育み、良き人材として社会に送り出すことが、本学の最大の社会的使命と考えています。そうした認識の下、教職協働の形で、学部・大学院合わせて約3万人の学生に関わる諸事業・活動を支援しつつ推進していきたいと考えています。

今般の巨大地震の体験は、東京大学の教職員、学生それぞれの立場で、大学として、そして個人・家庭・地域社会レベルでの危機管理のあり方を真剣に考えさせる貴重な機会と場を与えてくれました。全学構成員一人ひとりの体験とアイデアを極力集約・整理して、本学としての新たな地震対策や総合的な防災・危機管理対策を構築する必要があると考えています。

また、コンプライアンス、ハラスメント、研究費不正使用、情報セキュリティ、バリアフリー等の重要かつ困難な担当業務が数多くありますが、性急な結果を求めることなく、筋を通しつつそれぞれに関わる人々の気持ちを大切に、「情理を尽くす」基本姿勢で、役員としての重責を果たしていきたいと思っております。

やがて任務を終えた時、間もなく150年の歴史を迎えようとする東京大学という大きな組織の歩みの中で、時の重みに耐えられる成果の一つでも残せるよう努力して参ります。

皆様、宜しくご支援・ご協力・ご指導下さいませ。



副学長
吉見 俊哉

昭和56年3月 東京大学教養学部教養学科
 関連社会科学分科 卒業
 昭和62年7月 同大学院社会学研究科
 社会学Aコース単位取得退学
 平成2年10月 同新聞研究所 助教授
 平成12年8月 同社会情報研究所 教授
 平成13年4月 同大学院情報学環長・
 学際情報学府長
 平成22年4月 同大学総合教育研究センター長・
 教育企画室長
 平成22年11月 同大学史料室長
 平成23年4月 同副学長
 研究内容：

- 1) 『都市のドラマトゥルギー』
 (弘文堂、1987年、河出文庫、2008年)
- 2) 『博覧会の政治学』(中央公論社、1992年、
 講談社学術文庫、2010年、韓国語版、
 2004年、中国語版、2010年)
- 3) 『ポスト戦後社会』(岩波新書、2009年)

「学生への教育責任」と「社会への説明責任」

昨年度より教育企画室長および大学総合教育研究センター長として全学的教育課題の改革に努めてきましたが、新年度は副学長職を拝命し、濱田総長の下で本学の教育改革に一層の責任を負うことになりました。誠に微力ですが、諸先輩、教職員、学生の皆さんに助けていただき、与えられた責務に誠実でありたいと思います。

東京大学の教育改革は、「学生への教育責任」と「社会への説明責任」という2つの責任を全うすることに向けてなされなければならないと考えます。逆にいえば、「学生からの眼」と「社会からの眼」を教職員一人ひとりが意識する環境を実現すること。しかし、それは受動的なものではなく、新しい大学教育の実現に向けたものであるべきです。新しい大学教育には、①総合大学としての新しいリベラルアーツ教育の構築、②世界的に卓越した大学としてのエクセレンスの具現、③歴史的に蓄積されてきた体系的知の次世代への継承という3本の矢の調和が必要です。

私に与えられた責務は、こうした理念を個々の具体的な教育改革により実現すべく努めることだと思います。本学では昨夏、佐藤教育担当理事により全部局長、大学院部会と後期課程部会の委員、総長補佐を対象に、全学的教育課題についてアンケートがなされ、全学が抱える多様な課題が浮き彫りになりました。すでに教育企画室では、寄せられた全回答についての構造化作業を終えています。

総じていうなら、本学の教育改革は、「ヨコの統一化」「タテの連続化」「教育の国際化」の3軸を中心に考えられる、というのが基本的見通しです。来年度から実施予定の時間割の全学統一は、このうちのヨコの統一化の典型例ですが、他にも重要課題が山積しています。その山積する課題に丁寧に取り組んでいきたいと思っています。

大学が誕生したのは12世紀の西欧ですが、その基盤をなしたのはネット状に結びついた中世都市の「自由」でした。学問の「自由」は都市の「自由」と同根です。私はかつて都市文化の歴史社会学的研究から出発した者ですが、大学はその本質において〈都市〉なのだと思えます。つまり大学は、国家のものである以前に都市のものであり、相互に結びつき、世界大のネットワークを形成します。12世紀に誕生してから大学は、何度も死と再生を繰り返しました。現代は、大学危機と再生の時代です。本学から21世紀の大学教育再生の道を示すことは、壮絶な悲愴さが私たちの列島に襲いかかっている今こそ、本学の全部局に課せられた使命なのだと思います。



副学長
西村 幸夫

昭和57年3月 東京大学大学院工学系研究科
 都市工学専攻博士課程単位取得
 昭和59年3月 工学博士(東京大学)
 平成8年4月 同工学部 教授
 平成20年4月 同先端科学技術研究センター 教授
 平成23年4月 同副学長
 専門分野：都市計画、都市保全計画
 研究内容：

- 1) 西村幸夫『環境保全と景観創造』
 (鹿島出版会、1997)
- 2) 西村幸夫『都市保全計画』
 (東大出版会、1994)
- 3) 西村幸夫『西村幸夫 風景論ノート』
 (鹿島出版会、2008)

知の殿堂にふさわしいキャンパスへ

新年度から、内藤廣前副学長のあとを引き継ぎ、キャンパス計画全般に関して担当することになりました。

世界の一流大学はどこも学問の殿堂としてその名に恥じない風格のあるキャンパスの景観を誇っています。研究教育の内容は形あるものとして目の前に示すことは難しいですが、研究教育にふさわしい環境というものは具体的な姿として明示することができます。各大学のキャンパスの今日の風景が、それぞれの大学が目指してきた研究教育環境の理想像の歴史的蓄積としてあるのです。そのすばらしい環境が、大学の象徴として世界の優秀な頭脳を引きつけ、若い世代の目標となり、満足度の高いキャンパス生活の礎となります。

東京大学の各キャンパスもそのような努力の結果として今日の景観・環境を生み出してきたということが出来ます。ただし、キャンパスの風景にも時代の変化があります。設備投資が滞っていた時代もありましたが、近年、特に国立大学法人化以降は多様な事業手法での増改築の動きが急になってきました。このことは研究教育活動の活性化のためではありませんが、気をつけないと局所的な効率最大化の結果、大学キャンパスとしての統一的なイメージや調和が壊れてしまうという懸念もあります。

私はこれまで都市計画という専門分野で、個々の建物や地区がいかに全体の中で調和を保ち美しい都市をつくっていくことができるか、といったことを学んできました。国内外の様々な都市や地域についてもアドバイスをしてきました。今回、はからずも私自身が勤務している大学のキャンパス群を対象にさらに魅力的なキャンパスづくりをするためのお手伝いするという役割を担うことになりました。考えてみると、大学のキャンパスというものも、個別の部局の多様なニーズを満たしながら、いかにして大学としての統一的なシンボル性を保持・強化できるか、同時にそれが研究生活をおくるにふさわしい魅力的な環境であるかという異なった要求に答えていかなければならないという意味では、都市とよく似ています。これまでの経験を活かして、自分の専門分野で大学へなにがしか貢献できるということを心に刻んで役目を果たしていきたいと思っています。

副理事就任にあたって



副理事
中塚 数夫

昭和49年3月 東京経済大学卒業
平成16年4月 東京大学柏地区企画課長
平成18年7月 同地震研究所事務長
平成21年4月 同工学系・情報理工学系等
事務部長
平成23年4月 同副理事

このたび、4月1日付けで副理事に就任いたしました中塚数夫です。経理・調達を担当することになりました。東京大学には、当時の東京天文台に採用されて以来、4年間の日本学術振興会への出向をふくめ、約40年間お世話になってまいりました。その間には、主に理系の研究所の経理業務に携わっていました。特に印象深い事業は、柏キャンパスの用地取得、研究所群の移転、新研究科の立上げ等、柏新キャンパス実現への東京大学の底力を実感させられたことであります。

法人化後6年が経過し、経費削減・業務の効率化のもと様々な取り組みがなされてまいりました。既に定着しそれなりの成果がみえているもの、システム等は稼動しているものの未だ十分とは言えないもの等が混在している状況であるように思えます。

前任の三浦副理事のご尽力により調達改善、資金運用におきましては一定の目標値に達していたものと思います。本年の年頭の濱田総長の挨拶にもありましたが、平成23年度予算においては、当初予定額よりは、緩やかなものとなっており、猶予期間である旨のご発言がありました。しかし、翌年度以降には、現状よりさらに厳しい状況になることが懸念されることも示されました。また、先だつての東日本大震災の被災地再生費用のための23年度補正予算編成も示されつつある状況を見ても、東京大学予算へも少なからず影響が出るものと思料されます。外部資金の減少、間接経費の見直しなど外的要因による影響下に於いて、教育、研究環境を如何に維持管理するかは教職員が一丸となって対処することが必然と思われる。

経理・調達に関しまして、国税局調査や会計検査院検査における指摘事項も後を絶たない状況であることも真摯に受け止め、これらの再発防止においても事務職員は元より、教員の意識改革などを踏まえた改善措置を講ずることが肝要と考えます。また、経費の縮減、業務の合理化による無駄の排除、これによる人件費の削減、効率化による財源を新たな改善計画推進へ資源投入するなど尾越副理事が推進しているプロジェクトと連携しながら調達・経理業務の改善を推進していきたいと思っています。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

役員等退任の挨拶

このたび退任された理事(副学長)、副学長、副理事の、退任に当たっての挨拶を以下のとおり、掲載します。

理事退任にあたって

前理事（副学長） 田中 明彦

この2年間、理事（副学長）として、大きくわけて総務と国際の仕事をしていただいた。総務に関しては、日々の危機管理とともに、大学全体におけるコンプライアンス体制の確保、兼業や利益相反の管理、情報セキュリティの維持などが任務であった。また、国際については、日々の国際活動に加えて、濱田新体制のもとでの国際化の方針として東京大学国際化推進長期構想を作り、これに基づいて国際連携本部と本部事務組織を改組して、国際本部を立ち上げた。

このような、いわば内務と外務の双方を十分にこなすのは、なかなか難しかった。国際関係の仕事のために外国出張している時も、メールなどを使って、総務の仕事が円滑に進むように努力したつもりではあったが、不十分なところ

も多々あったにちがいない。総務関連の仕事が大過なく終わったとすれば、総長のご指導とともに他の理事や本部事務組織、各部局の教職員の皆様のアドバイスならびにサポートのおかげであり、お礼を申し上げたい。

今年度は、理事の仕事は終わらせていただき、副学長として、国際（と教員懲戒委員会）の仕事に専念させていただくことになった。東日本大震災後の日本再建にとって、東京大学の役割は極めて大きい。東京大学の国際的活動の活発化は、世界の中での日本の存在感を示すことに直結している。そのためにも、新たに改組された国際本部の教職員一同とともに、一層の努力を続けたい。

退任にあたって

前理事（副学長） 小島 憲道

私は2009年2月に2年間務めた教養学部長を退任しましたが、その直後に濱田総長の依頼を受け、2009年度から2年間、理事（副学長）を務めてまいりました。教養学部長時代は、重要な事案に関して学部長室（学部長、3人の副学部長、2人の学部長補佐）と5課長（総務、経理、教務、学生支援、図書）が一体となって解決してきましたが、東大本部では、7人の理事が様々な重要課題を分担する体制をとっており、その任務の多さと責任の重さを実感してきました。

2年間の間に担当した役割を思い出すまま列挙しますと、「学生」、「広報」、「渉外」、「卒業生室」、「環境安全本部」、「保健健康推進本部」、「ハラスメント」、「コンプライアンス調査」、「バリアフリー」、「図書館」、「総合博物館」、「国際化推進学部入試担当室」、「留学生センター（現在の「日本語教育センター」および「国際センター）」」などがありました。このように、様々な部門を担当してきましたが、担当部門の本部教職員の方々と一体となって知恵を出し合うことにより、2年間の間に様々な課題を解決することができ、部課長をはじめとする教職員の方々に感謝申し上げます。

東大本部では、2009年度に行動シナリオおよび重点課題を策定しましたが、「学生」関係では、濱田総長から私に

託された重要な課題の一つに「タフな東大生の育成」がありました。どこまでも伸びてゆく優秀でタフな学生には、国際的に通用するリーダーとして育て、東大に合格することが人生の最大の目的であった学生には周囲からの過重な期待という重荷を解いて本来の力を発揮させ、標準的な多くの東大生には偏差値という束縛された価値観から解放し、様々な価値の多様性に出会わせてたくましい人材として社会に送り出したいという思いで行動シナリオを考えてきましたが、2011年度からはその実践の時であり、進学振分け制度の改善が避けては通れない問題であると思っております。私に託されたもう一つの重要な課題に「卒業生との緊密なネットワークの形成」がありました。東大の発展のためには教職員、学生、卒業生の3本柱の強い連携が必要不可欠であり、卒業生のための生涯学習・ネットワーク形成の場である「ワールドカフェ」や「グレーター東大塾」が2010年度に立ち上がったことを嬉しく思っております。

私は2011年3月で理事を退任しますが、2011年4月からは副学長として「環境安全本部」、「国際化推進学部入試担当室」、「駒場Ⅰ」を担当することになりました。今後とも東京大学の発展のために最善を尽くしたいと思っております。

濱田総長の下で2年間副学長を務めさせて頂きました。この間、TSCP（東大サステイナブルキャンパスプロジェクト）と柏キャンパスを担当致しました。

TSCPでは、当面の目的を低炭素化とし、アクションプランTSCP2012により5年間で非実験系の二酸化炭素排出量を15%削減するという目標を達成すべく、皆さんのご協力をいただきながら、高効率の機器導入や節エネルギー対策を進めてきました。お陰様で、今のところ目標の達成が見込まれる状況にあります。このような活動は全国の大学を先導するものであるため、試行錯誤しながらになりましたが、その動きは社会に対しても有効な情報発信ができていたと思います。

柏キャンパスでは、数物連携宇宙研究機構と大気海洋研

究所の研究棟が完成して、1研究科、3研究所、2研究センター、1研究機構を含む組織の中核となる建物が完成し、東大の3極構造の1極をなす形が見えてきたと思います。しかし、何と云っても柏の葉キャンパス駅から東大柏キャンパスまでが、特に学生にとって遠い道りとなっており、今後の大きな課題です。これを含めて宿舍など周辺施設の整備をこれから進めなければなりません。

2年間の任期を通じて特に感じたのは、職員の方々の奮闘ぶりです。建物や電気などに関する専門的な知識を駆使しながら、同時に周辺との調整を進め、目に見える成果に結びつけていくという仕事ぶりは、改めて驚きを感じるものでした。今後も学生教職員が一体となって東京大学の評価を高めていければと願っております。

副学長・環境安全本部長を退任するにあたって

3月末を持ちまして、副学長・環境安全本部長を退任致しました。約2年間と短い間ではございましたが、大変お世話になりました。

この2年間、長らく民間企業に在籍した経験も活かして、環境安全の取組みをスピード感のある、実効のあるものにしたと考えて進めてきました。その意味ではまだまだ不十分で道半ばです。しかしながら、振り返ってみると、国立大学法人化を機に足早に整備された環境安全の体制を見直して将来を見据えた体制に再構築するとともに、懸案であった実験系不明廃棄物処理にも見通しを付けることができ、些かではありますが、東京大学の環境安全に貢献できたことを嬉しく思っております。

今後の最も大きな課題は、教職員に学生も含めた大学構成員の安全意識の向上です。大学構成員の環境安全に関する意識が民間企業に比べるとまだまだ低いことが問題で、

これでは、いくら環境安全の体制を整えても実効が上がりません。言うまでもなく、環境安全がしっかりと担保されない、教育・研究どころではなくなってしまいます。すべての大学構成員がこのことを自覚できるように、eラーニングをはじめとしていろいろな方策を早急に導入していく必要があります。

さらに、環境安全はすべての大学に共通する重要な課題であり、東京大学においても、安全意識の向上など、まだまだいろいろな課題が残っていますので、他大学とも連携して課題解決に当たることが必要だと思っております。

最後に、環境安全本部や各部署の環境安全管理室の方々をはじめとして、気持ちよく一緒に仕事をさせていただいた多くの皆様にお礼を申し上げます。誠に有難うございました。引き続き、皆様のご協力をお願いして、退任の挨拶とさせていただきます。

不易流行・則天去私

工学系研究科社会基盤学専攻の定年六十歳という内規に従って、三月末に教授の職を辞し、一年余り務めた副学長も退任させて頂きました。短い期間でしたが、いさか過激に、そしてかなりハードに仕事をさせて頂きました。思う存分やらせてくださった総長はじめ執行部の方々に御礼申し上げます。また、キャンパス担当としてむずかしい舵取りを適確にサポートしてくれた施設部のスタッフに感謝したいと思います。

わたしはアカデミックな人間ではありません。ながらく建築家として仕事をし、土木分野に設計とデザインを教えるために呼ばれ、教員になりました。また、自らの課題として、まったく異なるテリトリーを形成してきた、建築と都市と土木の三分野を融和融合させることに力を尽くしてきました。そのノウハウをキャンパス計画に活かせ、ということでキャンパス計画室長を命ぜられ、副学長の立場をいただきました。

わたしがやろうとしたのは、国立学校法人化後に混乱していたキャンパスを未来に向けて立て直すことです。まず手を付けたのは、キャンパス全体のルールである「要綱」

の改訂です。これが一番の大仕事でした。それから、このルールを適確に運用するための司令部である「キャンパス計画室」の役割を明確にし、組織的位置付けを強化しました。深く関与した個別のプロジェクトでは、主なものに、工学部3号館、法学部3号館、文系書庫などがあります。

ルールを作り、組織を強化し、要となるプロジェクトの道筋を立てることが出来たのですから、短い時間の成果としては、まあまあ出来ではないかと思っています。あとは、後任の先生方に託したいと思います。

3月11日に予定していた最終講義の開始三十分前に、大震災が来ました。急遽、講義を取りやめ、テレビの画面に釘付けになりました。歴史的瞬間を目の当たりにしていると感じました。時代は深い所で大きく変わらざるを得ないでしょう。文化と技術の在り方が根底の所で問われているのだと思いました。いつの時代も、東京大学はこの国の背骨であり心棒でした。困難な時代ほど、その求められる役割も大きくなるはずで、学外から、その雄々しい姿を見つめ、応援したいと思っています。

この3月に任期を終え、副理事(財務担当)を退任いたしました。教職員をはじめ多くの皆様にご支援、ご指導いただいたことに心からお礼と感謝を申し上げます。

私は、主に調達、経理系の実務を担当させていただきました。とくに、貴重な財源をどうすれば効果的に執行できるか、経費の節減方法はないか、などの調達改善に取り組みました。また、余裕資金の運用を通して学生支援経費を少しでも多く確保できるよう努力してまいりました。大学経営という観点からはその守備範囲は限定的でしたが、少しは貢献することができたのではと考えております。残念ながら反省すべきこともいくつかありましたが、前田理事を始め財務部の皆さんのご協力ですべてを乗り越えることができました。この場をお借りして感謝申し上げます。

平成16年から21年の第一期中期計画期間は模索するなかでの取り組みでありましたが、22年から第二期計画に入り、濱田総長は、第一期の成果と理念を継承しつつ、更に着実

な歩みと定着を目指した新たな計画を進めておられます。それを間近に見、実感する機会を与えていただいたことに感謝しております。

いま、わが国は、東北地方太平洋沖地震による未曾有の災害に遭遇しておりますが、必ずやこのような状況を克服できると確信しております。この大震災に対する濱田総長のメッセージに、「こうした打撃から社会を再生していく重要な決め手は、私たちが日々生み出し学び続けている知識にほかなりません」という一文がございます。私は、この言葉に「どのような状況にあらうと東京大学の使命、役割は変わらない。それを果たしてほしい。」という総長の一貫した強い意志を感じ取りました。濱田総長の『FOREST2015』への私の期待はここにあります。

東京大学の益々の発展と社会の安寧を願いつつ退任の挨拶とさせていただきます。長い間ありがとうございました。

退任のあいさつ

前副理事 櫛山 博

早いもので、医学部附属病院事務部長に就任して8年が過ぎ、ここに定年を迎え、退職することとなりました。

思い返せば事務部長として着任早々の平成15年4月3日に医療事故に関する記者会見でマスコミの前で頭を下げる場所から始まったといえます。翌週9日には、20億円の赤字、また翌週には、臨床試験に関する記者発表と慌ただしいスタートとなったことを思い出します。

最初の1年間は、事件・事故からのスタートでしたが、永井病院長を中心とした病院執行部による翌16年4月の国立大学法人化へ向けての体制準備の期間でもありました。法人化による病院の運営体制の改革が進み、法人化後の病院運営に大きな影響を与えたことは、私の長い大学病院生活の中でも貴重な経験となりました。

就任2年目以降については、毎年度病院収入の2%相当の病院運営費交付金が削減されるという経営改善係数への対応に追われたといっても過言ではないと思われます。病院においては毎年度5億5千万円の交付金削減となり、その削減に対応していくためには11億円の増収が必要になる

との試算に基づき、毎年度増収を図っていくことが求められました。診療報酬改定がマイナス改定の中での増収は厳しかったですが、平成18年度診療報酬改定で7:1看護配置が新たに設けられ、病院としても看護師180名の増員を図ることにより7:1看護配置を実現し、収入の増加及び医療の質を高めることができたことは、19年度以降の病院収入の確保に大きく貢献できました。この実現に当たっては、本部役員をはじめとした多くの方々の理解と協力によるものと深く感謝しております。

また、念願であった臨床研究棟の改築及び病棟2期の実現に向けて、大きく前進したことも在職期間中のうれしい出来事でありました。

このようなさまざまな課題に直面しながらも、多くの方々に助けられて定年を迎えられたことは、私にとって最大の喜びであります。ここに、紙面をお借りいたしまして厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。

最後に、東京大学の一層のご発展を祈念して、私の退任の挨拶といたします。

平成22年度卒業式が、3月24日(木)に、小柴ホール(理学部1号館)において挙行された。

今年度の卒業式については、3月11日(金)に発生した東日本大震災の影響を考慮し、会場及び内容等を変更して、卒業生数3,101名のうち、各学部代表者の出席により行われた。

各学部代表者の入場後、列席者の紹介があった。

開式に先立ち、東日本大震災によって尊い命を失われた多くの方々に謹んで哀悼の意を表し、30秒間の黙祷を捧げた後、11時40分に開式となった。

濱田総長から各学部代表者に、順次、学位記が授与された。

続いて、濱田総長から卒業生に告辞を述べた後、卒業生代表(教養学部 川下俊文さん、薬学部 伊藤央樹さん)から答辞があった。

なお、授与式はインターネットによりライブ中継を行った。



平成22年度東京大学卒業式総長告辞



東京大学総長
濱田 純一

皆さん、ご卒業おめでとうございます。また、皆さんが学業に励んできた間、皆さんをしっかりと支え、この晴れの日をともに喜びいただいているご家族の皆さまにも、お祝いの気持ちをお伝えしたいと思います。

皆さんがいま、大学に入学した頃を振り返ってみると、きっと、自分が随分と変わったなという感慨をもつことでしょう。間違いなく、皆さんは知的に、そして精神的に大きく成長したのです。これから社会に出て、あるいは大学院にすすんで、その力を遺憾なく発揮し、さらに鍛えていってほしいと思います。

このたび卒業する皆さんの数は、合計3,101名になります。うち留学生は103名です。

今年の卒業式は、例年とは大きく異なり、各学部卒業生の代表の皆さんだけに出席してもらい、卒業証書の授与を行うこととしました。場所も安田講堂ではなく、この小柴ホールを用いることになりました。これは言うまでもなく、東北地方太平洋沖地震、そして福島原子力発電所の事故の影響を考慮したものであり、また多数の人間が一堂に集まった場合、万一の際の避難リスクの高さに配慮したものです。この式典の様子はインターネットで中継されていますので、多くの皆さまにご覧いただいていることと思います。

皆さんがこの東京大学で過していた間にも、世の中は大きく変化しました。2008年のリーマン・ショックに端を発した世界的な金融危機、経済危機は、皆さんが大学に入ってから間もなくの出来ごとです。その時からだけでも、時代は急速に動いています。経済の低迷や社会的格差の拡大、少子高齢化の進行、あるいは国際的なパワー・バランスの変化など、日本の社会に

試練をもたらすさまざまな出来事が起きました。

さらに、つい先ごろ、東北地方太平洋沖地震が発生しました。ここに卒業の日を迎えようとしている皆さんあるいはそのご家族、ご関係の皆さまにも被害が及んではないかと、憂慮しています。この震災によってすさまじい数の尊い命が失われたことに、深い哀悼の気持ちを捧げたいと思います。まだ行方不明の方も多く、関係の皆さまのご心痛はいかばかりかと存じます。また、負傷し、あるいは心に傷を負われた皆さま、生活の基盤を失われた皆さまに、心よりお見舞いを申し上げます。このたび卒業する皆さんの中にはすでに、さまざまな形で被災地への支援活動を行っている人たちがいると思います。ぜひこれからも、さまざまな工夫をして支援の輪を広げていただければと思いますし、東京大学としても出来る限りの努力を行っていくつもりです。

日本は、第二次世界大戦の惨禍から驚異的な復興を遂げ、60年あまりを経て、今日の豊かな近代社会を形成してきました。そうした社会でなお、なぜこれほど多くの人命が失われ、心身を傷つけられ、あるいは生活の基盤を奪われるような大きな犠牲を出さなければならなかったのか、さらには安全を極めたはずの原子力施設をなぜ十全にコントロールすることができず、多くの人びとが不安におののいているのか、まことに無念に思います。それは、人間としての無念さであると同時に、学問に携わる者としての無念さでもあります。

こうした大きな時代の試練を大学在学中に経験して卒業していく皆さんには、これらの出来事があったことを生涯において忘れることなく、学んできた知識がこのような事象に対して何を出来たのだろうか、また何を出来るようになるべきなのだろうか、それらを問い続けることを、これからの仕事や研究のバネとしていただきたいと思います。とても残念なことです。知識はしばしば悲劇をバネにして成長を遂げます。技術が戦争をきっかけに発展するということはよく言われますが、日本では第二次世界大戦後の復興の槌音の中でも技術は大きく成長しました。また、たとえば日本の社会科学は、戦争の惨禍に対する深い反省を踏まえて大きく発展してきたところがあります。さらに、このたびの大震災は、人間と自然との関係のあり方についても課題を投げかけているように思えます。苛酷な事態から真摯に学び、痛みが少しでも早く癒えるように、また、次の世代が同じ苦しみや悲しみを味わわなくて済むようにすることが、学問の務めであり、そして学問を学んだ人間の務めです。

たしかに、物事をぎりぎりまで考え抜く力は、極限的な状況に直面し、あるいは極限的な状況を想定することから生まれます。学問においては、そうした限界状況の設定が、個人の精神の内面で生じることもあれば、外界の事情、困難や悲劇によっ

てもたらされることもあります。いずれにしても重要なことは、そうしたぎりぎりの状況を直視することから知識は生まれる、ということです。

いま私は、知識の役割を、社会に対する直接的な貢献の面からお話ししてきました。しかし、知識の役割は同時に、きわめて個人的なもの、すなわち、個人の人格としての成長にもかかわるものです。『論語』の中の孔子の言葉に、「古の学者は己の為にし、今の学者は人の為にす」という一節があります。つまり、かつては学問をするという行為は自らの人格を高めていく修養であった、しかし最近の学者は、「人の為にす」となっていると。この「人の為にす」という言葉は一見、「社会の役に立つ」という意味のように受取れ、孔子はそれに否定的であったように読めます。しかし、この論語に訳註を付しているらっしゃる金谷治先生の説明では、「人の為にす」というのは「人に知られたいためにする」という意味で、孔子が否定していたのはこのような、もっぱら他者の評価を意識した学問への姿勢です。

孔子がいう「古の学者」の姿は、「知を愛求する者」として自らの存在を規定した、ギリシアのかのプラトンの姿勢に通じる場所があるように感じます。知るということをとことん突き詰めていくことを通じて、自らの魂の完成を目指した、その姿勢です。もっともプラトンの場合は、魂の完成は神への奉仕と重なっていますが、人びとの精神的基盤が近代個人主義に支えられている現代においては、そうした重なりを想定するかどうかは個人によって異なるでしょう。

ここで重要なのは、このように自らの魂の完成を知の追求を通じて目指すこと、修養ということが、社会にとっても意味あるものだという事です。魂の完成、人格の成長の効用は、個人だけのことにとどまらないのです。たしかにプラトンの知の愛求は、それ自体として社会の生産性を高め物質的な豊かさをもたらすわけではありません。むしろ、それは、プラトンが生きたアテネでは社会に有害なものとして退けられ、ソクラテスへの死刑宣告までもたらせたことにご存知のとおりです。しかしながら、今日までもプラトンの思想が、多くの人びとによって論じられ、参照され続けているという事実は、まさしく、自らの魂の完成を求める知の追求が、一見個人的な事柄であるように見えながら、実は社会のためにも大きな意味を有していたということの証左にほかなりません。

「社会に役立つ」かどうかという時、社会を構成しているのが個々の人間である以上、個人の知的精神的成長が社会に有意義であるのは当然のことです。知識が社会のために役立つべきだと考える時には、「己の為にす」る学問の大切さも見過ごすべきではありません。このたびの惨禍と多くの人びとの痛みを、

一人の個人の内面において思いめぐらし考え抜くことも、次の時代の社会のありようを構想していくための重要なポテンシャルになるはずだと思います。

このように、知識が社会に対して直接的に、あるいは間接的にもつ役割を理解しながら、皆さんにはこれからも、知識というものと深く付き合い続けてもらいたいと思っています。知識をさらに学び成長させていくための基礎的な力は、大学での勉学を通じてすでに皆さんに十分備わっています。もちろん、その知識は、まだまだ素朴なものです。いま皆さんが持っている知識を絶対のものと考えて、それで世の中を割り切ることには慎重であってほしいと思います。今の自分の知識を他の人の知識やこれからさらに学ぶ知識とぶつけ合わせる、あるいは現実の経験の中で鍛えていく、そういう謙虚な姿勢をもつことによっではじめて、皆さんの知識は本物になります。そうしたプロセスそのものが学問を「己の為にす」る行為となるとともに、そこで鍛えられた知識は確実に社会に役立っていくことと思います。

最近、若者が「内向き」だと言われます。例えば海外留学に出かける若者が減っているというごく部分的な現象だけをとれば、「内向き」という表層的な評価が出てくるのかもしれませんが。しかし、私は、「内向き」かどうかは、いま申し上げたような知識に対する真摯な姿勢を皆さんが持ちつづけるかどうかで決まると考えています。この点では、皆さんが「内向き」であるとはまったく思いません。すさまじい惨禍をもたらしたこのたびの震災は、これからの日本社会の形にも大きな影響を与えることになるはずですが。新しい日本の姿を求めていく格闘の中で、知識というものに正面から向き合い続ける皆さんの姿勢が、間違いなく、次の時代を生み出す力となると信じています。皆さんのこれからのご健闘をお祈りしています。

<平成二十三年（2011）三月二十四日>



答辞

東北地方太平洋沖地震によって生じた未曾有の大災害から、いまだ日の浅い本日、卒業生全員の参加は叶いませんでしたが、こうして卒業式を催していただき、心より御礼申し上げます。また、さきほどは濱田総長より懇切な告辞を賜りまして、誠にありがとうございました。

この東京大学という学びの場において、わたしたちは先生方のご指導を受け、家族・友人など周囲の方々に支えられ、励ましを受けながら、各自の問題意識に沿って自ら考える姿勢を養い、その成果を最大限に発揮できるよう、研鑽してまいりました。そして卒業の日を迎えたいま、わたしたちは、就職して社会人としての活動を始める者も、進学して研究を続ける者も、その姿勢を、その研鑽の精華を、社会のために役立てなければなりません。それこそが、この最も恵まれた環境で学ぶことのできたわたしたちの責務であり、こんにちまでわたしたちに学びの機会を与えてくださり、そして導いてくださったすべての方々に対するご恩報じであると存じます。

わたしはこれまで比較文化論的立場から明治日本について研究し、近世から続く感性をもった人々が、いかにして近代の日本をつくり上げていったかを、考え続けてきました。深く根づいた近世の価値観を部分的に継承しながら、西洋文明との出会いの中で新たな社会を築いていった明治の人々を

卒業生総代 教養学部 川下 俊文

思うとき、わたしは翻って、現代の世界について考えずにはいられません。第二次世界大戦後に形成され維持されてきたパラダイムは急速に打ち壊され、絶えず革新を続ける情報技術は、いまや世界情勢を大きく動かす原動力となっております。そのダイナミックな流動は、わたしたちの生きる現在を混沌とさせ、将来の見通しをつけづらくしておりますが、それと同時に、これまで停滞してきた部分を打破して、よりよい世界を築くための絶好の機会でもあるはずで、それを実現するために、わたしたちはかの明治の人々のごとく、過去の価値観を取捨選択しながら、これからの世界を担う主体としての自覚を失わずに、謙虚にかつ自信をもって邁進していきたい。そして自らが学んできたことを、いかにしてそのために活かすことができるかを、絶えず意識していきたいと考えております。

わたしは大学院に進学して今後も研究を続けますが、社会の一員としての自覚のもとに、これからの世界を築く主体となる決意を、卒業生を代表して、ここに表明いたします。最後に、これまでお世話になりましたすべての方々に感謝し、皆様のご健康と、東京大学のさらなる輝かしい発展、そして何よりも、日本の震災からの一時も早い復興を心よりお祈り申し上げます。答辞とさせていただきます。

答辞

卒業生を代表して答辞を述べさせていただく前に、東日本大震災にて被災された皆様、ならびにその親族の皆様へ心よりお見舞い申し上げたいと思います。不自由な避難生活を強いられる中、協力し合って困難を乗り越えられている方々の優しさと気概は同じ日本人として誇りに思います。本日は私どもの卒業にあたり先生方のご臨席の下、このような式典を挙げていただき誠にありがとうございます。また、ただいま濱田総長より温かい励ましのお言葉を賜りましたこと一同を代表して御礼申し上げます。

ここ東京大学に入学してから本日の卒業式を迎えるまでの4年間、私たちは実に多くの方々に支えられて参りました。熱意をもって学問の面白さをご教授くださった先生方、大学生活をサポートくださった職員の皆様、私どもの4年間を支え続けてくださった家族、そして苦楽を共にし互いに高めあってきた学友にこの場をお借りして御礼申し上げます。

この4年間の大学生活で私はクラスや研究室での活動を通して様々な経験をしました。その中でも特に努力し続けることがいかに大切かということを感じております。研究では期待した結果が得られず、努力が結果につながらないため

卒業生総代 薬学部 伊藤 央樹

無力感に苛まれることは多くあります。しかしながらこうしたプロセスを継続することで失敗から受ける失望感が和らぎ、情熱がこれにとって替わることで立ち直れることを学びました。

また、本学で出会った友人と築いた尊敬しあえる関係は生涯に残る財産となりました。自分にはない価値観と豊かな才能を併せ持つ人との出会いは私の視野を広げ向上心を高めてくれました。そして何より、なににもかえ難い楽しい時間を一緒に過ごすことができました。

これら貴重な経験を積んで、本学を卒業できることを私たちは誇りに思っています。これから社会に出るものや大学に残るものと、私たちは別々の道を歩みますが、その胸中には一つの共通した想いを抱いています。これまで、家族、学校、地域をはじめとした社会全体から受けた恩を返すべく、ここで経験したことを生かして最大限の努力を尽くす所存です。

最後になりますがこの4年間でお世話になりました全ての方に重ねて御礼申し上げます。そして皆様のご健康と東京大学のご発展を心より祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。本日はありがとうございました。

平成22年度学位記授与式が、3月24日(木)に、小柴ホール(理学部1号館)において挙行された。

今年度の学位記授与式については、3月11日(金)に発生した東日本大震災の影響を考慮し、会場及び内容等を変更して、修了者数3,911名(修士課程2,800名、博士課程706名、専門職学位課程405名)のうち、各研究科各課程代表者の出席により行われた。

各研究科各課程代表者の入場後、列席者の紹介があった。開式に先立ち、東日本大震災によって尊い命を失われた多く

の方々に謹んで哀悼の意を表し、30秒間の黙祷を捧げた後、10時15分に開式となった。

濱田総長から各研究科の各課程代表者に、順次、学位記が授与された。

続いて、濱田総長から修了生に告辞を述べた後、修了生代表(経済学研究科博士課程 竹原浩太さん、医学系研究科博士課程 森川真大さん)から答辞があった。

なお、授与式はインターネットによりライブ中継を行った。

平成22年度学位記授与式総長告辞



東京大学総長
濱田 純一

このたび東京大学より、博士、修士、そして専門職の学位を授与される皆さんに、心からお祝いを申し上げます。また、この晴れの日をともにお迎えになっているご家族の皆さまにも、お祝いの気持ちをお伝えしたいと思います。

今年の学位記授与式は、例年とは異なり、各研究科修了生の代表の皆さんだけに出席してもらい、学位記の授与を行うことにしました。また、場所も、安田講堂ではなく、この小柴ホールを用いることになりました。これは言うまでもなく、東北地方太平洋沖地震、そして福島原子力発電所の事故の影響を考慮したものであり、また多数の人間が一堂に集まった場合、万一の際の避難リスクの高さに配慮したものです。この式典の様子はインターネットで中継していますので、多くの皆さまにご覧いただけていることと思います。

本日、大学院を修了する学生の数は、修士課程2,800名、博士課程706名、専門職学位課程405名です。留学生の数は、それ

ぞれの課程の内数で、248名、119名、7名です。

長い期間にわたる学生生活を終えて、これから社会に出て学術の成果を試そうとする人もいれば、引き続き研究の世界で学術の蘊奥を究めようとする人もいます。大学院において学部時代よりもいっそう深く専門的な知識を探究する機会を持ち、これから人生の新しい段階に踏み出そうとしている皆さんに対して、それぞれの分野の専門家であると同時に、「知識人」であってほしい、というメッセージを私から伝えたいと思います。

つい先ごろ、東北地方太平洋沖地震が発生して、多くの人びとにすさまじい被害をもたらしました。ここに大学院を修了しようとしている皆さん、あるいはそのご家族、ご関係の皆さまにも被害が及んではないかと、憂慮しております。この震災によっておびたしい数の尊い命が失われたことに、深い哀悼の思いを捧げたいと思います。まだ行方不明の方も多く、関係の皆さまのご心痛はいかばかりかと存じます。また、負傷し、あるいは心に傷を負われた皆さま、生活の基盤を失われた皆さまに、心よりお見舞いを申し上げます。このたび修了する皆さんの中にはすでに、さまざまな形で被災地への支援活動を行っている人たちがいると思います。ぜひこれからも、可能な活動を展開していただければと思いますし、東京大学としても出来る限りの努力を行っていくつもりです。

一言申し添えておきたいと思いますが、このたび修了する皆さんの中には多くの留学生がいます。留学生の皆さんの国からも日本に対して、お見舞いや激励、さらに緊急物資等の提供や救助隊の派遣など、多くの温かい支援をいただいています。この機会を借りて感謝を申し上げます。



いま現に非常に困難な状況にある被災された皆さまへの直接的具体的な支援にくわえて、学術という専門性を身に付けた私たちに求められているのは、これからの被災地の復興に、さらには日本全体の復興に、どうやって私たちの専門的な知識や知恵を生かしていくことができるのか、真剣に考えることであろうと思います。これからの復興は、社会インフラの整備や町づくりなどととも、生活や社会の仕組み、さらには、自然との付き合い方も含めて、私たちの生き方そのものについても改めて考えていくような復興となるだろうと思います。それは一つの時代の終わりであり、また始まりです。こうした大きな変化の時期にあっては、第二次世界大戦後の60年余だけを振り返ってみても、いくつかの節目に、個々の専門知識を活用するだけでなく、幅広い知識を基盤に、歴史的な視野のなかで時代を見る力を備え、また理念の作用力を信じることによって、時代を前に突き動かす役割をした人びとが存在したように思います。そこで私は、「知識人」という言葉に今日触れようと思ったのです。

「知識人」というのは、おそらく最近影が薄くなってきたように思われる用語です。ときどき、「有識者」といった言葉は使われますが、これは専門的な知識を備えた者といった意味合いに近く、少し違います。

この知識人という言葉語る時に思い出すのは、東京大学の創立130周年の際に、大江健三郎さんが「知識人となるために」という題名の記念講演をなさったことです。その講演の中で、大江さんは高校生時代に、あるフランス文学者の一冊の本を読み、知識人というものになりたいと考えて大学へ行こうと思った、という話が出てきます。ここで、大江さんは、「知識人とは個人の声で語る」、そして「個人のスケールで、しかしその個人の全力を挙げて、社会における自分の責任をとりとる」、「普遍的な原理に立つ人間」だということを述べています。個人であるということの大切さとともに、個性がもつひずみ、ゆがみ、欠けているところなども認識しながら発言し、なお普遍性という原理への志向を失わない、ということ、知識人の資質として強調されています。

この大江さんの言葉は、いわゆる知識人が政治的権力との緊張を失いつつあることに対する警鐘も含んでいるのですが、私は、この視点を少し広げて、歴史的な視野と理念の力への信頼を軸足に、いま目の前にある社会の枠組みや考え方との緊張感を失わないのが「知識人」だ、という風に応用させていただきたいと思います。あえてこのように、大江さんのもとの概念が持つ鋭角的な切れ味を犠牲にして拡大解釈させていただくのは、これからの日本のあり方というものを考える時に、政治的権力というだけでなく、これまでの社会の枠組みや考え方

全般と、建設的な緊張を持ちながら次の時代を作っていく役割が、「知識人」という存在に期待されるだろうと考えるからです。

すでにこれまでも、「日本の再生」が私たちの大きなテーマとなっていたのは、ご承知のとおりです。経済の停滞、少子高齢化の進行、社会的・経済的な格差の拡大、国際社会における日本の地位など、多くの議論がなされてきました。そこでは、時代の大きな変わり目を意識しながら、新しい形の社会のあり方、ものの考え方が模索されてきました。そして、このたびの大震災が、こうした議論の必要性をさらに加速することになったと思います。とりわけ、この近代化されたと思っていた社会で、これほどのすさまじい惨禍をどうして避けることができなかったのか、あるいは、原子力をどうしてもっと適切にコントロールすることが出来ないのか、これまで良しとされていたものをもう一度見直してみることが、いま求められているように思います。それは、技術の問題だけではなく、社会の仕組みの問題であり、私たちの生き方の問題であり、つまるところ、私たちの基本的なものの考え方の問題にもかかわってくると思います。

こうした時代に求められるのが、専門家であると同時に知識人である人たちです。つまり、「今あるもの」にとらわれず、自らの知的意味での全存在をかけて建設的な挑戦を行っていく人たちです。そうした知識人が多くの人びとと協働して大きな変化のうねりを作っていくことが、日本の復興を支える重要な基盤となるはずだと考えています。

大江健三郎さんが大学に入って知識人となろうと考えた頃の大学進学率は10%くらいでした。いまは、大学院に進学する人も多くなってきていますから、これからの時代に知識人になろうと志す人は、大学院を目指すということであっておかしくはありません。実際、多くの国で社会的に重要な役割を果たしている人びとの間で、修士あるいは博士といった学位をもつ人が増えているのはご承知のとおりです。そうした意味では、今日学位を授与された皆さんは、知識人となるための足がかりを得た、と言ってよいかもしれません。

もちろん、皆さんが学位を得ただけで知識人として一人前だと言うのは、言いすぎでしょう。しかし、これからのみなさんが知的な営みを続けていくことによって、これからの社会が求める知識人となっていくための基盤は、大学院という特別な勉強の機会をもったことによってすでに培われているものと思います。この基盤の上に、建設的な批判力をもった知識をどれだけ育て表現していくことが出来るかは、皆さんのこれからの意識と努力にかかっています。

さて、私は今日、被災地の復興、日本の復興ということに重ね合わせて、皆さんが知識人として活躍することへの期待を話してきました。ここにいる多くの留学生の皆さんは、若干の違和感を持ったかもしれません。しかし、ここで話した私の問題意識、そして皆さんへの期待は、普遍的なものです。皆さんの母国も、それぞれに固有の表れ方をみせつつ、私がいま申し上げた課題、つまり、これまでの社会的な仕組みや生き方、ものの考え方を大きく見直さなければいけない状況に直面しているはずです。世界的な規模での変化の時代にあって、やはり留学

生の皆さんも、それぞれの国の文脈において、「知識人」であることを求められているのは間違いないと思います。

これから長い人生を送る皆さんにとって、この学位記授与式の記憶は、大震災のすさまじい惨禍の記憶とともに残ることになるはずです。その記憶をバネとして、「知識人」として成長し、新しい社会を作るために先頭に立って活躍する皆さんの姿を楽しみに、私の告辞を終えることとします。

<平成二十三（2011）年三月二十四日>



本日は濱田総長をはじめとする諸先生方のご臨席のもと、このように大変な時期にもかかわらず学位記授与式を催していただきましたこと、修了生を代表いたしまして、篤く御礼申し上げます。また只今濱田総長より激励のお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

過日、日本は東北地方太平洋沖地震という未曾有の大災害に襲われました。既に皆様も報道等でご存知かと思われませんが、東北地方を中心に甚大な被害が生じております。修了生一同、被災された方々に謹んでお見舞い申し上げるとともに、犠牲者の方々のご冥福をお祈り申し上げます。

私が2006年に東京大学を卒業し、東京大学大学院に進学してから様々な社会の変化を経験して参りました。中でも、2007年に顕在化したサブプライム・ローンに関連する問題、そして2008年のリーマン・ショックに端を発する世界経済の混乱・停滞は、我々の社会に大きな課題をもたらしました。こうした課題は、私の専攻している経済学・ファイナンスの分野にも密接に関連し、その研究環境に大きな影響を与えました。眼前の変化に翻弄され、その解答・解決を求めることに急ぐあまり、研究の本質を見失いそうになることもございましたが、そんな私を、時に叱咤激励し、時に議論を戦わせ、また時に温かいお言葉で支え導いてくださったのは、ここにご臨席を賜った諸先生方、そしてともに学問の道を歩み始めた仲間達でした。本学における素晴らしい研究環境に加えて、こうした周囲の方々にも恵まれ、表層的な知識にとどまらず「知」の本質を時間をかけて学ぶことができた幸運に、今新たな旅立ちを迎え、改めて深く感謝しております。

「研究」とは「研ぎ、究める」と書きます。東京大学がその先頭に立ち、過去から連続と受け継がれてきた「『知』の創造」を研ぎ澄まし、さらに究めていくことが、これからの私達に課せられた使命であると考えております。現代における

「『知』の創造」においては、高度に専門化された各分野の知識はもちろんのこと、それぞれの分野の垣根にとらわれず専門知識を統合して新たな価値を作り出すこともまた必須であります。冒頭に申し上げました未曾有の大災害は、災害への予防及び対策、社会システムやインフラの整備及び運用、そして経済活動や生活のあり方等について、現代社会の根本を揺るがす数多くの課題を、日本のみならず世界に突き付けることとなりました。こうした大変困難な課題を克服し、新たな時代を力強く切り拓いていくためには、私がこれまで学んで参りました社会科学はもちろんのこと、様々な科学技術や人文学・教育の見地からの貢献が必要となることは想像に難くありません。

私達は本日、東京大学の各専門課程を修了する多くの仲間とともに、社会へ巣立っていきます。この晴れの日、私達一人一人が日本、そして世界の次世代を担っていく決意を新たにするとともに、率先して学問領域間・産学間の連携を図り、社会へと還元していくことで人類社会の真の発展に寄与できるよう、弛まぬ努力を続けていく事を、修了生一同を代表してお約束致します。

残念でありますのは、近しい方々が被災され、いまだ不安な日々を過ごしつつ新たなスタートを切らなければならない仲間がいることであります。改めて東北地方太平洋沖地震の被災者の方々にお見舞い申し上げ、犠牲者の方々のご冥福をお祈り申し上げます。そして最後になりますが、これまで私達をご指導下さいました濱田総長をはじめとする諸先生方、職員の皆様方、先輩方や友人達、そして常に温かく見守り支えて下さった御家族・御親族の皆様、心より御礼申し上げます。皆様方のご多幸と東京大学の更なるご発展を祈念致しまして、答辞とさせていただきます。本日は誠にありがとうございました。



はじめに、先日の震災により尊い命を失われた方々に深く哀悼の意を表しますとともに、被災された方々が安心した生活を取り戻せるよう、一日も早い復興を心からお祈り申し上げます。

本日は濱田総長をはじめ、諸先生方の御臨席を賜り、このような学位記授与式を催して頂き、修了生を代表いたしまして、心より御礼申し上げます。また、只今濱田総長より激励のお言葉を賜りましたこと、重ねて御礼申し上げます。

臨床医であった私が東京大学大学院に進学したのは四年前のことでした。時流に乗った研究内容を真っ先に考えた私に対して、先生方は、物事の根底にある真理の追及を促して下さいました。また、社会への還元、医学の分野では病気の患者さんの助けになることの重要性も教わりました。ある病気の発生機序を明らかにすることが自分の学位研究となりましたが、私が学位を取得し、一人の研究者としてこの式典を迎えられたのは、先生方の熱心なご指導と、多くの先輩方や友人達の助けのおかげだと考えております。

また、この四年間に海外の研究者に接する機会に恵まれました。特にスウェーデンには長い期間にわたり滞在し、世界各地から集まる研究者と議論することができました。研究面にとどまらず、様々な違いを実際に肌で感じましたが、改めて気付いたのは、日本という国の素晴らしさであり、勤勉で、真面目な国民性でした。

先程スウェーデンという国の名を挙げました。今日では福祉国家のモデルとして登場することが増えてきたスウェーデンですが、経済の面でも優れた成果を上げております。1990年代にスウェーデンにも不況の波が押し寄せた時、彼らは景気回復と財政再建の二つの兔を追い、両者とも手に入れてしまいまし

た。本学経済学部名誉教授の神野先生は著書の中でこのように述べております。「20世紀から21世紀への峠を、スウェーデンは『自信と楽観主義』とともに越えた」（神野直彦著『二兎を得る経済学——景気回復と財政再建』より一部引用）。大きな困難を前にして、彼ら特有の楽観主義と、新たな分野への大胆な投資が功を奏したのではないかと思います。

現在の日本は、社会全体に数多くの困難と課題を抱えています。あらゆる分野に悲観論が広がり、なかなか光明が見えません。しかし、歴史的、文化的、宗教的背景の異なる別の国のシステムをそのまま取り入れたとしても、我国の諸問題に対する有効な処方箋になるとは限りません。また、先程述べたスウェーデンも、現在では移民や多文化主義の負の側面が顕在化しつつあり、新たな課題に直面しています。ただ、彼ら特有のものかもしれないその楽観主義は、困難に立ち向かい、解決策を見出していく上でも必須のものだと考えます。

東京大学で各専門の学位を取得し、社会へと巣立っていく私達は、一人一人が本学で培った能力を発揮し、社会からの負託に応え、日本のリーダーとして活躍することを目指さねばなりません。それとともに、人類全体が直面する問題の打開に向けて、人間の知の可能性を信じ、未来に希望を持って進んでいかねばならないと、決意を新たにしています。

最後に、恵まれた環境のもとで今日まで私達を支えてくださった、先生方、職員の皆様、先輩方、友人達、そして暖かく見守るとともに支えて下さった家族の皆様に、修了生一同、心より御礼を申し上げます。皆様の今後一層のご活躍と更なる発展を祈念し、答辞とさせていただきます。



平成23年度東京大学入学式が、4月12日（火）に、小柴ホール（理学部1号館）において挙行された。

今年度の入学式については、3月11日（金）に発生した東日本大震災の深刻な影響を考慮し、会場及び内容等を変更して、入学者数3,155名（文系1,304名、理系1,851名）のうち、各科類代表者の出席により行われた。

各科類代表者の入場後、列席者の紹介があった。

開式に先立ち、東日本大震災によって尊い命を失われた多くの方々に謹んで哀悼の意を表し、30秒間の黙祷を捧げた後、11時10分に開式となった。

濱田総長から入学生に式辞が述べられ、続いて長谷川教養学部長が式辞を述べた。

式辞の後、久保正彰日本学士院長より祝辞をいただき、入学生総代（理科Ⅱ類 森谷浩幸さん）による宣誓があった。

なお、入学式はインターネットによりライブ中継を行った。



平成23年度東京大学入学式総長式辞



東京大学総長
濱田 純一

この春、東京大学に入学なさった皆さん、おめでとうございます。また、これまで皆さんの大変な受験勉強を支えてこられたご家族の皆さまにも、心からお祝いを申し上げます。

今年の学部入学者は、三一五五名です。その内訳は、文系の新生が一三〇四名、理系の新生が一八五一名となります。またこのうち外国人留学生は、三九名です。これから皆さんがその一員となる東京大学は、知的な刺激と知的なチャンスに満ち溢れています。皆さんが、国民から東京大学に与えられている、この素晴らしい環境を存分に活用し、国民に対して、そして世界の人々に対して、知的な責任を全うできる人間として成長なさることを願っています。

本年度の入学式は、例年とは大きく異なり、武道館での開催ではなく、この小柴ホールで代表の皆さんだけに集まってもらう、小規模な式典としました。これは言うまでもなく、東日本大震災とその後の状況を考慮したものです。今年は入学式を中止する大学も少なくなく、東京大学もさまざまな可能性を検討してきましたが、最終的に、このような形で実施することとしました。

このように小規模でも入学式を行うことにした理由としては、これまでの厳しい受験生活を終えて大学生活を始めようとする、人生の大きな転換点というタイミングで、皆さんが気持ちを新たにスタートできるきっかけとなる場が必要だろう、という思いがもちろんありました。しかし、それ以上に、このたびのすさまじい大震災の惨禍を、皆さんの生涯にわたる知的な生活の原点にあるものとして心に刻み込む機会、そして、膨大な人々の悲しみや痛み、苦しみを正面から見つめ、その惨禍と皆さんがこれから学ぼうとしている知識とのかかわりを、真剣に考え

てもらふ重要な機会という観点から、むしろ積極的にこうした場を設けるべきだと考えました。

東日本大震災による人的被害は、昨日の段階で、死者が一三一三〇人、行方不明者が一三七一八人という数に上っています。想像を絶する数字です。ただ、数字というものは全体の規模感を直観的に理解するには有用ですが、往々にして、現実の被害の生々しさを抽象化してしまうきらいがあります。一三一三〇人、一三七一八人という数字をみる時に、この大きな数字を構成している一人ひとりの方々が、ついこの間まで皆さんと同じように生活を送り、喜び悲しみ、生きていらしたことを想像してもらいたいと思います。それが一瞬にして失われたことの重さを、深く受け止めて下さい。また、幸いに命をながらえた方々も、治療を受けたり不自由な避難生活を送ったり、生活再建の厳しい現実と直面しています。皆さんがこれから知識というものにかかわっていくときに、そうした「現場への想像力」をつねに持ち続けてもらいたいと思います。

たしかに、被災された方々や被災地という現場への想像力をたくましくすればするほど、皆さんは、その重さに打ちひしがれ、茫然自失に陥るかもしれません。しかし、だからといって、現場への強い思いから逃げるのではなく、その重みに耐えて前に進んでいくのが、知識というものにかかわる私たちの使命です。今日、大震災による被害がまだ続いている、決して終わっていない中で入学式を迎える皆さんには、この地震によって起こった事実を、たんなる数字や紙の上の知識、抽象化された知識としてではなく、生きた体験として自らの心に刻み込んでもらいたいと思います。それによってこそ、皆さんがこれまで学んできた知識、そしてこれから学ぶ知識を、本当に人々に幸せをもたらす力として成熟させていくことが出来るはずで

ほとんどの皆さんにとって知識というのは、受験勉強の中で抽象的なものであったと思います。それはそれでよいのです。知識というものは抽象化されることによって、多くの人々に時代を越えて伝えられていきます。また、直接的な経験とは切り離された知識を、集中的に蓄積していく時期というのも、人生の中で間違いなく必要です。大学でのこれからの勉強もまだ、すぐには現場とのかかわりを意識することは難しいかもしれません。しかし、そうして学んだ知識が現場と強いかわりを持つことを、これからの人生の中で皆さんは、いずれ気付いていくだろうと思います。

私自身の学生時代の経験を振り返ってみると、知識が社会の現場で具体的に意味をもつことを感じたのは、公害問題とかわった時でした。「公害関係の立法過程」というテーマのゼミ

に参加していた時のことですが、法律の制定過程に影響を与えるさまざまなステイクホルダーについて、ゼミ生がそれぞれ分担して東京大学新聞に記事を書くことになりました。私は労働団体を担当しましたが、その折に熊本県の水俣に行って、原因企業の労働組合の人たちへのヒアリングを行ったことがあります。これは、私が最初に自分の勉強の成果を公表したという意味で、思い出深い機会なのですが、それ以上に、自分が学んでいる知識が社会的・現実的なものであることを、はじめてはっきりと意識した機会でした。皆さんにも在学中に、どのような形であれ、自分の知識が現場とかかわる経験をしてもらえると、素晴らしいと思います。

それでは、私たちは、このたびの東日本大震災がもたらした事態に対して、どのようにかかわることができるのでしょうか。皆さん、そして皆さんのまわりの人たち、そしてすべての国民が、また世界の多くの人々が、自分がこの惨禍に対して何を出来るのだろうか、自ら問うてみたことと思います。私も、個人として、また東京大学として、何が出来るのか、ずいぶん悩みましたし、今も考え続けています。人々が、肉親を失った悲しみと、あるいは生活基盤を破壊された苦しみと格闘している時に、大学の拠って立つ知識というものが何を出来るのか、無力感を感じることもあります。また、知識よりも、食料、水、毛布、あるいはガソリン・灯油といった援助物資の方が、はるかに目の役には立つように感じます。

そうした中であって、東京大学でも、ボランティアとして活動しはじめている皆さんがいることを、心強く感じます。もちろん、ボランティアの活動では、必ずしも自分たちのこれまでの知識が役立つわけではありません。子どもたちへの教育や医療支援、あるいは法律相談など、自分の知識がすぐに役立つこともあれば、家の中に流れ込んだ汚泥の除去や瓦礫の片づけ、あるいは介護や物資の積み下ろしなどの作業に直面して、とまどうことが多いかもしれません。しかし、そうした作業こそ、今を必死で生きている人々が切実に求めているものであるのを知ることは、皆さんがこれから、知識のあり方、社会が必要としている知識の多様さを考えていくために、得難い経験となるはずで

自分たちの専門知識を生かして活動しようと動き出している教員たちもいます。附属病院の医療チームはいち早く現地入りしましたが、いま、地域での高齢者も含めた生活再建や町づくりへの協力、あるいは、漁業・農業の復興支援など、被災地の復興に向けた活動も始まろうとしています。私もつい先日、たまたま宮城県沖で大きな余震のあった日ですが、救援物資の搬送と、東京大学としての今後の復興支援について打合せのため

に、岩手県の大槌町へ行ってきました。大槌町は、ご存知のように大津波で町が壊滅状態に陥ったところですが、ここには東京大学の気象海洋研究所の研究センターがあり、長い間、地元の人たちとの親密な交流が続いてきたところです。また、これまで東京大学の研究者が地域の人たちと心の交流を重ねてきた釜石市、そして遠野市も訪ねてきました。遠野市はやや内陸部で比較的には被害が少なかったところですが、大槌や釜石など沿岸部の被災地への後方支援基地として、市全体が救援活動に全力を挙げておられます。その熱い思いとご奮闘には、頭が下がりました。

こうした活動を紹介すると同時に皆さんに申し上げておきたいのは、このように、被災地の現場で実際に行動することは大切ですが、被災地に行かなければ何の役にも立てないのだと考えるのは、間違っているということです。被災地の状況は、いまメディアを通じていろいろな形で伝わっており、すさまじい被害の光景はもちろん、被害の苦しみ、悲しみ、その中での人々の勇気、思いやり、きずな、さらにこれから復興に向けて求められている事柄など、皆さんは十分に理解しているものと思います。そうした現場からの情報を自分自身の中で徹底的に消化し、吸収し、そのようにして、いわば「身体化された現場」との緊張感を、皆さんがこれから知識を学ぶ時に、また

それを社会で生かしていく時に、絶えず持ち続けることも、このたびの惨禍に対する行動として同じく重要なものです。

この東日本大震災がもたらした惨禍からの復興には、これから長い年月がかかるだろうと思います。そして、それは、日本社会全体の活力の復活の動きとも重なっていく、非常に大規模なものとなるでしょう。いま入学したばかりの皆さんも、大学を卒業してからも長く、直接的にしる間接的にしろ、この復興のプロセスにかかわっていくことになるはずですが、また、ぜひともかかわっていただきたいと思いますが、そうした見通しを持って、今あせることはありません。

すぐにボランティアなどの行動に出るのもいいでしょう。そのための枠組みを東京大学も準備しつつあります。昨日、大学として救援・復興支援室をスタートさせましたので、これからの現地への継続的な支援の窓口になると考えています。しかし、この大学という場にあって、じっくりと自らの知的な力を磨き続けることも大切です。現場への想像力、現場との緊張感さえ忘れなければ、皆さんは被災地の復興に、そしてこの国の未来に、さらには世界の人々のために、間違いなく大きな貢献が出来るはずですが。

皆さんのこれからのご健闘を祈って、式辞といたします。

<平成二十三（2011）年四月十二日>



式辞



東京大学教養学部長
長谷川 壽一

この度、東京大学へ入学した皆さん、誠におめでとうございます。皆さんの入学を教養学部の教職員を代表して、心から歓迎いたします。

まずは、ここ小柴ホール、そして、インターネットを通して入学式に参加されている皆さまとともに、この度の東日本大震災で被災された方々に、心よりお見舞い申し上げます。また、犠牲になられた方お一人お一人と、その関係の皆さまに対し、心より哀悼の意を表します。

その上で、皆さんをお迎えする教養学部長として、三人の東大教授の詩や言葉を引用しつつ、歓迎の言葉を述べたいと思います。

新入生の皆さん。平成二十三年入学の皆さんは、日本社会にとどまらず世界社会の、真に大きな転換期に立ち向かう世代となります。

惨禍の一瞬が私たちの生を「その前」と「その後」とに分断した。

これは、教養学部の松浦寿輝教授が書かれたafterwardと題する詩の冒頭の一節です。

「その前」と「その後」については、本学先端科学技術研究センターの御厨貴教授も、先日の新聞紙上で次のように論評されています。要約してご紹介します。

「3.11」は、日本をそして世界を変える。あたかも「9.11」が、アメリカをそして世界を変えた以上に。大地震による大津波と、それによる原発事故という、未曾有の天災と人災の複合型災害は、この国をとことん打ちのめした。

「3.11」は、これまでの日本近代を捉える文脈に激しい変動を及ぼした。まずはこれで、長い余りにも長い「戦後」に、

ようやくピリオドが打たれる。第二次世界大戦で負の刻印を押され、その後は戦争体験がないため、内外ともに日本近代を区切る節目となった「戦後」。今や、その「戦後」からの暴力的開放が生じた。

大震災と原発災害という強烈な共通体験に刻印された日本は、「災後」の時代を歩み始めている。「戦後」から「災後」へ。それは、日本が「戦後」ずっと追求し実現してきた“高度成長とその後”の社会——、“終わるべき”と何度となく叫びながら、そこから遂（つい）に脱出できなかった、高度成長型の政治・経済・文化の突然の終焉（しゅうえん）に他ならない。

原発災害は、いまなお危機的な状況が続いているので、「災後社会」と呼ぶにはまだ早いように思います。ただし、「3.11」が節目となって、日本の近代史が大きく塗り替えられたことは御厨教授のご指摘の通りです。阪神淡路大震災もまた大惨事であったことは言うまでもありませんが、今回の大災害は、震災地域の広さ、巨大津波の圧倒的な破壊力、そして原子力エネルギーの管理の困難さとその災害コストの途方もない大きさを露呈したことにおいて、まさに未曾有のものでした。

精神面でも、あの震災の日以降、私たちは深い悲しみや絶望、そして無力感にあらがいがながら生きています。

先の松浦教授の詩の最後の部分です。

心の水面を波立たせず 静かに保つ
少なくとも保っているふりをする
その慎みこそ「その後」を生きる者の
最小限の倫理だと思うから

さて、皆さんにとっては、前期日程試験の合格発表の翌日が、「その日」でした。後期日程試験は「その日」の翌々日でした。皆さんの人生の中で東大入学と「その日」は生涯重なり合いながら語られていくことでしょう。

では、大震災後の東京大学第一期生にあたる皆さんはこれから何ができ、また何をすべきなのでしょう。今この時点にも、ボランティア活動の現場に、すぐに、飛んででも、向かいたいと思われる方も少なからずおられると思います。東京大学としても、様々な形で具体的、直接的な復興支援を行っていますし、教養学部でも学生によるボランティア活動を後押しする長期的な方策を計画しているところです。

ただし、新学期が始まったばかりの新入生の皆さんの大半は、今、自分たちがすべきことは、学業を通じて、復興や再生に貢献できる基礎学力と教養を養うことだ、と考えていることと

思います。私もまた、同様な思いです。

教養学部としては、皆さんが大学での学びの第一歩をきちんと踏み出せるよう、また日々の学業が着実に進むよう、教職員が一丸になって、支援していくことが、今の時点での務めだと心得ています。一方で、しかし、教養学部では、新入生の皆さんと、この災害を共に語り、考え、これからどのような行動を起こすべきかについて議論する機会を設ける準備もしています。そのときには、是非、皆さんの真摯な思いを聞かせて下さい。

今回の大震災とその後の原発災害をはじめとする混乱が、人間の思慮と知、そして科学技術の至らなさや限界を白日の下に晒したとしても、災害後の社会を構想し、創出していく私たちにとって、最善のツールが思慮と知、そして科学と技術であること、それは変わりはありません。したがって、学術に関わる者の社会的責任はこれまで以上に大きなものとなります。私たち、すなわち教員と学生は、叡智を結集し、道なき道を創る難壁に挑むことを求められています。

少し具体的に皆さんに問いかけてみたいと思います。終戦直後の焼け野原の中で、先人達は自由と民主主義と豊かさという「光」に導かれて、繰り返す奇跡的と形容される戦後復興と高度成長を成し遂げました。翻って今、今回の被災地と日本社会にはどのような「光」が見えるでしょうか

折しも、一昨年、本学社会科学研究所の玄田有史教授らが編集された、シリーズ『希望学』という本が東京大学出版会から刊行されました。希望というものを、「行為を通じて具体的に なにかを実現したいという望み」とゆるやかに定義し、その

希望が個人と社会の中でどのように語られるかという社会調査を通じて、希望学という新しい学際研究が生まれました。社会科学研究所をあげての希望学の社会調査が、被災した岩手県釜石市を舞台にして立ち上がっていたということは、めぐりあわせとはいえ、象徴的です。玄田先生は、今回の大震災の前に次のように述べています。

希望に関するメッセージとは、未来に起こしてはならないリスクのイメージを共有することの大切さです。特に政治の役割は、世の中の人たちに一律に希望を押し付けることではない。むしろ過去の凄惨な歴史を振り返り、今後起きてはならないことを、起こらないよう行動することです。だからこそ過去の厳しさに向かい合わない希望は描けない。

実に予言的な言葉です。社会科学研究所の先生方は、今また、被災地の釜石に向かい、新しい希望について、地元の人々と再び語り合いはじめたところです。

教養学部長からの入学式の式辞としては、晴れやかなお祝いの言葉を贈れず、いささか心苦しく思っています。しかし、皆さんが時代の節目に巡り会った特別な新入生であるからこそ、ぜひとも皆さんの言葉で希望について語って欲しいと願っています。

震災の「その後」の日本の開拓者となる皆さんを応援し、私からの式辞といたします。

<平成二十三（2011）年四月十二日>



祝辞



日本学士院長
久保 正彰

私は皆さんにお喜びとお祝いの言葉を、ただそれだけ述べたいと思ってまいりました。

今日、東大生として第一日を迎えた皆さん、本当にお目出度う。こうして希望に満ちた皆さんの顔を前にして、お祝いの言葉を述べる事が出来るのは、私にとってはこの上ない喜びであり、また大層名誉なことでもあります。皆さんにとって最初の東大の日であるように、実は私にとっても、今日は生まれて初めて出席する、記念すべき東大入学式であり、こうして“初めて同士”が会う場で、祝辞を述べ、皆さんの前に広がる洋々たる新しい世界を思い描きながら、喜びを共にできるからであります。

私は、1949年、皆さんと丁度同じ十八歳の頃、日本の高校を中退してアメリカにひとり渡りました。そして、アメリカの高校生と一緒に統一試験を受験してハーヴァード大学に入り、四年間古代ギリシャ語・ラテン語とサンスクリットを勉強して卒業しました。ある寒い冬の朝早く、背を丸くして構内を歩いていると、頭の上から、“ハーヴァードの学生は背筋をまっすぐに!”と言う声が響いてまいりました。驚いて振り向き、仰ぎ見ると、後ろには名総長として誉れ高いコナント先生が立って睨みつけておられた、そのことなどを懐かしく覚えています。その後オックスフォードとハイデルベルグで同じような勉強をして、六年後に日本に帰国しましたが、その時はまるで浦島太郎の心地でありました。その後東大の大学院に入り、呉茂一先生、高津春繁先生、村川堅太郎先生はじめ諸先生からご指導を頂き、勉強を続けようと努力しました。しかし、その頃は未だ東大文学部には、古代ギリシャ・ラテンの文献を学ぶための専門学科も、研究室もなく、研究資料の集積も、皆無に近い状態が1969年まで続いておりました。

しかし、そのような殆ど未開拓の分野においてさえも、その頃の東大には、ハーヴァードやオックスフォードやハイデルベルグなどの教室では、絶対に出会うことのなかった宝物がありました。それは東大文学部の学生たちでした。その頃本郷通りに『ルオー』という喫茶店がありましたが、そこで、偶然に、コロスとかスタシモンとかいうギリシャ語を交えながら議論している学生たちに出会ったのです。彼らは、それまで日本では誰も、見た事も聞いた事もない古代ギリシャ悲劇というものを、自分たちの知恵と体で創り出し、舞台上で上演してみようという途方もない考えに燃え立つ、十名ばかりのグループの仲間でありました。その中心には、文学部美学の竹内敏雄先生の『アリストテレスの芸術論』に出ている学生たちがいました。先生の講義の主題は、古代ギリシャ悲劇の構造分析でした。

丁度その頃、新関良三先生の大著「ギリシャ・ローマ演劇史」に対して日本学士院から恩賜賞(1958)が贈られ、古代の西洋演劇が以前よりも、身近に感じられるようになりました。やがて竹内敏雄先生の「アリストテレスの芸術論」にも、学士院賞(1960)が授与されます。しかしそれは雲の上の学界の話であって、まだその頃日本では、誰も、劇場に座って、古代のギリシャ悲劇が上演される有様を、自分の眼で見た事のある人はいなかったのです。“自分達の眼も、耳も、捉えた事の無い古代ギリシャの演劇作品を、如何して芸術論の対象として論ずることができようか、たとえアリストテレスが何と言おうと!”この問いに突き動かされた文学部の学生たちは、駒場と本郷の有志を総動員して、『東京大学ギリシャ悲劇研究会』というグループ(略称東大ギリ研)を結成しました。そして自分達の知恵と体を酷使して、その研究成果をギリシャ悲劇の名作『オイディプス王』の原型の復元と上演という形にまとめて、1958年の東大五月祭の企画として提案し、採択されました。この劇作は、国難打開のために善かれと全力を尽くす王が、国の災の原因は、あろうことか自分自身の出生にまつわる呪いにあったことを、自分の手で暴き出し、自らを罰し追放する、という皮肉な筋立てに成っています。この無謀ともいふべき東大生たちの企てを聞いて、盲蛇にも怖じずとはこのこと、と思った人も少なくなかったでしょう。

しかしこの無謀な学生たちとの偶然の出会いは、私にとっては、一生一度の出会いでありました。彼らの蛮勇に満ちた企てこそが、当時欧米いづこの大学に於いても見付けることが出来なかった、宝物でありました。また、東大の教授陣も学生部もいち早くこの宝物の可能性を信じて、惜しみない援助を与えてくれました。最初、この悲劇作品は五月祭の日に、本郷の図書館前の広場で上演される計画でしたが、学生部はこれを日比谷

の野外劇場で上演されるように配慮してくださいました。その御陰でその後の五年間、超割安な使用料のもとに毎年六月初旬、日比谷で東大ギリシャ悲劇研究会の上演が実施されたのです。

年間通じて毎週水曜日の研究会や上演企画会議が開かれましたが、その場所には、当時駒場の裏にあった、吉岡力先生の歴史教育研究所が無料で提供され、公演日間ちかになると、本郷の湯島幼稚園が立ち稽古の場所を提供してくれました。そののみか、毎年ただ一回のギリシャ悲劇研究会の公演のために、東大内外から惜しみなく寄せられた絶大なご協力を忘れることはできません。高名な作曲家たち、振り付けの専門家たち、衣装制作のために考証を尽くされた衣装家たち、本邦最初のギリシャ悲劇の仮面を創り出した彫刻家たち、音響・照明効果の専門家たちの皆さんにもみな、ただ同然で手伝って頂きました。また『朝日新聞』が毎年、記事として取り上げてくれたことも、『アサヒグラフ』が大きい紙面を割いて舞台写真を紹介してくれたことも、上演切符の売り上げの助けとなりました。一枚百円の切符売りのために奔走してくれた東大はじめ都内諸大学の学生さんたちの姿も忘れられません。演目は『オイディプス』の後、『アンティゴネー』(1959)、『プロメテウス』(1960)、『アガメムノン』(1961)、『フィロクテテス』(1962)と続きました。そして、毎年六月初旬の夕べ、日比谷の劇場を埋め尽くし、日比谷の森を動かした、2000人余りの熱心な老若の観衆から頂いた激励にも、あらためてお礼を言いたい気持ちで一杯になります。

それら全ての人々の有難いご親切の御陰で日の目を見ることとなった、一年一回の東大ギリシャ悲劇研究会の公演活動は、1968年公刊された岩波の『近代日本総合年表』1961年6月3日の欄にも記録されています。ちなみに同書の索引によれば、これは古代ギリシャ文学に関する唯一の記載項目であります。その後五十年経て今も、日比谷の余韻はなお消えず、昨年十二月、ベルリン大学において『日本におけるギリシャ悲劇の復活』と題するセミナーが開催された折りに、東大ギリシャ悲劇

研究会の活動が詳しく取り上げられたという、嬉しい知らせにも最近接しております。

東大ギリシャ悲劇研究会の記憶は、五十年昔、私自身が東大と東大生の皆さんに同化していった記憶でもあります。それはまた、ギリシャ悲劇研究会の諸君と一緒に過ごした五年間のあいだに、私たちが創り出した若々しい東大の、情熱と実行力の漲る姿として、今も変わらずに生きています。そのような宝物にめぐり会えた大なる幸運の御陰で、私は今日此处で、新しい東大生の諸君に心からのお祝いを申し述べる事が出来たのだと思っています。1969年東大紛争の際に安田講堂が放水によって水浸しになった時、学生部に保管されていたギリシャ悲劇研究会の悲劇仮面・衣装・大道具・小道具の類いは、水浸しになり、泥まみれになって、みな消えてなくなりました。しかし、放水によって消えることのないものがあります。眼にみえぬもの、耳に聞こえぬものに向かって鋭く思いを定め、追いつめてそれを捉え、それに新しい形を与えて表現していく学問の炎は、水浸しになっても簡単になくなってしまふものではありません。敢えて言うならば、この炎、燃えさかる火こそは、東大があり、東大生が東大生であるかぎり、文理の分野の別を問わず、いたる処で勢いよく燃え続けて行く炎であると私は信じて疑いません。事実、私が長い間お世話になっておりました文学部の西洋古典学研究室はこの炎と水の真っ只中から誕生し、今日に至っています。しかしながら、その炎によって、これからの、新しい自分達の大学を創り出すことが出来るのは、今日から東大生となる君たち自身の心意気と実行力以外の何者でもありません。

大学は与えられるものではなくて、自分たちが創っていくものであります。君たちの出発を祝し、今日からの四年間が、君たちにも新しい宝物の発見を齎し、君たちに新しい大学創出にいたる道を開くこととなるように、心からの祈りをこめて、私からの祝辞とさせていただきます。

<平成二十三年(2011)四月十二日>



(写真撮影：尾関裕士)

平成23年度東京大学大学院入学式が、4月12日（火）に、小柴ホール（理学部1号館）において挙行された。

今年度の入学式については、3月11日（金）に発生した東日本大震災の深刻な影響を考慮し、会場及び内容等を変更して、入学者数4,627名（修士課程2,909名、博士課程1,348名、専門職学位課程370名）のうち各研究科各課程代表者の出席により行われた。

各研究科各課程代表者の入場後、列席者の紹介があった。

開式に先立ち、東日本大震災によって尊い命を失われた多くの方々に謹んで哀悼の意を表し、30秒間の黙祷を捧げた後、13時35分に開式となった。

濱田総長から入学生に式辞が述べられ、続いて長野薬学系研究科長が式辞を述べた。

式辞の後、アンソニー・J・レゲット イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校教授より祝辞をいただき、入学生総代（教育学研究科 稲井智義さん）による宣誓があった。なお、入学式はインターネットによりライブ中継を行った。



平成23年度大学院入学式総長式辞



東京大学総長
濱田 純一

このたび東京大学大学院に入学、進学なさった皆さん、おめでとうございます。また、ともにこの日をお迎えになったご家族の皆さまにも、心からお祝いを申し上げたいと思います。

この四月の大学院入学、進学者は、全体で四六二七名です。その内訳は、修士課程が二九〇九名、専門職学位課程が三七〇名、そして博士課程が一三四八名です。また留学生は、このうち五三四名で、全体の一一%あまりを占めています。皆さんがこれから、学問研究のさらに奥深い世界で大いに活躍なさることを願っています。

例年ですと大学院の入学式は、武道館で行われます。しかし、今年は、この小柴ホールで、各研究科から代表の皆さんだけに出席してもらい、ごく小さな規模で挙行することとしました。これは言うまでもなく、東日本大震災と、その後の状況を考慮したものです。

今年の入学式をどうするか、中止の可能性も含めてさまざまな観点から検討を行った結果、このような形で式典を実施するという判断を下しました。その理由として、これから学問研究の新しいスタート台にたつ皆さんが、気持ちを引き締める場がやはり必要だろうという思いが、もちろんありました。しかし、それと同時に、そしてそれ以上に、こうした時期だからこそ、これから皆さんがさらに深くかかわっていかようとしている学問、とりわけ「科学」というものの社会の中での立ち位置を、しっかりと確認しておく機会を設けるべきだと考えました。

科学という言葉、私たちはいまごく日常的な言葉として用います。また、皆さんは、学部、あるいは修士課程での勉強・

研究を通じて、科学というものについて、それぞれのイメージを形成してきていることと思います。私自身振り返ってみると、科学という言葉については、おそらく皆さんの多くと同じように、子どもの頃から科学雑誌などで何とはなしのイメージを持っていました。ただ、それは、自然現象や技術工作の分野でもっぱら使われる言葉、といった感覚でした。それだけに、大学に入ってはじめて、「社会科学」という言葉を聞いて、社会にかんする研究の分野でも科学というものがあるのかと、大変驚いたことを覚えています。

今日、科学という時には、自然科学を指す狭い意味で用いられることもあります。より広義には、概念、論理、証明の厳密さという方法によって、特徴づけられる学問であると言ってよいと思います。さらに言えば、そうした概念の広がりの中では、学問と科学は基本的に同義と言うことも出来ます。今日は、こうした広義における科学という用語法を前提に、お話ししたいと思います。

科学が果たした歴史的な役割という観点から見た時に、今日的意味での科学の誕生が、非合理的な心理や考え方、行動様式に囚われがちであったとされる、ヨーロッパ中世世界からの脱却の場面に位置することは、ややステレオタイプに過ぎるかもしれませんが、よく知られているとおりです。ルネサンスの精神的土壌の上に展開された一七世紀のいわゆる科学革命は、天動説から地動説への転換に代表されるように、人々の世界観やものの考え方に根本的な変化を生みだしました。こうした傾向が自然科学に限らず学問全般に見られることは、人類の主知主義的合理化の発展を描く中でマックス・ヴェーバーが用いた、「魔術からの解放(Entzauberung)」という言葉でも知られています。

もっとも、このような「魔術からの解放」という科学の役割は、必ずしもヨーロッパにおける近世の始まりという、遠い話にとどまるわけではありません。第二次世界大戦後の日本においても、この「科学」に対する一種の渴望と呼んでもよいような空気が生まれました。こうした空気は、とくに社会や法、さらには歴史を対象とする分野において、科学という視点の重要性が強調された状況に典型的に示されています。それは、戦前の神話的な歴史観、権威的な国家体制、あるいは情緒的な共同体としての社会観などに対する反作用であったことは、言うまでもありません。

このような経緯を経ながら、日本でも科学は、その制度的発現による社会の近代化、そしてその技術的発現による高度成長への貢献を通じて、人々の信頼を勝ち得てきました。魔術からの解放としての意味のみならず、科学は、社会の進歩、経済の

発展にとっての原動力、シンボルとして、多くの人々に受け止められてきたのです。もちろん、個々にはさまざまな議論が、原子力開発、環境破壊、臓器移植や遺伝子操作などの問題をきっかけに行われてきました。しかし、科学の意味そのものを根本的に疑う議論は、ほとんど無かったように思います。

最近において、科学の意味、ということに対する問題意識が広がったのは、意外な方向からでした。皆さんもご承知のように、科学研究にかかわる予算について、ここ数年来の政府予算の編成過程で、削減の動きが出てきました。それを、科学の進歩ないしその社会的意義に対する無理解、あるいは科学研究者の説明不足といった言葉で片付けるのは簡単です。しかし、その背景として、少なからぬ人々の科学に対する受け止め方と、科学研究に携わる者の意識との間に、ぼんやりとした仕切り幕が存在していたように感じます。それは一言で言えば、科学に対する曖昧な信頼と裏腹になった曖昧な不信です。

もう一つ、科学が直面したのは、何より、このたびの東日本大震災というすさまじい出来ごとからの問い掛けです。科学に対するこちらの問い掛けは、きわめて本質的なものです。科学はこれまで、自然や社会の解明に向けて、営々とした努力を積み重ねてきました。その結果、かなりのレベルにおいて、自然が恣に人々の命や財産を奪うことを阻止するとともに、自然が社会にもたらす恵みをより大きなものとするに成功してきました。しかし、科学によって地震や津波の規模を想定し、それに耐えうように科学の力を結集したはずの巨大堤防が、無残にも破壊されて数多の命が失われたこと、あるいは、科学の知恵によって原子の力を制御し、電力という、産業や日々の生活に不可欠な基盤を提供していた原子力発電のシステムを、容易にコントロールできないまま、多くの人々が生活の場からの避難を余儀なくされ、あるいは不安におののいている状況は、科学の力に対する無力感、あるいは懐疑を生み出すに足る十分な出来ごとです。

もちろん、巨大堤防にしても原子力発電所にしても、現実の形としてそれを作り出すファクターとして働いているのは、科学の成果だけでなく、財政の論理であり、政治や行政のスタンスであり、あるいは企業経営の発想です。科学の社会的な活用は、それが自然科学的なものであれ、あるいは社会科学的・人文科学的なものであれ、科学だけではなく、リスクの受忍限度の議論などをはじめ、利益衡量や価値選択に基づく、さまざまな社会的取引の産物です。ドイツの社会学者であるウルリヒ・ベックなども指摘しているように、科学の合理性と社会の合理性はしばしば異なるのです。

ただ、現実はそのように見えても、科学の社会的な活用というのはそんなものだ、そうした妥協やリスクがあることを織り込んでおかなければしょうがないのだという風に、簡単に割り切りたくはないと、私は思います。そうした割り切りに寄りかかってしまうと、人々のより多くの幸せと豊かさを目指す科学の、ぎりぎりまでの進歩はあり得ません。むしろ、なぜ科学がその問題を解決できないのか、という人々の厳しい視線を正面から受け止めながら、科学で対処できる事柄の範囲を拡大していくために全力を尽くすということが、科学に携わる者の原点であろうと思います。

たしかに、いつの時代においても、あらゆる課題に科学がきちんと答えを出せるわけではありません。答えを出せない、あるいは、出来ない、ということを示すことも、科学の一部です。たんに科学の夢や希望を明るく語るだけでは、科学に携わる者の役割は果たせません。やや強い言葉で言えば、そうした素朴な明るさは、社会に新たな魔術をもたらすだけのことで、科学に対する曖昧な信頼は、曖昧な不信とともに、非合理的な判断につながります。しかも、そうした世界の方に、人々が心ひかれることもあるのです。

フランスの数学者であったアンリ・ポアンカレの『科学の価値』という本の冒頭近くに、次のような一節があります。ここでは、私たちの先輩である吉田洋一先生の翻訳をお借りしたいと思いますが、「真理がどんなに残酷なものかをわれわれはよく知っている。そのため、むしろ、幻想の方が真理よりも、もっと心の安まる、もっとわれわれを力づけてくれるものなので

はないか、とつい疑ぐるようなことになってしまう。というのは、われわれに信頼感を与えてくれるのは、この幻想にほかならないからなのである。そうはいっても、いったんこの幻想が消え去ったとき、人はなお希望を失わず、引き続き行動する元気を持ちこたえていられるだろうか」、というものです。

人間が陥りがちなこうした弱さに、自らも陥らず、そして人をも陥らせない役割が、科学に携わる者には求められています。科学は精神安定剤ではないのです。人々の期待に力の限り応えながら、同時に期待の圧力に屈しない知的廉直が、科学には求められます。科学の世界に生きる者に求められているのは、科学の領分の拡大に全力を尽くすことは当然として、今の科学で出来ることと出来ないこととの区分を明確に示すとともに、その限界を乗り越えるために苦闘している姿を率直に見せることです。

魔術を克服すべく生まれた科学が、再び新たな魔術を生み出すのではなく、科学の本領を突きつめていくことで、科学の社会的な活用のために、一定の社会的取引を行わざるを得ない場面であっても、最大限に合理的な判断の基盤を提供するという、重要な役割が、この時期だからこそ改めて思い起こされてよいように思います。そこからこそ、未来へのたしかかな希望が生まれます。科学に携わる者としての誇りを忘れずに、皆さんがこれから健闘なさることを祈って、式辞を終えることといたします。

<平成二十三（2011）年四月十二日>



式辞



東京大学大学院薬学系研究科長 長野 哲雄

この度、東京大学大学院へ入学ならびに進学された皆さん、誠におめでとう。皆さんの入学を教職員一同、心から歓迎致します。

また、今日まで皆さんを育て、勉学を支えてこられたご両親、ご家族をはじめ多くの関係者の方々におかれましては、本日の入学式の感慨はひとしおのものがあると思います。本日は残念ながらこの会場にご臨席頂けません、お祝い申しあげる次第です。

大学院で学部とは異なる、一段と深い学問に挑戦する皆さんが爽り多き充実した大学院生活を送ることを心から祈念しております。

本日の式典に先立ち、総長の浜田先生が話されましたように、私からも東日本大震災について触れないわけにはまいりません。この度、有史以来の国難ともいべき東北地方太平洋沖地震による大災害の被災者に対して心からのお見舞いの言葉を申し上げます。尊い命を失われた多くの人々に深い哀悼の意を表すると同時にご家族やご親族、ご友人を失われた方々の悲痛な思いは察するにあまりあり、生活基盤となる家や田畑などに壊滅的な被害を受け、困難な避難生活を余儀なくされている方々の塗炭の苦しみは想像を絶するものがあります。さらに、福島第一原子力発電所の事故は現在でもなお予断を許さない状況にあり、一日も早い復興と生活再建を心から祈念する次第であります。

さて、今回の原子力発電所の事故は科学を志す私たちにとって看過することの出来ない重要な課題を突きつけています。それは一般国民が科学および科学技術に対して疑いの目で見ようになりつつあるということです。原子力発電については、日本では厳格な管理体制の下でコントロールされ、万に一つも人体に影響のあるレベルの放射能漏れなどない、間違ってもスリーマイル島のような事故は起きないと信じられてきました。し

かしながら、巨大地震により引き起こされた津波により原子力発電所が破壊され、発電が停止したばかりか、放射性物質が放出される恐れが引き起こされています。津波による破壊後一カ月たつ現在においても事態が好転しているとは言い難い状況にあり、広範囲に及ぶ放射能汚染の可能性は未だ続いています。

元来、日本国民は科学に対して温かい目を注いできました。先の仕分け作業においても、大学の先生方が研究を行う上で重要な科学研究費補助金も大幅な削減はなく、そのことに関して国民、マスコミから大きな批判はなかったと認識しています。明治以来、日本を先進諸国の一角に導いたのは日本人の努力と勤勉さと同時に、教育を重視し、それに基づく科学を強力に推進したことにあると信じられてきました。先端科学を基盤とした付加価値の高い製品を多数生み出し、それが日本国民のみならず人類を幸福に導いていると考えられてきました。しかしその考えに今回の事故は大きく疑問を投げかけているのです。

実は、これは原子力発電だけの問題ではありません。今日は科学技術の持つ二面性についてお話したいと存じます。私は薬学系研究科の教授をしておりますが、先月二十三日に薬学関係者にとって重要な裁判の判決が東京地方裁判所で出されました。イレッサ訴訟に対する判決です。この判決は今回の大震災の報道の陰に隠れ、ほとんど注目されませんでした。日本の将来の医療・医薬品開発を考える上で大きな影響力のある判決です。この判決の是非をこの場で論じるつもりありません。イレッサは肺がんの治療薬です。肺がんは現代の先端医学を持ってしても極めて治療の難しい病気で、年間世界中で百三十万人が死亡しており、特に日本での死亡数は胃がんなどが減少傾向にあるのに対して急激に増加しております。特に男性にこの傾向が顕著です。イレッサは他の抗がん剤が効かない非小細胞肺がんの分子標的薬として登場しました。しかし、イレッサは非常に使い方が難しい薬で、肺がんで打つ手がない患者でも人によっては福音（ふくいん）とも言うべき劇的な治療効果を示す一方で、人によっては間質性肺炎などを引き起こし、死に至る事がある薬です。東洋人と西洋人でも効果が異なります。何故このように人によって、作用が異なるのか、現在その作用の一端が解明されつつありますが、四、五年前まではその機構は全くわかりませんでした。

仮に、五年前、皆さんのご両親、ご家族が肺がんになって、既に有効な治療法がない状態で、このままでは死を待つばかりの時に、皆さんはイレッサを処方してもらうでしょうか。人に

よってはがんが劇的に治る、人によっては死期を早めることもある。極めて難しい選択です。

君たちならばどうするでしょうか。治るかもしれない。あるいは副作用で早期に死を迎えることになるかもしれない。その時点において絶対的な正解がないという点ではどこかの国の「白熱教室」におけるような質問ですが。

ここで私が申しあげたいことは、科学が進歩しその波及効果が大きくなるに従って科学の持つ二面性が顕在化して、「想定外」の言葉で表される負の面が前面に出て来るということです。薬に関することで「毒にも薬にもならない」という表現がありますが、確かに一般に毒にならないものは薬にもなりません。皆さんはサリンという毒性物質をご存知ですか。ここにご列席の先生方で誰一人知らない人はいない大事件を引き起こした毒物ですが、この化合物の作用は、少し専門的になりますが、アセチルコリンエステラーゼという加水分解酵素の阻害です。驚くべきことに老人性認知症で知られているアルツハイマー病の治療薬であり、世界中で最も広く用いられているアリセプトも同じ酵素アセチルコリンエステラーゼを阻害することにより治療効果を発揮します。

さて、この科学の持つ負の面を克服する方法は何かと問われたときに、人間が有する手段はただ一つ、それはやはり科学です。新たな科学でもって従来の科学の負の面を克服していく以外に道はないのです。ここで申し上げている科学は、いわゆる理系の自然科学だけを指しているわけではありません。人文科学、社会科学を含めたすべての科学を念頭において述べているのです。

科学者は前人未踏の分野を開拓するものです。前人がなした仕事を追試してもそれは単に「例題」を解いただけです。新たな科学で前人が行った負の面を持つ科学を解決するという未知の分野は教科書に解決方法は書いてありません。正解があるのかもわかりません。薬学で言えば、がん細胞のみを殺傷し、副作用が全くない治療薬が求められているのです。

皆さんは、今日からその科学の戦いの最前線に立つのです。今まで小学校以来行ってきたことは、「例題」を解いただけです。「例題」には正解があります。大学院の研究は「例題」ではありません。正解があるか否かもわかりません。抗がん剤に副作用があっても仕方ないと思えるか、いつの日か必ず、と考えるかで研究者としての志の高さが覗えます。

科学に対する国民の疑念を解くことは我々研究者の責務です。易きに甘んじることなく、自らを厳しく律し、物事の本質を見

通す目を養って頂きたいと願っています。

科学との戦いに臨むにあたって、「高い志」を持つことの重要性を強調しておきたいと存じます。

最近の日本経済の停滞から、ともすると日本の若者が萎縮した傾向にあるように見えます。しかし日本国内だけを考えることはありません。今日の世界は十、二十年前に比べ、極端に小さくなっており、世界のある場所で起こった出来事が分単位で世界中に周知されます。この世界における情報の共有化は加速度的であり、皆さんが社会の中核として活躍する二十年後は私たちが今、東京とニューヨークの間に感じている距離がおそらくは東京と関西の間くらいになるのではないのでしょうか。皆さんが日本だけではなく世界を活躍の舞台とすることはもはや当然のこととなるでしょう。狭くなりつつある世界で日本だけが諸君の活動の場ではありません。

そして、世界で活躍する場合においても重要なことは、「高い志」を持つことです。その志を実現するためには幾多の困難を乗り越えなければなりません。この困難は諸君を鍛え、磨き上げ、更に高い目標に向かっていく力を養います。東京大学の学生は社会のエリートであり、社会を牽引する能力を持っています。是非ともその能力を鍛え上げる努力を今後とも惜しむことなく、初期の志、目標に向けて真正面から取り組み、人類の役に立つ大仕事を成し遂げることを期待しております。志の高い人は欲得で行動してはいけません。広く世の中のために尽くすことを第一義において頂きたい。

今からおよそ半世紀前の一九六四年三月の東大卒業式で、当時総長であられた大河内一男先生は卒業生に贈る言葉として「太った豚になるより痩せたソクラテスになれ」と述べられました。誘惑に負けない、清廉な人になれと言われ、この言葉は当時の若い学生に大きな影響を与えました。

私は皆さんの今日の新たな出発に当たって「志士仁人（ししじんじん）」の言葉を送りたいと思います。これは論語に出てくる言葉で、志士は志が高いひと、仁人は仁徳のある人、志士仁人は生を求めて以て仁を害するなし、と述べられています。志の高い人は生きる上において、人の道に背くようなことはない、と私は解釈しています。高い志を持つと同時に、その志は仁愛の精神に基づいたものであり、人々に歓迎されるものでなければなりません。それがエリートに課せられた任務です。私は、諸君のこれからの大学院の研究者生活において、世界の人々のリーダーとして活躍する気概を持って臨むことを期待しています。

この式辞の結びに当たって、健全な心身の重要性を述べておきたいと思います。私は高い志を持って、そしてそれは自らの私欲に根差すものであってはならないと言いました。このような志を成し遂げるには高い能力だけではなく、強靱な身体が必要です。全ての基盤は健康な体力と精神です。高い志を成し遂げる上において、心身ともに健全であることの大切さを強調しておきたいと思います。

最後に、国民は輝かしい未来の構築に向けて、東京大学の学生に大きな期待を抱いております。この期待を背負い、諸君が遅くそして悔いのない大学院生活を送ることを希望しております。これからの諸君に幸多かれと心から祈念して、私からの式辞と致します。

<平成二十三（2011）年四月十二日>



祝辞



John D. and Catherine T. MacArthur Professor
Department of Physics
University of Illinois at Urbana-Champaign

Sir Anthony James Leggett

3月11日の大災害、お悔やみを申し上げます。つらい復興作業に秩序を持って、前向きな姿勢でいらっしゃる皆様に敬意を表します。ささやかながら、私も応援させていただきます。これから英語で話をさせていただきます。

It is a great honor and pleasure to have been asked to speak at this entrance ceremony. Although unlike many of the speakers at this ceremony in past years, I am not myself a graduate of Todai, I do have a close connection with this university, as I spent a very happy nine-month period here in the group of Professor Yasushi Wada in the physics department in 1973-4; and I was very honored indeed to be given an honorary degree last year. So it is indeed good to be addressing you to-day, and I should say particularly good under these very unusual circumstances.

I would first like to congratulate all those whose efforts have led to your presence here to-day-your families, your teachers both at school and at university, and of course most of all yourselves. I know that the competition to enter Todai, whether you have originally done so at the undergraduate level or are first coming in now as graduate students, is intense-probably one of the most hotly contested in the world-and that your entry into this select group is the culmination of a long and arduous process. So your parents and teachers have every right to be proud of you, and you have every right to be proud of yourselves.

Over the next few years you will have a unique set of opportunities. What can I say to help you make the most of them? Perhaps my own experience at a similar stage of my career might be somewhat relevant, although it is admittedly rather untypical for my generation. I started

my university career at Oxford on the liberal arts side, studying Greek and Latin languages, ancient history and modern philosophy. However, I eventually became convinced, through a long and roundabout process of reasoning, that what I really wanted to do for a career was physics-this in spite of the fact that I had had essentially no exposure to that subject at school. And eventually, thanks to the help of a great many people and some remarkable and unanticipated strokes of luck, I was able to turn this dream into reality and become a professional academic physicist. Then, at the postdoctoral level, I decided to exploit the freedom provided by the Oxford fellowship which was supporting me to spend a year here in Japan-to be precise, in the group of Professor Takeo Matsubara at Kyodai. Although from the point of view of my short-term career prospects neither the four years spent on my liberal arts degree nor the year at Kyodai were probably the most obvious moves, I have never for a moment regretted either; I believe that both experiences enriched my life enormously and gave me perspectives I could never have otherwise acquired. In particular, both the discipline of studying analytic philosophy as it is taught in Oxford, and my attempt to learn Japanese at least to the point where I could have meaningful social interactions without having to rely on the distorting medium of English, had a profound influence on me; I would compare both to the experience of learning to use a muscle that I had not previously known that I possessed.

Why am I telling you this? Because I want to encourage you to use the years of your graduate studies at Todai to broaden your horizons in every way possible. It is by now a commonplace that the center of gravity in world affairs is inexorably shifting away from America and Europe towards south and east Asia, and in the world community of the mid-twenty first century it will be natural that Japan, as the oldest industrial society of the region, will play a central role. In turn, by that time many of you will be among the leaders of Japan, be it in politics, in the economy, in literature or in academia. So not just for your own sakes but for the sake of the world it is of crucial importance that you use these next few years not just to gain expertise in your immediate field of specialization but to enrich your experience in a broader sense. To be sure, you will need to spend adequate time on your chosen discipline, but you don't need to spend all your waking hours on it! Try to take advantage of some of the other opportunities that you will find available in a great university-if you are a scientist, you might want to try going to the odd lecture in history or literature; if a

philosopher, to keep at least a "watching brief" on some modern developments in neuroscience; and so on. Above all, try to get as much international experience as you can; while you can get a certain amount without leaving Japan, for example by taking advantage of the presence here at Todai of an appreciable number of international faculty and students, there is nothing to beat "total immersion", so I would very strongly encourage you to try to spend at least some time in the next few years abroad, be it in an exchange program at the graduate level (I am sure that Todai is involved in many such programs) or at a later stage as independent postdoctoral researchers. Not only will you encounter new approaches to your specialist discipline, but more importantly, by immersing yourselves in a foreign language and a foreign culture you will enrich your lives profoundly and permanently. For most of you it will be much easier to travel freely over the next few years than it will be later in life after you acquire family and other responsibilities; don't let this precious opportunity pass you by!

Turning more specifically to the "official" courses of study you will take over the next few years, I am often asked questions like "what must one do to be successful in an academic career?" I don't think there is really a good answer to this question, because in academia just as much as in other walks of life, "success", at least as perceived by the community at large, owes a great deal to sheer luck. But perhaps I can give you a few hints as to how to have a fruitful and satisfying experience of academic life, whether that experience is just a prelude to something else or a lifetime commitment. Although in formulating these hints I am thinking primarily in the language of my own discipline, physics, I think they may be more generally applicable:

First, whatever else you do or don't do, try to follow your own curiosity, and don't be put off if your fellow-students, or even your teachers, think that the question you are asking is trivial or stupid. (I would bet that when Einstein asked "why do all bodies fall at the same rate in vacuum?" a lot of people said "oh, that's a stupid question-everyone knows they just do!" Yet out of this simple question grew the general theory of relativity, a major ingredient in our modern picture of the physical world). Remember, there is no such thing as a stupid question; even if the answer indeed turns out to be straightforward and obvious, it was still worth asking! Secondly, if you find a problem interesting, don't worry too much about whether it has already got an agreed solution in the existing literature of the subject; the odds are that even if it has, by approaching it with an open mind-perhaps even by deliberately ignoring the existing literature for a while-you will discover a new and possibly illuminating angle on it. Thirdly, never think that any honestly done piece of work has been wasted, even if at the time it seems to lead nowhere; write a full account of what you have done, put it away in a drawer and I will bet that ten or fifteen years down the road it will come back and help you out, perhaps in a totally unexpected way (this certainly happened to me at a crucial stage in my research).And fourthly, for the many of you whose responsibilities will involve both research and teaching: whatever else you do, take your teaching at least as seriously as your research, if not more so; that will be good not only for your students, but for you and the research too.

Well, that is all I think I can usefully tell you, and it only remains for me to wish you every success and happiness in your years as graduate students at Todai and in whatever careers they may lead to.

(写真撮影：尾関裕士)



特集

平成 22 年度第 2 回「東京大学総長賞」 授与式の挙行及び「総長大賞」受賞者決定

平成 22 年度第 2 回学生表彰「東京大学総長賞」授与式は 3 月 24 日（木）12 : 45 より小柴ホール（本郷キャンパス）にて実施されました。

第 2 回（春）は学業を対象として募集を行い、合計 31 件の推薦をいただき、学生表彰選考会議の厳正なる審議の結果、12 名の方々が総長賞受賞者として選出されました。授与式では、開会に先立ち 3 月 11 日に発生した東北地方太平洋沖地震の



総長大賞受賞者との写真



本年度総長賞受賞者全員との写真

被災者の方々へ黙祷を行った後、選考結果報告のほか、総長から表彰状と記念品の贈呈がありました。

続いて、本年度で実施 5 回目となった「総長大賞」受賞者の発表が濱田総長からあり、本年度総長賞受賞者 15 件の中から、第 2 回（春）受賞者の塚田雄一さん、佐々田槇子さんに授与されました。

授与式には本年度総長賞受賞者、役員等約 50 名が参加しました。

総長大賞 受賞者紹介



塚田 雄一

（総合文化研究科修士課程）

シェイクスピアの悲劇『マクベス』における「帝王切開による出生」と「森の移動」をめぐる魔女の二つの預言は、長年にわたり大きな謎として世界の研究者

や演出家を困惑させてきた。塚田氏は、国内外で膨大な文献資料を綿密に読み解いた上で、二つの預言の意義を初演当時の政治情勢をふまえて独自に解き明かし、新しい解釈として発表した。テキスト分析の独創性と卓越した英語能力に裏打ちされた同氏の研究はシェイクスピア研究の新たな可能性を示すものとして注目されている。また、シェイクスピア研究にとどまらない広さをめざして研究成果を発表するなど、同氏の研究に対する熱意と豊かな創造力が高く評価された。



佐々田 槇子

（数理学研究科博士課程）

原子や分子等のマイクロな世界の法則から、流体や気体のマクロな性質を説明する統計物理学の数学的な基礎づけにおいて、確率解析は重要な役割を果たす。佐々田氏

は、マイクロな系の時間発展を表す確率過程からマクロなパラメータの時間発展が従う非線形偏微分方程式を導出するスケール極限の研究を行ってきた。種々の特殊性を持つ格子気体、ヤング図形の動的モデル、非調和振動子鎖等、広範囲にわたる興味深いモデルを対象として成果をあげ、第一回日本学術振興会育志賞や日本数学会賞建部賢弘賞奨励賞を受賞する等、学外からも高い評価を受けた。

総長賞 受賞者紹介

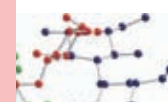


田中 真一 (工学部)

田中氏の卒業研究は眼科を対象とした手術支援システムに関するものである。眼科手術のうち、網膜・硝子体手術は眼底に生じた疾患を治療する超微細手術であり、高い正確性が要求される。しかしながら、現状では術野からのフィードバックが少ないために、医師を支援するシステムが必要である。同氏は東大医学部と連携し、手術ナビゲーションシステムの構築に取り組んできた。卒業研究では、顕微鏡画像から術具を抽出して追跡するシステムを実現し、提案手法の有効性を示した。また、学業面では工学部在籍中に全ての科目において優の成績を収めるなど、これらの成果が高く評価された。

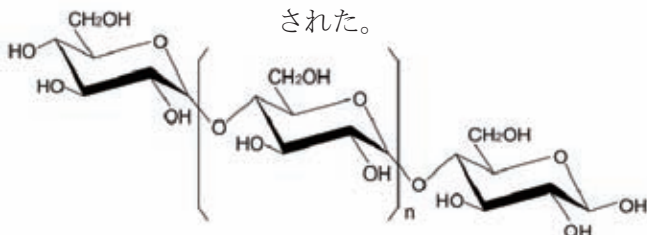
小林 加代子 (農学生命科学研究科修士課程)

小林氏は、バイオマス資源として近年特に注目を集めている主要な天然多糖について、精緻な固体構造解析と物性解析を行った。この研究を行うにあたり、解析に相応しい試料の調製方法を見出し、既存の解析装置に独自の改良を施すことによって、水和型と無水型の固体構造を明らかにし、それらの結晶転移機構を解明した。これまでの研究成果は、一流国際誌に筆頭著者として掲載済みであり、学会誌にミニレビューとして掲載予定であるほか、学会では優秀ポスター賞を受賞するなど高い評価を得ている。この研究成果を礎として、多糖化学が大きく進展するとともに、多糖由来の新規な機能性材料創製が可能になると期待される。



田中丸 周平 (工学系研究科修士課程)

田中丸氏はパソコンやサーバー等の電子機器の電力を半減する数々の半導体集積回路技術を発明した。半導体デバイスで最も権威ある国際会議である米国電気電子学会 (IEEE) の IEDM において、保持しているデータに応じて自動的に安定性が増し極低電圧動作が期待される強誘電体トランジスタメモリを発表した。また、『半導体のオリンピック』と呼ばれる IEEE ISSCC で、新符号化手法により従来の手法に比較して 95%誤りを削減し電力を半減させるソリッド・ステート・ドライブ (SSD) を発表した。このような業績が高く評価された。



総長賞 受賞者紹介

嗟峨 裕 (薬学系研究科修士課程)

HIV との合併症や多剤耐性菌の出現により、結核は現在でもなお世界最大の感染症であるが、新規抗結核薬は半世紀にわたり上市されていない。この危機的状況の中で Johnson & Johnson 社は、前例のない画期的な抗結核薬リード R207910 を開発した。この抗結核薬は世界中で猛威を振るう結核を根絶しうる革命的な発明ではあるが、その合成法は極めて原始的で、世界規模での工業的合成供給に耐えうるものではなかった。嗟峨氏は有機合成化学の分野から、環境負荷を最小限に抑えた新規触媒反応の開発に取り組み、世界で初めてこの抗結核薬の精密有機合成法確立を達成した。本成果は、抗結核薬リードの大量供給への道を開くものである。



巽 智彦 (法学政治学研究科法曹養成専攻)



巽氏は、膨大な単位数と厳格な成績認定で知られる法科大学院において成績特別優秀者 (Magna cum laude) の表彰を受けるのみならず、在籍中に複数の研究論文を執筆し、いずれも高い評価を受けた (「優秀リサーチペーパー賞」受賞、『東京大学ローレビュー』掲載等)。同氏の研究対象は、公共料金の値上げや保育所の民営化といった市民に身近な問題に関する行政訴訟であり、実務家的な問題解決志向と研究者的な体系的志向とを高水準で調和させた、法科大学院出身の法学研究者ならではの手腕が高く評価された。

生島 弘彬 (医学部5年・医学系研究科博士課程修了)

現在、日本人の3人に1人が癌で亡くなっている。生島氏はそのような現状に対し、新規の癌治療法を探る中で、癌の発生・再発において重要な働きを持つ「癌幹細胞」と呼ばれる癌細胞集団の維持機構を明らかにし、世界に先駆けて発表した。この研究成果は癌幹細胞を標的とする新規の癌治療戦略の構築に向けた大きな一歩となるものであり、多くの賞を受賞するだけでなく、一般メディアにおいても研究成果が紹介されるなど、学術的にも社会的にも国内外から注目を浴びている。今回、その医学の進歩への多大なる貢献が高く評価された。



総長賞 受賞者紹介

砂村 栄力（農学生命科学研究科博士課程）

砂村氏は侵略的外来昆虫アルゼンチンアリの生態および防除に関する研究を行い、国内外を舞台に多くの成果をあげた。特に、大陸を越えて広まったアルゼンチンアリが互いに争わず地球規模の大家族を形成していることの発見は世界各国で大きな反響を呼んだ。また、砂村氏は合成道するベフェロモンを空中に放散させてアリに道を見失わせるという新技術を利用して効果的なアリの駆除方法を提示した。さらに、昆虫図鑑執筆をはじめ影響力の高いアウトリーチ活動を数多く行っている。これらの活動は国内外の多くの人に感動と影響を与えた。



村上 豪（理学系研究科博士課程）

日本の月探査機「かぐや」から月の地平線から昇る地球の映像が世界に配信された。可視光で見ると地球の形は丸く、点対称である。しかし、地球を取り巻く上層大気の様子は異なっていた。村上氏は極端紫外光という目では見えない光を捉える特殊なカメラを開発して「かぐや」に搭載し、これまで行われたことのない視点からの地球上層大気の撮像に成功した。その結果、上層大気が地球の磁力線に沿って蝶形に広がる様子を世界で初めて明らかにし、50年前に東大の地球物理学者が推測した描像が正しいことを証明した。同氏の成果は地球物理学系のみならず光学系や工学系国際学術誌にそれぞれ受理されており、精力的・分野横断的な活躍が高く評価された。

北島 正章（工学系研究科博士課程）

北島氏は、ノロウイルスなどの病原ウイルスの分子疫学解析と感染リスク評価に関する研究に取り組み、極めて水準の高い研究成果を挙げた。環境微生物学・環境科学・ウイルス学など幅広い分野の国際学術誌に筆頭著者として数多くの論文を発表し、関連学会からの賞に加えて日本学術振興会育志賞も受賞しており、同氏の研究成果は国内外で極めて高く評価されている。また、日本学術振興会「優秀若手研究者海外派遣事業」により米国での在外研究に従事するなど、活発に国際的研究活動を展開している。学術的な新規性のみならず、公衆衛生や水質管理など人々の健康に関わる実務へ貢献しようとする研究姿勢が高く評価された。



榎本 嘉範（総合文化研究科博士課程）

物質と反物質の対称性（CPT 対称性）の検証は物理学上の大きな問題の一つだと考えられている。例えば我々の宇宙はビックバンによって始まったとされているが、この時物質と同量だけ作られたはずの反物質は、今現在我々の身の回りには見当たらず、その理由は分かっていない。反水素原子の性質を調べる事によってこの問題にチャレンジしようという研究が精力的に進められている。榎本氏は反水素原子を作り出す新たな装置を中心となって開発し、世界で初めての反水素原子の分光実験へ向けての道を切り開いた。この研究成果は英国物理学会が選ぶ“Top10 Breakthroughs for 2010” の第1位を共同受賞するなど、国際的に高い評価を受けた。

本件問合せ先：本部学生支援課 山形（内線：22514）

広報担当者座談会

大学の魅力や有用性を広く社会に伝えることは、東大に課せられた大きなミッション。昨年7月、本部および各部局の広報担当者にお集まりいただき、「あるべき大学広報の姿」について語っていただきました。遅ればせながら座談会の模様をご紹介します。



※この座談会は昨年(2010年)7月に行われたものです。

吉見 本日はお集まりいただき、ありがとうございます。今回の座談会のきっかけは、私が本部棟8階応接室に並べられている各部局の広報誌を眺めていて「なんて不統一なんだろう」と思ったところから始まりました(笑)。それらの広報誌はデザイン面でもそれぞれ頑張っているのがよく分かるのだけれど、全体の東大イメージがまったく見えてこない。東大全体の広報を考えるとどう考えれば良いのか……そんなことを江川理事にお話ししたところ、「それでは現場の方々に集まってもらって、問題点を洗い出し、やれることややるべきことを議論しましょう」ということで、この場が設けられたわけです。まずは江川理事から東大広報の現状をどのようにご覧になっているか、お話しいただければと思います。

江川 私も広報を担当するようになってから、吉見先生がおっしゃった「各部署・各部署は一生懸命にやっているのだけれど、全体がバラバラになっている」ということが、いろいろな面で見られるなと思いました。特に感じたのはホームページ(以下、HP)ですね。本部だけで考えても、広報室、渉外本部、卒業生室、産学連携本部など、いろいろな部署でHPを作っていますが、その内容がかなり重複し

いたりします。分かりやすい例としては、イベント情報。広報室でも出していて、さらに、渉外本部では卒業生・寄附者向けにそういう情報を出している。それをブログ発信もしている。また、産学連携本部でも出しています。その一方で、ある留学生と話していたら「東大の中で行われるシンポジウムなどの情報がどこにあるのか分からない。あまり広く交流ができなくて残念だ」と言っていました。みんなが伝える努力をしているのに、それがきちんと伝わっていないということですね。とても残念なことだと思いました。それから、特に危機感を持っている分野としては「国際広報」がありますね。学術において世界の大学の競争は熾烈になってきているので、東大の優れた研究を海外に発信することは大学の総合的な力を強化するという意味で極めて重要なことだと思います。しかし、あまり海外に発信されていません。先日も、東大との産学連携を模索している、ある企業の方から「東大から発信される研究成果情報は多くが日本語なので、我が社では社内で英文化して海外の本社に送っています」というお話をうかがいました。

3つめの問題点としては「IT化」が挙げられると思います。さきほどから話しているHPや国際化の問題と密接に繋がっている問題なんですけど、かつては紙媒体で行っていた



江川雅子
理事(広報担当)

★この特集の読み方

中段に掲載された原稿は、2010年7月に行われた広報担当者座談会の内容です。引き出し線で示された、上段下段の注釈では、2011年3月時点の広報の現状を解説しています。

東京大学では、2011年6月より、Facebookによる広報活動を開始する予定。主に卒業生を対象に、コミュニケーションの場を提供し、「社会との関係づくり」を促進していく。



本部広報では、東大HPや学外向け広報誌【淡青】を通じて、総長のメッセージを社会に向けて発信している。左の写真は【淡青24号】表紙。「東京大学の行動シナリオ FOREST2015」に関する総長インタビューを掲載している。

情報発信をHP、ブログ、SNSなど新しいメディアで行えるようになってきました。twitterやfacebookなどの新しいメディアをどこまで取り入れるのかは難しい議論だとは思いますが、効果とコストを考えて、新しいメディアを検討していくことは意味のあることだと思います。より大きな資金を投じずとも、今までのリソースの組み合わせで効果的な広報を目指すということが重要だと考えています。

HP、国際広報、IT化 という3つの柱

吉見 ありがとうございます。「HP」、「国際広報」、「IT化」という、3つの大きな柱を立てていただいたように思います。それでは、本日は学内の教育部局、研究所、センターなどから広報担当の方にお越しいただいているので、それぞれの現場でどのような活動をされているか、さらには広報に関するご意見などを一人ずつ、お話しできたいと思います。まず、理学系研究科の横山さんからお話しいただけますか？

横山 私は理学系研究科に着任して4年目になります。基礎科学あるいは学術広報をモチベーションとして、「品格」、「伝統」、「最先端」という3つのキーワードを念頭に様々な広報活動をしています。広報と言いますと、どうしても情報発信そのものに目が行きがちですが、「どのような情報発信が必要なのか」という戦略も非常に重要だと考えています。それから、理学系の広報の特徴としましては、科学コミュニケーション、いわゆるアウトリーチに加えて、トランス・サイエンスとも言える分野の問題、つまり、「科学における倫理的、社会的、法的な問題」にも配慮しながら情報発信を行っているという点があります。もちろん、学内外の学生、中高生、政府、一般市民といったターゲット別に広報している点も理学系の大きな特徴ですね。現在の課題としては、2つ、挙げられます。ひとつは、いかに「重要度を意識した広報」をやっていくかということ。ある新聞社の方によると、ニュース性とは「重要度×分かりやすさ×関心」だそうです。私たちは、つい、ニュース性全体に目が行きがちですが、なるべく重要度を

意識した情報発信をしていければいいと考えています。ふたつめは、やはり「予算」です。研究科として、どれくらいの費用を広報に割くかという問題は常に課題として考えるべきことですね。「本部への期待」を申し上げますと……「総長からのメッセージを中心とした東大オピニオン発信」を期待しています。やはり、部局広報は学術広報が重要だと思いますし、本部広報は東大としてのオピニオン発信が重要だと感じていますので。今後も、本部・部局で効果的に連携しつつも、そのような役割分担をはっきりさせていくことが非常に重要だと考えています。

江川理事がご指摘になった「HP」、「国際広報」、「IT化」に関しましては理学系でも足並みを揃えて体制を整えていきたいと思っています。

「国際広報」ということで申しますと、本部と各部局で、皆さん、ターゲットが少しずつ、違うようにも思います。理学系が「国際広報」を考える時には**優秀な留学生の確保**が第一の目的。二つ目の目的としては、国内で研究者が受賞した時に海外に広くアピールするということがあります。このあたりの目的は部局によっても多少違うと思いますし、本部と部局でも多少違う気がしますので、それを明確にしつつ、国際広報を充実させていきたいですね。

それから、最近、行ったことのひとつとしては「理学系から巣立つドクターがどのくらい、どのような企業に就職しているのか」という調査があります。外から求められている情報であろうということで、その調査結果を3月に公表いたしました。

吉見 あの調査結果はとても素晴らしいんですよ。本当によく調べられている。そういう貴重な情報を惜しみなく外に発信していくことはとても大切ですね……せっかくの機会ですので、本部への具体的な要望などあれば、ぜひ。

横山 では具体的に申し上げます(笑)。プレスリリースをメール化されてはいかがでしょうか？ 現状ではFAXによるプレスリリースが行われていますが、FAXは白黒なのでカラーの図の説明も難しいですし、記者の方からもFAXよりもメールのほうが便利であるとうかがっています。



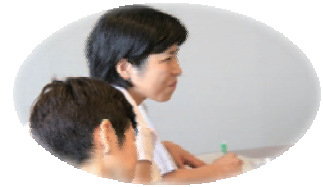
2010年夏、大学院理学系研究科では“UTRIP(The University of Tokyo Research Internship Program)”というサマープログラムを実施した。これは海外の大学生を対象に大学院の講義や研究・実験を体験してもらおうという試み。優秀な留学生の確保に向けて、本学でも様々な施策が始まっている。



吉見俊哉
教育企画室長
(現・副学長)



先端研HPの研究紹介ポッドキャスト配信ページ。先端研HPでは、キャンパス公開や先端研フォーラムの様態を収録したビデオライブラリーも視聴することができる。



吉見 ありがとうございます。「プレスリリースのメール化」という問題に関しては後ほど話し合います。それでは次に、先端科学技術研究センターの神野さん、お願いします。

神野 先端研の広報担当に着任して6年目になりますが、皆さんと大きく違う点は、私自身のバックグラウンドが理系ではないということですね。元々は銀行員で、その後、政府系の研究所の広報をやっていました。ですから私自身が分かる内容を発信していくことが一般社会によく伝わる広報になると思って今までやってまいりました。

この数年、先端研の広報でずっと心がけてきたこととしては「チャリズム」ということです。全部は見せない(笑)。HP等を通して、「この研究、おもしろそう」と感じてもらえそうな部分をチャリと出しておいて、最終的には先端研にお越しいただいたり、個々の研究者とコンタクトを取っていただいたりという形に誘導しようという姿勢です。広報ツールとしては、HP、『先端研ニュース』という冊子、あとはパンフレット等。HPに関しては、何せ、ひとり広報なものですからコンテンツを集めるのがけっこう大変で、月初めに「広報御用うかがい」という紙を各研究室のポストに入れて呼びかけているんですが、やはりどうしても偏ってしまうんですね。広報に積極的な研究室や人的に余裕のある研究室からはいろいろと情報が送られてくるんですが、そうでないところからはなかなか情報が来ない。でも実際には研究をしているわけで、なかなか情報が出てこない研究も公平に広報していきたいと思っています。そのために、もっと工夫しなければいけないなと感じています。理事から「HP」や「IT化」のお話がありましたが、ウェブはどんどん発達していくので、うまく活用することは重要だと思っています。しかし、HPは「待ちのメディア」なんですね。自分たちのHPまでユーザーがたどり着いてくれないと見てもらえないということを考えると、ある程度、紙媒体による「攻めの広報」も必要なのではないかと感じています。ただ、予算との兼ね合いもあるので『先端研ニュース』は限られた部数で発行し、お届けしている方々には「冊子を手に取られた方々はちょっと特別なので

す」というメッセージを伝えたいと思っています。HPには全文公開していますのでどなたでもご覧いただけます。「IT化」に関しては、月1回、教授会の冒頭15分で先生方の研究紹介をやっている、その様態をポッドキャストで動画配信しています。そろそろYouTubeに移行したいところですが、先生方の著作権問題などもあり実現していません。それから、「広報の統一感」に関しては、先端研の場合、毎年6月に生研と共催で一般公開を行っています。私が着任した頃は公開日こそ一緒でしたが広報ツールは個別に作成していて実質的には別々の公開という感じでした。生研さんには「生研公開」をずっとやってきた歴史があって、やはり一気に共催にしてしまうのは難しかったですね。それでも事前打ち合わせを合同で行い、最初は案内文だけ統一したりして、徐々に共催に近づけていきました。それで、2007年からポスター、案内状、当日マップ、ウェブサイトなどの広報物を共通化する現在の形になりました。別々の時代よりも確実に来場者は増えてきていると思います。

江川 それはとても良いですね。部局間の連携広報が実現している。

吉見 グラスルーツと言いますか、部局間で自発的に連携広報のステップが進んでいくことは素晴らしいですね。

神野 当初は事務職員の方々の理解を得るのが難しかった記憶があります。「私たちは昨日やったことを今日も同じようにやらなければいけないんです。明日は違うことをやれと言われると困るんです。昨日と今日と明日は同じでなければいけないんです」と言われて悩んだこともありました。そういう考え方はもちろん個人差があって、幸い、担当する双方の先生方が積極的に後押しして下さり、事務の方にも恵まれて。少しずつ進めて、ここまで来たというかんじです。

吉見 ありがとうございます。それでは次に、地震研究所の大木さん、お願いします。



横山広美

理学系研究科 准教授



左の写真は2010年度『駒場リサーチキャンパス キャンパス公開』のポスター。生研・先端研の共催で年に1回、キャンパス公開が行われている。2010年は6月5日に開催された。

2011年3月11日14時46分、三陸沖から茨城県沖にかけての太平洋沿岸で、マグニチュード9.0（気象庁による；3月13日に8.8から修正）の大地震が発生。この「東北地方太平洋沖地震」に伴い、大津波が東北・関東地方の太平洋沿岸を襲った。未曾有の大災害に際し、地震研はそのHPにて、大地震（およびその後の余震）・大津波等に関する科学的情報を発信し続けた。災害時広報はこの特集を制作している3月27日現在も継続中。発信した情報に対する様々なレスポンス（批判的見解も含む）を真摯に受け止めながら、地震研アウトリーチ室は、科学的知見およびデータを社会に送り続けている。



正しい情報を的確に発信すること

大木 地震研と言えば、**突発災害対応**です。いつ起こるか分からない地震や火山噴火への対応が年に数回あって、研究所として一番エネルギーを注いでいます。座談会を始める前に「もし、国内で被害地震があったら中座させていただきます」と申し上げました。「被害地震が起きたら、いつでもどこでも速やかに対応する」という義務は、本来、政府の義務なのですが、正しい情報を過不足なく伝えたいという思いもあって、私たちもすぐに対応することにしています。実際にそういう状況になると、主にメディアから問い合わせが殺到します。ですので、地震研のステークホルダーはメディアであることが多いですね。メディアを通せば良いという考えは持っていないのですが、メディアと良好な関係を築くことは非常に重要です。そのために、月1回、メディアを対象とした勉強会を実施しています。

その一方で、一般社会に向けて、地震や地球科学の情報発信をしています。地震学、火山学の特徴は「実学の側面を持っていながらピュアサイエンスの側面も持っている」という点です。私の博士論文は、たぶん、何千年経っても人類の役に立たないであろう研究でしたが、「地球のサイエンスをひとつ知った」という喜びがありました。そのような研究もあれば、地震予知や防災にすぐに生かされるかもしれない研究もある。その両面を伝えられるように、注意深く広報しています。地震研に来てくださる一般の方々には科学そのものに興味がある方よりも「自分が地震で死ぬのか生き延びられるのか」ということに関心があって来られる方が多いですね。地震のメカニズムを知りたいのではなく、「この場所のマンションを買おうと思っているんですが、地震の危険性はどうか？」とか、「地震予知装置を發明したので見てください」とか（笑）。そのあたりが他の理系学問との大きな違いだと思います。

現在の科学では地震予知はまだできないんですが、群発地震がある地域などには大地震が起こる可能性を伝えなければならぬんです。リスクには言及しなければならぬ。ラクイラ地震【編集部註：2009年、イタリアのラクイラ近辺で発生した群発地震および、マグニチュード6.3の大地震。

日本では「イタリア中部地震」の名で知られる。死者308名】の時には、「群発地震が起き続けている最中に大地震が起こるリスクに言及しなかった」という理由で、国がオフィシャルに地震学者を捜査するに至っています。ですから、東海地震などの研究においても常に「大地震のリスクへの言及」を念頭において情報発信していく必要があります。

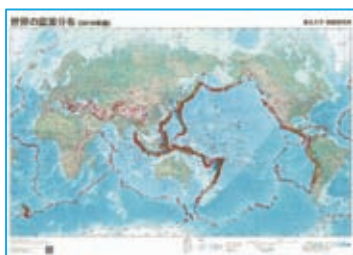
先ほどからお話に出ている「他部局や本部との連携」に関しては、高額寄附者の方をラボツアーでご案内したのをきっかけに、現在、渉外本部さんといろいろ連携させていただいています。また、**震源地図**、**震源地図が載ったクリアファイル**、**ペンタグローブ（震源を記した組み立て式の紙地球儀）**などの**地震研グッズ**を作っているのですが、これらを赤門脇のコミュニケーションセンターで売っていただきたいと思っていて、現在、本部広報課さんに相談中です。

それから、「本部広報に対する要望や不満など」という話なんですけど……さきほどからずっと考えていたんですが、私自身が不満が出てくるほど本部のことを知らないのだと思います。たぶん、本部広報としては部局の情報を吸い上げることが大変なのではないかと思うので、「部局が本部に情報を上げたくなるような仕組み」をうまく作れればいいんじゃないかなと思いました。

「国際広報」に関しては、国境を越えてやってくる「津波」による災害も研究対象ですので、非常に重要視しています。現在は帰国子女の方に技術補佐員として来ていただいて英文HPの充実を図っています。

江川 さっきおっしゃった「月1回の勉強会」は科学部の記者の方々を対象ですか？

大木 主に科学部の方ですが、地震の話は社会面に載ることも多いので、社会部さんにもお声掛けしています。記者さんは1～2年で担当が代わることもあるので、引き継ぎの際に「とりあえずアウトリーチ室に行け」と言っておくようにしています。それで、だんだんうまく回るようになってきました。

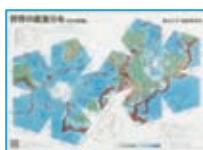


世界の震源分布地図

地震研グッズ

【写真・左】
ペンタグローブ
（組み立て前）

【写真・右】
組み立てた
ペンタグローブ



大木聖子
地震研究所 助教

2月下旬より、東京大学コミュニケーションセンターで発売中。



吉見 いくつか重要なことを言っていたように思います。広報では、リスク対応という形で、正しい情報を確実に発信していかなければならない。東京大学だからこそできる、そのような発信を考えていかなければなりませんね。これは地震研ばかりでなく、他の部局にも通ずる話ではないかと思います。

横山さんと大木さんは本郷地区キャンパス、神野さんは駒場地区キャンパスにいらっしゃいますが、東大の中核的なキャンパスとしてもうひとつ、柏地区キャンパスがありますね。今日はその柏から、数物連携宇宙研究機構の宮副さんがいらっしゃっています。宮副さん、よろしくお願います。

宮副 数物連携宇宙研究機構（以下、IPMU）は、数学者、天文学者、実験物理学者、理論物理学者が連携し、宇宙の謎を研究しているところです。文部科学省の世界トップレベル研究拠点に採択されて2007年に発足しました。【編集部註：2011年1月、本学の全学組織として国際高等研究所が設置された。これに伴い、現在、数物連携宇宙研究機構は（文部科学省世界トップレベル研究拠点のまま）、国際高等研究所に属する機構となっている】。この点は学内の他の研究所などと違うところで、文部科学省との繋がりが強いことが特徴です。

研究所のミッションとして「世界の目に見える研究拠点になること」が一番に挙げられていますので、広報で一番大切なのは「世界へ向けてのアピール」ということになります。これはとても難しい目標ですが、研究所全体で頑張っているところです。私は主にイベント関係やプレスリリースの業務に力を入れています。現在広報担当は私一人だけなので、国際交流係、秘書係、総務係の方などと連携して進めています。

柏地区キャンパスの中で考えると、IPMUは研究内容のうえで宇宙線研究所と強い繋がりがあるので、年に2回、合同の一般講演会を行っています。ひとつ、問題点を挙げるとすれば、柏地区キャンパスの広報の連携がまだ密でない部分が多いということでしょうか。私は着任して2年にな

りますが、つい半年ほど前まで柏の各部局にどんな広報担当者がいるのか、知りませんでした。これから、より連携を強めていきたいなと思っています。

現在、JSTの「女子中高生支援事業」に『**家族でナットク！理系最前線 ～見えないものを見てみよう！あなたも未来の女性研究者に～**』という東大の企画が採択されたことを受けて、柏地区キャンパスでも、新領域創成科学研究科、物性研究所、IPMUの3部局と一緒にイベントをやるという試みが行われようとしています。そういう機会に、少しずつ担当者レベルの交流から始めていければいいなと思っています。

それから、文部科学省世界トップレベル拠点として「もっと積極的にアウトリーチせよ」ということになっていまして、1ヵ月に1回程度の頻度で講演会やサイエンスカフェを行っています。これは非常に効果があったようで、事業仕分けの際に広く意見を求めたところ、「IPMUのイベントに参加して宇宙や科学全般に興味を湧いた。こういうサポートをもっと国がやってほしい」といった意見がたくさん寄せられました。

「国際化」に関しては、IPMUは「**まず英文ありき**」の組織ですので、HPも広報誌も、まず、英文から作るようにしています。英文HPの作成は、米国の企業と契約して外注しました。あまりごちゃごちゃさせないで、シンプルに見えるよう心掛けています。

広報誌は『IPMUニュース』を年に4回、発行していて、全世界に配布しています。著名な研究所や大学など、かなり広く配っているのです。そのリスト管理にけっこう時間がかかる場所ではありますね。

江川 柏は地域との連携が強いと思うのですが、複数部局が共同で地域連携をやっていたりもするんですか？

宮副 やはり、各部局ベースですね。

吉見 柏地区キャンパスの中での部局間連携は、まだまだこれからなのかもしれないですね。



神野智世子
先端科学技術研究センター
コミュニケーション・ディレクター



2010年、東京大学理系進路選択連絡会（工学系研究科、理学系研究科、農学生命科学研究科、新領域創成科学研究科、地震研究所、宇宙線研究所、生産技術研究所、物性研究所、数物連携宇宙研究機構）が開催した『家族でナットク！理系最前線II～世界最先端の研究現場を体験しよう！』のHP。



IPMUニュース
(年4回発行)



宮副 そうですね。最近、大気海洋研究所が柏に引っ越してきました、そちらの広報担当者の方とはこの前、お会いしました。最後に……私も神野さんと同様、理系出身ではなくて、企業広報をやっていたので、現在はコンテンツを書いたり、プレスリリースを作ったりするのに非常に時間がかかります。また、研究内容の解説などでは自分が責任を持っていない部分もあって、研究者の方々に負担をかけているなと感じています。

プレスリリースのメール化を

吉見 ありがとうございます。皆さん、活発に活動されているので、いろいろなお話が出てきますね。司会者としての私は、時間のマネジメントが悪くて、すでに1時間近く経過してしまいました。あと50分ほどで座談会を終えなければならないという状況に、私は追い込まれております(笑)。今回のテーマは「連携」ですので、ここからは、そちらに話を向けるように舵を切らせていただきます。

3つほど「本部に関する話」が出てきたように思います。横山さんから「部局広報は学術広報が軸であり、本部広報には『総長および執行部がどこに向かおうとしているのか』を発信する広報を望む」というお話がありました。大木さんからは「本部がどのように部局の情報を吸い上げて東大全体として発信していくか」というお話がありました。そして、「メール化」など、プレスリリースに関する話も出ていましたね。そこで、今度は本部広報課の小林さんから「本部はちゃんとやってるぞ」という(笑)現場サイドの話をしていただき、それを受けて江川理事から大局的なお話をうかがえればと思います。

小林 広報の小林です。はじめまして……ではないですね(笑)。実はもっと本部に対する苦情が出ていたのですが……。とりあえず、本部広報が抱えているいくつかの問題についてお話ししたいと思います。

まず、一つ目の問題。とにかく本部広報は日中の電話が多いです。学内の連絡ばかりでなく学外からもいろいろな質問が舞い込んで来ます。「赤門はなぜ赤いんですか？」

とか(笑)。広報は外部に対するサービスですので、どんな電話でも対応しなければなりません。皆さんにすれば、本部広報はけっこう人数が多いと感じられるかもしれませんが、日中は電話対応だけで手一杯。民間企業の場合、お客様窓口という形でテレフォンオペレーターがいたりしますよね。東大もそろそろそういうシステムが必要な時期に来ているのかもしれない。

2つめは全学の取材対応方針が統一されていないという点。大学として、ある程度の基本方針は決められているのですが、部局によって方針がやや違っていたり、報道関係者に対する温度差があります。多い日は1日に6~7件ほどの取材申し込みがあるんですが、本部では部局取材可否の判断がつかないため、すべて部局に照会をしなければなりません。

3つめは、HP掲載に関する基準・ガイドラインがほしいという点。たとえば、「これをHPに載せてほしい」という要望があった場合、ガイドラインがあれば、それに照らし合わせて掲載可否を決められるのですが、現在は本部広報に判断権限がないんです。やはり、そういう時のために基準を作る必要があるのかなと考えています。

それからもうひとつ、先ほどからお話に出ている「プレスリリース」の問題。本来なら、プレスリリースに関しても本部がイニシアティブをとらなければならないのだと思いますが、実際には部局からお送りいただいたりリリースを見て、日本語として内容が分かるかどうかをチェックし、足りない情報を指摘するぐらいのことしかできません。特に理系の研究成果に関しては内容まで踏み込むことは難しいです。この夏から広報室に南崎梓特任研究員が着任しましたので、今後は南崎さんに理系の研究成果リリースをチェックしてもらおうと考えています。

それで……ここから先はご批判を買う発言になるかもしれませんが……現在のプレスリリースは各部局の統一フォーマットによるものが送られてきますが、必ず、部局名の上のレイヤーで東大ブランドであることが分かるようにすべきだと思っています。

横山 リリースの上に付けていただく送り状(鑑)に、



「赤門はなぜ赤い？」は、学外の一般の方々から寄せられる代表的な質問である。赤門は、1827年、加賀藩主・前田斉泰が将軍・徳川家斉の第二十一女、溶姫を夫人として迎え入れる際に作られた門。当時、将軍家から夫人を迎える際には朱塗りの門にする慣習があった。後年、前田家敷地を東大キャンパスに加える際にこの門を残した。



宮副英恵
数物連携宇宙研究機構
特任専門職員



東大マークは入っていますか？

小林 鑑には東大マークを付けていません。やはり、鑑よりもプレスリリース本体の中にあるべきだと思うんです。

大木 「これが最高のプレスリリースです」という見本をお送りいただければ、その通りにやろうと思えますが（笑）。

小林 本部もそう考えていて、現在、プレスリリースのフォーマットの見直しを考えています。フォーマットが定まったら、ポータルに載せて全学に周知しようと考えています。

横山 理学部では「なるべく理学部ロゴを使うように」という内規があるんですが、こちらとしては本部で鑑をつけていただいているという安心感があって、鑑に東大マークが入っているのだらうと漠然と考えておりました。大変失礼しました。それから、理学部としては、東大としてプレスリリースを出すことを大事にしたいと考えておりますので、必ず本部を通させていただくという形をとっています。

小林 その通りですね。部局単独で発信してしまうのではなく、必ず本部を通して「東大のリリース」という形で発信していただきたいと私たちも考えています。

江川 プレスリリース上部の左右に、それぞれ部局マークと東大マークをつければ良いのでは？

神野 現在、WEBではそうになっています。東大ロゴに関しては、きっちり管理されていて、あまり部局では使えないのだらうと思っていました。

小林 そんなことはないですよ。東大ロゴは部局でも利用していただくことができます。全学ポータルサイトに使い方が記されていますので、そちらをご覧くださいませ。

神野 プレスリリースなどは統一フォーマットがあれば、部局としてはウェルカムなんですね。私が着任した頃、「プレスリリースはどうすれば良いですか？」と本部広報にお尋ねしたところ、大学記者会のFAX番号リストを1枚いただいて「ここに送ればOKです」と言われたんですね（笑）。そうになると、フォーマットも自分たちで作らなければならないので、現在のような状況になっているわけです。あ、そうおっしゃったのは現在の担当者の方ではありませんので（笑）。

吉見 いずれにせよ、統一フォーマットが必要ですね。本日、ここにお集まりいただいた方々は、東大の中でもとりわけ広報に熱心な部局の方々ですが、そういう部局はちゃんと専任者を置いているわけですね。しかし、広報は必要だと感じながらもマンパワーを割けずにいる部局もあるわけです。そういう部局にとってはプレスリリースのフォーマットとシステムが整っていることがとても大切だと思います。

小林 それは本部広報でいろいろと考えている部分です。吉見先生がおっしゃる通り、広報に熱心な部局ばかりではないので、広報専任者がいない部局も多いんです。当然、先生からいただいたリリース文がそのまま部局事務をスルーして本部広報に送られてくることがあります。以前、そのようなタイプのプレスリリースを行った後に海外のメディアから「広報担当の連絡先を教えてください」と言われたことがありました。当時、本部広報には理系の内容が分かる職員がいなかったため、結果的に、発信元の先生に広報担当窓口になっていただくしかなかったんですね。ですから、今後は本部広報が理系の学術広報や国際広報の窓口になれる体制を作るべきだらうと考えています。

やはり……最終的には「人」なんだと思うんです。「連携＝人」ということ。私たち常勤職員は3～4年で異動します。しかし、今回、お越しいただいた方々はもっと長い期間、広報に在籍される方々ですよ。本部も各部局もそういう方がいれば、広報体制を継続していけると思います。

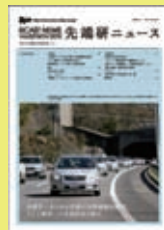


小林豊輝

本部広報課 係長



理学系研究科・理学部ニュース



先端研ニュース



地震研究所
ニュースレターPlus

2010年度は、海外主要メディアへの取材先リストの送付、重要な記者会見の通知などのアウトリーチ活動、英文学術情報発信の強化などに取り組んだ。

現在、本部広報室ではプレスリリースのメール配信を検討中。すでにメール配信を実施している諸機関（JAXAなど）にヒアリングを行い、東大に適したメール配信の仕組みを模索中。

吉見 先ほど、横山さんから「**プレスリリースのメール化**」のご提案がありました。

小林 現在、プレスリリースのメール配信も模索中です。配信先のメーリングリストの管理方法などいろいろと検討しています。

宮副 プレスリリースを海外のメディアに流すことは考えていらっしゃいますか？

小林 「**国際広報の充実**」という重要なミッションがありますので、今後、考えて行こうと思います。

横山 有楽町にある外国人記者クラブに所属するジャーナリストなら、ご紹介することができます。

小林 よろしくお願ひします。

吉見 ありがとうございます。それでは、少し大局的な話に移りたいと思います。まず、本部が部局の情報を適切に吸い上げるにはどうすれば良いかという問題があります。それから、「部局は学術を広報する。本部は執行部の方針を広報する」というすみ分けにおいては、本部と部局の間に連携すべき広大な領域が広がっていて、それを埋めなければ連携の形が見えてこないのではないかと思います。また、先ほどの神野さんのお話の中に著作権処理の問題がありましたが、そういう処理も学内で共同化できると良いのではないかと思いますね。今までのお話を受けて、江川理事のご見解をいただけますでしょうか？

江川 私としては「部局は学術情報の発信、本部は全体戦略や経営情報の発信」というすみ分けをしまうと、広報効果に限界が出てきてしまうと思っています。外部の方々から「東大の先生がこういう研究をされているそうですね」と言われて、自分でその研究者のことを調べようとする際に、とても苦労するんですね。googleなどで検索できる先生もいますが、名字しか分からない場合、東大HP

から調べようとすると、なかなか探せません。その先生の部局が分からないとたどり着けない形になっているので。

それから、同じテーマの研究が学内のあちこちで行われているという実態がありますね。外部の方から見ると、同じテーマの研究者が学内に散らばっているように見えるわけで、なぜそうなのかがなかなか理解しにくいと思うんです。「各部局が学術広報を一生懸命やっているのになかなか相乗効果が生まれにくい」ということには、そういう実態が関係しているように思います。ですから、今後は南崎特任研究員を通じて、**部局の学術情報を東大全体の広報としても外に発信していきたいと考えています**。「部局のHPにも学術情報が載っているけれども、本部のHPに行けば東大全体の学術情報が揃っている」という形にすることによって、ビジブルになるし、全学として広報の相乗効果が生まれるのではないかと思いますね。

現在、本部広報室でHPを整理する作業を進めているのですが、サーバーが部局ごとにバラバラなんですね。サーバーがバラバラだとHPのアクセスランキングなどで不利になってしまうこともあるし、何とか全学的に相乗効果をあげる仕組みができないかなと模索しています。

通常、企業広報などでは広報戦略やブランド戦略を集中管理しているのが当然なんですが、そういう外部の現実から考えると、東大にはびっくりするようなことがたくさんあります。たとえば、プレゼンテーションの時に使用するパワーポイントのテンプレートなどは、本部の中だけ見ても、皆、まちまちのスタイルでやっている。企業であれば、そういうことはありえないですね。ただ、大学の場合は部局のイニシアティブを生かしながらゆるやかに統一していく必要があるので、そのあたりのバランスを上手にとっていくことが重要だなと思います。

オーディエンスを意識することの大切さ

吉見 プレスリリースにせよ、パワーポイントのテンプレートにせよ、全体的なデザイン統一が必要なことはたしかですね……これは個人的見解になってしまうのですが、「名刺」がデザイン統一の好例だと思います。90年代後半

本学HPトップ右上にある「学術情報」では、研究成果に関するプレスリリースのうち特に本学HPにて紹介するべきものとして部局から掲載依頼があったものを紹介している。H22年7月より、本コーナーを「学問のショーウィンドウ」と位置づけ、少しずつ形式を整えてきた。まず、本コーナーが様々な研究科への「案内板」として機能するよう、短い紹介文の他にプレスリリース本文・研究科HP・論文などのURLを掲載することにした。また、このコンテンツの蓄積により東大全体の研究が見えてくるよう、日付や研究科名で検索できるアーカイブ機能を付ける準備を進めている。

XMASS実験装置が完成！



XMASS(エックスマス)実験は、宇宙に存在する「物質」の約7-8割を占める正付不荷の暗黒物質(ダークマターとも呼ばれる)の直接観測を目的としています。暗黒物質は宇宙の構造形成に深く関わっていると考えられており、直接観測できれば宇宙の謎の究明に大きく近づきます。光を出さず、私たちの目を通り抜けてしまう暗黒物質の観測は大変困難であるため、XMASS実験装置は、サイズの少ない暗黒物質探査山中に建設されました。XMASSは既存の暗黒物質検出器より感度が50倍高い世界最高感度の検出器であり、世界初の暗黒物質直接観測に大きな期待が寄せられています。

このたび、2007年から始まったXMASS建設が完了しました。来春より本格的な観測が開始されます。

2007年10月9日に検出器を報道関係者の方に公開しました。

XMASS-HP実験概要、検出原理等、詳しくはこちらへ。

宇宙線観測(宇宙線)

宇宙線観測(宇宙線) 暗黒物質探査山中に建設されたXMASS

観測原理(宇宙線)



まで、本学の教職員の名刺はデザインがバラバラでした。皆、自分で名刺を作っていたので。しかし、最近はほとんどの方が東大フォーマットの名刺を使っていて、自分で勝手に名刺を作っている方はかなりマイノリティになりつつある感じですね。なぜ、そう変わってきたのかと言えば、とても単純な話で、教員も事務の方に頼むと、大学の経費で一定量の名刺を作ってくれるからです。とても便利だから。名刺以外のデザイン統一に関しても、このやり方が当てはまるのではないかと思います。部局やプロジェクトも便利で安ければだんだんそちらにシフトしていくはずですから、そのようなリソースをどう確保していくかという話になると思います。

それから、この後の議論につなげていただきたいんですが、全学共通の広報プラットフォームを作っていく際に「誰に向けての広報か」を考えることが非常に重要なポイントですね。国際的な発信をするのであれば、主に研究機関、研究者、留学志望者に向けて「東京大学」というブランドをアピールしていくべきでしょうし、国内での情報発信であれば、政府、研究機関、受験生や大学院志望者、一般市民というターゲット別に東大ブランドのアピール方法を考えていく必要があります。「誰に向けての広報なのか」ということと「全学の情報発信のどの部分を統一するか」ということは密接な関係があるように思います。

大木 どういう人が本部の東大HPに行くのかということを考えてみると……たとえば、私たち地震学関係者がハーバード大学の先生を調べようとする場合、地震学教室を調べます。ハーバード大学のトップのHPは飛ばして、直接、地震学研究所のHPに行きますね。とすれば、どのようの方が東大本部のトップに行くのでしょうか……高校生からシニアの方まで、学術関係者ではない一般市民の方は、東大トップのイベント欄から見つけて地震研HPに到達するのだと思います。しかし、それ以外のパターンがちょっと想定しづらいですね。

そのように考えていくと、まさに「ターゲットはどのような層なのか」ということが問題ですね。ターゲットがあって、目的があって、そのための戦略がある。そして、

守りたいポリシーがある。それは当然なのですが、そもそもターゲットを決めることが大変難しい。

横山 大学全体として発信する広報としては「**国民、さらには政府に対するアピール**」がありますね。大学の運営費交付金が減り続けていること、それによる予算の圧縮が深刻であることは、学内の教職員の方々もよくご存じのはずです。もちろん、これまでも政府や経済界に対するアピールは行われてきましたが、今後はますます必要になってくると思っています。科学政策に対する「部局としてのアピール」は日頃から私や大木さんも協力してやっています。しかし、「東京大学」の総意として、大所高所から本部発信していただくことがとても大切です。

江川 オーディエンスの問題は非常に重要ですね。一般社会へのアピールは広報の基本機能なので、東大HPもそれを強く意識して作っています。しかし、うまくできているところとそうでないところがあって、デコボコがある状態です。

広報を考える時に「対外」と「対内」を切り離さずに考える必要があります。「対内」の広報ということ言えば、**東大の学生への広報**はあまりできていないですね。たとえば、男女共同参画の先生が女子学生を募集しようとしても、なかなかうまくいかなかったそうです。

結局、部局別に先生方のコネクションを使って集めてくるしか方法がなかったとのことでした。外国の大学などでは学生向けポータルがあるのが当たり前だったりするので、そのあたりの整備が必要だと思います。いずれにせよ、今後は対外・対内をリンクさせた形で、重要なステークホルダー向けの情報をきちんと出していきたいと考えています。

さきほど、大木さんから「ハーバード大学の地震研が分かっている方は直接そこを調べる」というお話がありましたが、ハーバード大学を検索する人々の中で、そのような方は少ないのではないかと思います。大学というところは、学術関係者ばかりでなく、相当広い範囲のオーディエンスに対応しなければなりません。ですから、東大の場合でしたら、一般の方々も含めて、ありとあらゆる方々が東大HP

2009年秋、事業仕分けに際し、「短期的成果主義」から脱却した判断を望む
科学技術創造立国を真に実現するために

2009年秋、事業仕分けによる科学技術予算の削減に対して、大学・研究機関を中心に多くの提言やアピールが行われた。理学系研究科HPには、国立大学法人10大学理学部長会議名義で「事業仕分けに際し、「短期的成果主義」から脱却した判断を望む 科学技術創造立国を真に実現するために」と題する提言が掲載された（平成21年11月23日）。

2009年秋、事業仕分けによる科学技術予算の削減に対して、大学・研究機関を中心に多くの提言やアピールが行われた。理学系研究科HPには、国立大学法人10大学理学部長会議名義で「事業仕分けに際し、「短期的成果主義」から脱却した判断を望む 科学技術創造立国を真に実現するために」と題する提言が掲載された（平成21年11月23日）。



学生が作る東大HP『UT-Life』。東京大学の公認サイトとして2004年11月5日に開設された。学生の視点から本学に関する情報を発信している。



を訪れているように思います。サービスという面で、一般の方々にネガティブな感情を持たれると、それが政策に跳ね返ってきたりもしますので、しっかりと対応する必要がありますね。東大との距離が遠い方ほど、東大側のミスに対するリスク許容度も低いだろうと思いますので。

それから、もうひとつ、「広報効果の測定」と「測定結果を受けての工夫」をどのようにやっていくかという問題があります。昨年の科学技術予算の仕分け問題の際にも、東大のみならず7大学あるいは9大学という形で連携して情報発信していましたが、想定していたほどマスコミに取り上げられなかったようだという話がありました。そのあたりをきちんと測定して「どうすれば効果的に広報できるのか」を考えていく必要があるなと思います。

宮副 情報発信ということ考えると、東大全体で情報が多すぎるといってもありますし、効率的に集約されていないという問題もあります。たとえば、ひとつの研究所の中でも、研究所HPよりも各研究者個人がウィキを作ってそちらに有用な情報を載せているといったケースがあります。ですから、東大全体でどのような情報が発信されていて、それを交通整理していく人の存在がとても大切ですね。

小林 東大HPのウェブマスターがいて、部局HPにもウェブマスターがいて、しっかりとタッグチームを組んでやっていくことで、そういう問題が解消していくと思うのですが……そういう形は、まさに「理想」ですね（笑）。そういう体制を確立することはなかなか難しいです。

東大のブランディングに寄与する広報

大木 これは私の部局に限ったことではなく、大学全体に言えることだと思うのですが……広報の「真価」を理解してくれている研究者がとても少ないですね。特に地震学に関しては災害時だけでなく防災という意味も含めてとても広報が大切だと思うのですが、私の広報コミュニケーション論文に対して、「あなたの論文には数式が出てこ

いんですか」とおっしゃる先生もいらっしゃいます。「研究」業界特有の「広報に対する無理解」。企業でしたら、その大切さは皆、理解していると思うんですが……ですから、インサイドリーチと言いますか、学内の研究者に向けて「広報の大切さを意識してもらうための広報」が必要なのではないかと痛感しています。

江川 それは大切ですね。かつての東大は国の一機関でしたから、広報は必要なかったのだと思います。しかし、法人化後5年が経過した現在もその意識が大きく変わっていないためにポジティブ広報が弱い状態にあります。部局だけでなく本部でも同様のことが言えると思いますね。

大木 広報の役割を考えた場合、企業ならば商品を宣伝して売上を上げることが主で、他にはCSR【編集部註：企業の社会的責任】の告知などがありますね。役所ならきちんと情報を出して市民の誤解を招かないようにするのが広報。では、大学・研究機関の広報とは何なのか。私は着任以来、ずっとそれを考え続けています。現在は、大学も企業並みに「経営」をやる体制になってきているので、企業広報の意味と大学・研究機関広報の意味はとても近づいてきているのではないかと思います。そういう意味では、企業のCSR告知に近い広報が求められているように思います。「社会への貢献」をアピールし、東京大学のブランド価値を上げることに寄与する。それが大学・研究機関の広報だと考えています。ですから、「広報が何をやっているのか分からない。だから広報の価値を認めない」という学内構成員の考えが徐々に変わっていくといいなと思います。

神野 その通りで、さらに、ファンディング・エージェンシー【編集部註：競争的研究資金配分機関。日本学術振興会や科学技術振興機構など】のほうも意識を変えていただく必要があると思います。研究費のうち10%を広報に使いなさいということになれば、マンパワーも確保できます。たぶん米国ではそういうことが行われているはずなので、日本もそういう部分を取り入れてはどうかと思いますね。

東京大学憲章

【東京大学憲章のデフォルト】

前文

21世紀に入り、人類は、国家を超えた地球大の交わりが飛躍的に強まる時代を迎えている。

日本もまた、世界に自らを開きつつ、その特質を発揮して人類文明に貢献することが求められている。東京大学は、この新しい世紀に際して、世界の公共性に奉仕する大学として、文字どおり「世界の東京大学」となることが、日本国民からの付託に応じて日本社会に寄与する道であるとの確信に立ち、国籍、民族、言語等のあらゆる境を超えた人類普遍の真理と真実を追究し、世界の平和と人類の福祉、人類と自然の共存、安全な環境の創造、諸地域の均衡のとれた持続的な発展、科学・技術の進歩、および文化の批判的継承と創造に、その教育・研究を通じて貢献することを、あらためて決意する。この使命の達成に向けて新しい時代を切り拓こうとするこの時、東京大学は、その依って立つべき理念と目標を明らかにするために、東京大学憲章を制定する。

2003年に制定された東京大学憲章の前文には【東京大学は、この新しい世紀に際して、世界の公共性に奉仕する大学として、文字どおり「世界の東京大学」となることが、日本国民からの付託に応じて日本社会に寄与する道であるとの確信に立ち、国籍、民族、言語等のあらゆる境を超えた人類普遍の真理と真実を追究し、世界の平和と人類の福祉、人類と自然の共存、安全な環境の創造、諸地域の均衡のとれた持続的な発展、科学・技術の進歩、および文化の批判的継承と創造に、その教育・研究を通じて貢献することを、あらためて決意する。】と謳われている。



横山 倫理的問題を伴う学術分野において、米国では広報費10%が当たり前となってきています。日本では、まだ、数%をどう考えるかで意見が分かれます。ある程度の経費をちゃんと広報に割くことが当たり前であるという感覚が醸成されてくるといいですね。

江川 広報費の使い道の問題もありますね。すでに「プロジェクトベースの予算では一部を広報に使わねばならない」ということになっていると思いますが、どのプロジェクトも3月にシンポジウムをやることで広報費を使う傾向があるようですね。あのお金をシンポジウム以外の広報に使うことはできないのかなと思います。

それから、東大全体として見ると、プロジェクトのような小さいポケットに入ってくる予算が多いので、それらの一部をプールして何か効果的な広報に使えないものかなと考えています。

広報専門職の常勤職員を

吉見 たしかに、日本はシンポジウムだらけになっていますよ。広報費をシンポジウムばかりに使うのではなく、地道に広報のベースを作っていく人材を配置するために使ってほしいですね。

いわゆる広報専門職が必要です。財務なら財務の専門家がいないように、広報なら広報の専門家が常勤職員の中にあるべきでしょう。人事畑や財務畑のように広報畑を作っていく必要があります。

江川 財務の職員が財務系でキャリアアップしていくように広報も広報系でキャリアアップしていける人事システムを作ればいいんですね。

吉見 それから、今日ここにお集まりいただいた方々はほぼ理系部局ばかりですが、文系の学術広報の問題もありますね。文系部局の場合はリソースが極端に不足しているために広報を充実させることができないという現状があります。マンパワーが足りないので広報まで手が回らない

わけですね。さきほどの名刺の例のように、便利で利用しやすい広報システムを作れば、リソースの足りない文系部局も広報に熱心になっていくのではないのでしょうか。大学全体を見てみると、不十分な広報インフラの中で一生懸命、大きなイベントなどをやっていますね。それらは大体、成功しているんだと思いますが、全体のインフラが脆弱であるために相乗効果が生まれてこないのだろうと思います。

横山 そういう意味でも、やはりネットワークが大切ですね……今年3月に各部局などの広報担当者が集って「東京大学広報研究会」を立ち上げました。皆さんとの間で情報交換ができればと思って。それから、さきほど宮副さんからご紹介いただいたお話……以前から女子中高生へのアウトリーチ構想を文部科学省に提出していたのですが、なかなか通りませんでした。ある時、「連携する形であれば」と言われ、部局連携して提案したところ、昨年度、ようやく予算が取れました【編集部註：JST女子中高生支援事業『家族でナットク！理系最前線～見えないものを見てみよう！あなたも未来の女性研究者に～』】。昨年度は私が代表を務めさせていただき、その時の活動でいろいろと連携が増えました。実質的な活動と結び付けて連携を組めたことは大変よかったと思っています。

江川 そのような形で広報の横の連携ができつつあるのなら、その中で情報共有してベストプラクティスを広めていくのが良い方法ですね。

大木 その最前線にいる部局は広報戦略をどんどん推し進めて行くことができますよね。

吉見 そうですね。広報に熱心な部局の体制充実を目の当たりにして、「うちはこんなに遅れている」と気づいてもらうことが大切かもしれません。気づいて手を挙げた部局をどんどんネットワークに加えていく。

大木 「うちは、マズイ！」とさせていただききっかけ作りとして、広報担当者ネットワークが機能すれば（笑）。

mini ACADEMIC GROOVE



AERAMック『東大へ行こう。』



SYNAPSE



LIFE - Chew it over



Academic Park



CHOICE

2011年4月、本部は、社会連携の推進を行う組織体制を整備すべく、社会連携担当部長・社会連携担当課長を置いた。

神野 漠とした言い方になってしまうのですが……広報をやっていると「この先端研がいつまで続くか分からないよね」なんて話も耳に入ってきます。もちろん、そうやって欲しくはありませんが、でも50年後、仮に先端研がなくなっていたとしても「あの頃は、ああいう研究所があって日本のために良かったね」と一般市民に思っただけのような研究所であってほしいと思っています。これは先端研だけに限った話ではなく、東大は100年後に「東大があつて本当に良かった」と思っただけの存在であつてほしいと思います。もちろん、東大はその頃も元気に存続していると思いますが。たとえば、世界で大きな災害が起きた時にハーバード大学やスタンフォード大学は学長による「お見舞いの言葉」を送ります。そして、学生たちが募金を始めたり、留学生に対するケアを行ったりしています。東大も、そのように社会的に「しっかりとやっている」ところを見ていただきたいし、それが最大の「社会からの信頼」になると思うんです。

吉見 いい話ですね。そして、とても大切な話です。そのような「大学の態度」が社会との強固な信頼関係を築いてくれるのだと思います……東大に限らず、「大学を大切にす社会」を日本の中にどうやって作っていくかという事は、とても重要な課題ですね。そういう社会を作っていくうえで、東京大学の役割は非常に大きいものだと思います。

まず。広報は、“Public Relations”ですから、「関係づくり」なんだと思うんです。関係する相手はいろいろいるけれども、それぞれの関係づくりを知恵を出し合ってやっていきましょうという体制が、今、徐々に出来つつある。それが東京大学の現状だと考えています。

では最後に江川理事から一言、いただけますでしょうか。

江川 関係づくりという意味では、現在、**社会連携**を積極的にやろうという動きが出てきています。そのような動きも広報と密接な関係がありますね。

従来の東大広報は、少ない人数でやっていたということもあって、どうしても不祥事対応などのネガティブ広報が中心になっていました。しかし、今後は学術情報や大学の「良い話」もポジティブに発信していくことが大切だと考えています。ある大企業の広報責任者の方とお話した時、「巨大な組織であれば、どうしてもネガティブな話も出てくる。それは仕方がないことで、組織のイメージのバランスを取るためには、同時に、ポジティブな情報をどんどん出していくべきだ」とおっしゃっていました。

今後は、ポジティブ広報に力を注ぎつつ、「東大の良さである『自律分散』という形を生かしながら全体の集約していく」という考えを広げていきたいと考えています。

【2010年7月 本部棟応接室にて】



NEWS

一般ニュース

部局長の交代

平成23年4月1日付で、下記のとおり部局長の交代がありました。新部局長をご紹介しますとともに、退任された部局長のご挨拶を掲載します。

	新部局長	前部局長
大学院医学系研究科長・医学部長	宮園浩平	清水孝雄
医学部附属病院長	門脇 孝	武谷雄二
大学院人文社会系研究科長・文学部長	中地義和	小松久男
大学院理学系研究科長・理学部長	山形俊男	(再任)
大学院農学生命科学研究科長・農学部長	長澤寛道	生源寺眞一
大学院教育学研究科長・教育学部長	市川伸一	武藤芳照
大学院新領域創成科学研究科長	上田卓也	大和裕幸
医科学研究所長	清野 宏	清木元治
地震研究所長	小屋口剛博	平田 直
史料編纂所長	榎原雅治	(再任)
分子細胞生物学研究所長	秋山 徹	(再任)
物性研究所長	家 泰弘	(再任)
大気海洋研究所長	新野 宏	西田 睦

新部局長紹介

大学院医学系研究科長・医学部長

宮園 浩平 教授

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)



昭和56年3月

本学医学部医学科卒業

昭和61年5月

スウェーデン王国ルードヴィ

ヒ癌研究所研究員

平成元年12月 医学博士

平成7年4月

財団法人癌研究会癌研究所

生化学部長

平成12年8月 本学大学院医学系研究科教授

所属：大学院医学系研究科 病因・病理学専攻

病理学講座 分子病理学分野

専門分野：分子病理学、分子腫瘍学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) Ikushima, H., et al. "Autocrine TGF- β signaling maintains tumorigenicity of glioma-initiating cells through Sry-related HMG-box factors." *Cell Stem Cell* 5, no. 5 (2009): 504-514.
- 2) Suzuki, H.I., et al. "Modulation of microRNA processing by p53." *Nature* 460, no. 7254 (2009): 529-533.
- 3) Derynck, R. and Miyazono, K. eds. *The TGF- β Family*. Cold Spring Harbor Laboratory Press (2008).

医学部附属病院長

門脇 孝 教授

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)



昭和53年3月

本学医学部医学科卒業

昭和61年10月

米国国立衛生研究所 (NIH)

糖尿病部門客員研究員

平成13年1月

本学大学院医学系研究科

代謝栄養病態学

(糖尿病・代謝内科) 助教授

平成15年8月

本学大学院医学系研究科代謝栄養病態学（糖尿病・代謝内科）教授（現職）

平成16年4月～平成18年3月 本学総長補佐（兼務）

平成17年4月 本学医学部附属病院副病院長（兼務）

平成21年4月～平成23年3月

本学総長特任補佐（兼務）

所属：大学院医学系研究科 内科学専攻代謝・栄養病態学講座（糖尿病・代謝内科）

専門分野：内科学、糖尿病・代謝学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) Kadowaki, T., et al. "Two mutant alleles of the insulin receptor gene in a patient with extreme insulin resistance." *Science* 240 (1988): 787-790.
- 2) Yamauchi, T., et al. "Molecular cloning of adiponectin / Acrp30 receptors that mediate antidiabetic metabolic effects." *Nature* 423 (2003): 762-769.
- 3) Iwabu, M., et al. "Adiponectin and AdipoR1 regulate PGC1-1 and mitochondria by Ca²⁺ and AMPK/SIRT1" *Nature* 464 (2010): 1313-1319.

大学院人文社会系研究科長・文学部長

中地 義和 教授

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)



昭和51年3月
本学教養学部教養学科卒業
昭和54年3月
本学大学院人文科学研究科仏語仏文学専門課程修士課程修了
昭和60年12月
パリ第3大学第3期課程博士

昭和61年3月

本学大学院人文科学研究科 仏語仏文学専門課程博士課程満期退学

昭和61年4月 本学教養学部助手

昭和63年4月 本学教養学部助教授

平成4年4月 本学文学部助教授

平成8年2月

本学大学院人文社会系研究科・文学部教授

平成16年4月～平成18年3月

教育研究評議員・本学大学院人文社会系研究科副研究科長

所属：大学院人文社会系研究科 欧米系文化研究専攻

フランス語フランス文学講座

専門分野：フランス近代文学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) Yoshikazu Nakaji, *Combat spirituel ou immense dérision ? Essai d'analyse textuelle d'« Une saison en enfer »*, Paris, Corti, 1987
- 2) 中地義和（共著）『フランス文学史』（田村毅・塩川徹也編）東京大学出版会, 1994年
- 3) 中地義和『ランボー、自画像の詩学』岩波書店, 2005年

大学院理学系研究科長・理学部長

山形 俊男 教授（再任）

(任期：平成23年4月1日～平成24年3月31日)

大学院農学生命科学研究科長・農学部長

長澤 寛道 教授

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)



昭和46年6月
本学農学部卒業
昭和48年3月
本学大学院農学系研究科修士課程修了
昭和53年3月
本学大学院農学系研究科博士課程修了

昭和55年5月 本学農学部助手

平成3年6月 本学海洋研究所助教授

平成6年1月 本学海洋研究所教授

平成9年9月 本学大学院農学生命科学研究科教授

所属：大学院農学生命科学研究科 応用生命化学専攻

専門分野：生物有機化学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) 『生物有機化学』東京化学同人, 2008年
- 2) M. Suzuki et al. "An acidic matrix protein, Pif, is a key macromolecule for nacre formation." *Science*, 325 (2009): 1388-1390.
- 3) A. Sato et al. "Glycolytic intermediates induce amorphous calcium carbonate formation in crustaceans." *Nature Chem. Biol.* 7 (2011): 197-199.

大学院教育学研究科長・教育学部長

市川 伸一 教授

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)



昭和52年3月
本学文学部卒業
昭和54年3月
本学大学院人文科学研究科心理学専門課程修士課程修了
昭和55年10月
同博士課程中退。埼玉大学経済短期大学部専任講師

昭和63年3月 文学博士（東京大学）

昭和63年11月 東京工業大学工学部助教授

平成6年4月 本学教育学部助教授

平成11年3月 本学大学院教育学研究科教授

所属：大学院教育学研究科 総合教育科学専攻

教育心理学コース

専門分野：教育心理学、認知心理学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) 『確率の理解を探る—3囚人問題とその周辺—』共立出版, 1998年
- 2) 『学力低下論争』筑摩書房, 2002年
- 3) 『学ぶ意欲とスキルを育てる—いま求められる学力向上策—』小学館, 2004年

大学院新領域創成科学研究科長

上田 卓也 教授

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)



昭和54年3月
本学農学部卒業
昭和56年3月
本学大学院農学系研究科修士
課程修了
昭和59年3月
本学大学院農学系研究科博士
課程修了

昭和59年5月

マックスプランク実験医学研究所博士研究員

昭和61年9月 横浜市立大学 木原生物学研究所助手

昭和63年5月 東京工業大学総合理工学研究科助手

平成4年6月 本学工学部助手

平成6年8月 本学大学院工学系研究科講師

平成8年8月 本学大学院工学系研究科助教授

平成10年4月

本学大学院新領域創成科学研究科助教授

平成11年4月 本学大学院新領域創成科学研究科教授

所属：大学院新領域創成科学研究科

メディカルゲノム専攻

専門分野：生化学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) Ueda, T, Ohta, T and Watanabe, K “Large scale isolation and some properties of AGY-specific serine tRNA from bovine heart mitochondria.” *J Biochem (Tokyo)* 98 (1985): 1275-1284.
- 2) Shimizu, Y, Inoue, A, Tomari, Y, Suzuki, T, Yokogawa, T, Nishikawa, K and Ueda, T “Cell-free translation reconstituted with purified components.” *Nat Biotechnol* 19 (2001) 751-755.
- 3) Endo, Y, Takai, K and Ueda, T (eds) “Cell-Free Protein Production” Humana Press (2010)

医科学研究所長

清野 宏 教授

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)



昭和52年3月
日本大学松戸歯学部卒業
昭和58年12月
アラバマ大学バーミングハム
校医学系大学院博士課程修了
平成3年10月
アラバマ大学バーミングハム
校メディカルセンター教授

平成6年11月 大阪大学微生物病研究所教授

平成14年4月 本学医科学研究所教授

所属：医科学研究所 感染・免疫部門炎症免疫学分野

専門分野：粘膜免疫学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) Nochi, T., Yuki, Y., Takahashi, H., Sawada, S., Mejima, M., Kohda, T., Harada, N., Kong, IG., Sato, A., Kataoka, N., Tokuhara, D., Kurokawa, S., Takahashi, Y., Tsukada, H., Kozaki, S., Akiyoshi, K., and Kiyono, H. “Nanogel antigenic protein-delivery system for adjuvant-free intranasal vaccine.” *Nature Materials* 9 (2010) : 572-578.
- 2) Tokuhara, D., Yuki, Y., Nochi, T., Kodama, T., Mejima, M., Kurokawa, S., Takahashi, Y., Nanno, M., Nakanishi, U., Takaiwa, F., Honda, T., and Kiyono, H. “Secretory IgA-mediated protection against *V. cholerae* and heat-labile enterotoxin-producing enterotoxigenic *Escherichia coli* by rice-based vaccine.” *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 107 (2010): 8794-8199.
- 3) Obata, T., Goto, Y., Kunisawa, J., Sato, S., Sakamoto, M., Setoyama, H., Matsuki, T., Nonaka, K., Shibata, N., Gohda, M., Kagiya, Y., Nochi, T., Yuki, Y., Fukuyama, Y., Mukai, A., Shinzaki, S., Fujihashi, K., Sasakawa, C., Iijima, H., Goto, M., Umesaki, Y., Benno, Y., and Kiyono, H. “Indigenous opportunistic bacteria inhabit mammalian gut-associated lymphoid tissues and share a mucosal antibody-mediated symbiosis.” *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America* 107 (2010): 7419-7424.

地震研究所長

小屋口 剛博 教授

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)



昭和55年3月
本学理学部卒業
昭和57年3月
本学大学院理学系研究科
修士課程修了
昭和60年3月
本学大学院理学系研究科
博士課程修了

平成15年4月 本学地震研究所教授

所属：地震研究所 数理系研究部門

専門分野：数理火山学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) 小屋口剛博 火山現象のモデリング，東大出版会，(2008)
- 2) Takehiro Koyaguchi. "Magma mixing in a conduit." *Journal of Volcanology and Geothermal Research* 25, (1985): 365-369.
- 3) Takehiro Koyaguchi et al. "Effects of the crater on eruption column dynamics." *Journal of Geophysical Research* 115, B07205, (2010): doi:10.1029/2009JB007146.

史料編纂所長

榎原 雅治 教授（再任）

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)

分子細胞生物学研究所長

秋山 徹 教授（再任）

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)

物性研究所長

家 泰弘 教授（再任）

(任期：平成23年4月1日～平成24年3月31日)

大気海洋研究所長

新野 宏 教授

(任期：平成23年4月1日～平成25年3月31日)



昭和50年3月
本学理学部卒業
昭和52年3月
本学大学院理学系研究科
地球物理学専攻修士課程修了
昭和56年3月
本学大学院理学系研究科博士
課程単位取得退学

昭和56年4月 気象庁気象研究所研究官

平成7年4月 本学海洋研究所助教授

平成15年10月

本学海洋研究所（現大気海洋研究所）教授

所属：大気海洋研究所 海洋物理学部門

専門分野：気象学、地球流体力学

研究内容（代表的な著書や論文等）：

- 1) Hiroshi Niino and Nobuhiko Misawa. "An experimental and theoretical study of barotropic instability." *Journal of the Atmospheric Sciences* 41, no. 12 (1984): 1992-2011.
- 2) Mikio Nakanishi and Hiroshi Niino. "An improved Mellor-Yamada level 3 model with condensation physics: Its design and verification." *Boundary-Layer Meteorology* 112, no. 1 (2004): 1-31.
- 3) Wataru Mashiko, Hiroshi Niino, and Teruyuki Kato. "Numerical simulation of a tornadogenesis in a mini-supercell in an outer rainband of Typhoon Shanshan on 17 September 2006." *Monthly Weather Review* 137, no. 12 (2009): 4238-4260.

部局長退任の挨拶

退任にあたり

前大学院医学系研究科長・医学部長

清水 孝雄

平成19年から4年間、医学系研究科長・医学部長を務めさせて頂きました。学生は450名、大学院生は客員部門を含めると1000名を越えており、また、附属病院を持つ大きな所帯の舵取りでしたが、幸い、大過なく、いくつか将来への芽を残せたと思っています。病院長、医学部執行部と事務組織、また、理事や本部組織のお力添えのお陰と思います。

この間、3つの建物の耐震工事にあわせて、研究教育施設の改修と質の向上を図り、また、創立150周年関連事業、医学部定員増、数々の研究医育成プログラム作りと政策提言、教育改革、男女共同参画などに取り組みました。いずれも不十分ですが、「未来の医学医療を作る研究医が不足しており、本学がこの育成を率先して進

めるべき」との私どものメッセージは、学生や教員にある程度届いたと思いますし、また、政府が研究医育成を予算化したのは一歩前進といえます。未解決の課題が沢山あるなか3.11の大地震を経験し、以降の困難な時代に教育、研究をどの様に進めるか、多くの新しい問題が生まれました。活力を維持、発展させられるよう、別の立場から今後もお手伝いしたいと思っています。多くの方々のご協力とご助言に感謝します。

法人化制度下での東大病院に期待されるもの

前医学部附属病院長

武谷 雄二

通算6年間、東京大学医学部附属病院長を拝命し、この間に本学が法人化されました。特に病院では経営の“効率化”を強いられ、若干の裁量範囲の拡大と抱き合わせで病院のみに特別な交付金の減額がなされました。財政的には病院職員一同の献身的努力により、診療規模の拡張による診療収入の増額を達成し経営面で健闘したのみならず、第三者による病院の総合評価でも全国でトップにランクされています。しかし、大学病院に期待される診療レベルを確保するためにはこれ以上の経営努力は限界に近づいています。すなわち、大学病院特有の医療の質を保持するか、あるいは経営の健全化を優先しつつ大規模病院としての存続をめざすか二者択一を迫られています。一方、法人化後の診療重視の方針は臨床研究の業績の後退という代価を払っています。東大病院の進むべき方向を大学や社会全体で熟考すべき時期を迎えています。幾多の課題を抱えています。総長、理事をはじめ多くの方々に格別なご配慮を賜りましたことを深謝申し上げます。

「1日は長く、2年は短く」

前大学院人文社会系研究科長・文学部長

小松 久男

2年前、文学部長・人文社会系研究科長に就任するときのこと、前任者からもらった言葉は「1日は長いけれども、終わってみれば2年の任期は短いもの」でした。いま、その言葉を実感しています。この間、苦楽を共にした部局長の皆様をはじめ、学内に多くの友人や知己を得たことは大きな収穫でした。心残りがあるとすれば、一つはウイグル人留学生トフティーさんのこと。一時帰国中に無実の罪で実刑判決を受けた彼は、刑期をすべて終えた今も復学を果たせていません。私の任期中に迎えることはかないませんでした。しかし、去る3月11日の大震災の夜、文学部長室に最初のお見舞いの電話をくれたのは、トフティーさんその人でした。もう一つは、新図書館の構想です。部局の別を越えたこの構想は、東京大学のみならず、世界の学術に大きく貢献することができると信じています。けっして容易な事業ではありませんが、これを軌道に乗せるために微力を尽くしたいと思います。

4年を振り返って

前大学院農学生命科学研究科長・農学部長

生源寺 眞一

振り返って、旧農場の農業問題をはじめ、さまざまな出来事がありました。とても大過なく退任などと申し上げられる状況にはありません。それでも、研究科がしっかり前を向き、希望を胸に歩いていく態勢のもとで、職務を終えることができそうです。これも、難局に冷静に対処していただいた研究科の教職員の皆さん、心温まる叱咤激励や懇切なご指導を頂戴した全学の教職員の皆さんのおかげです。篤く御礼を申し上げる次第です。

研究科長としての4年間は、それまでとは異なる角度から東京大学を見つめる機会でもありました。総長賞授与式の印象的なプレゼンテーションを、いまでも思い起こすことがあります。入試実施委員長として接した教職員の皆さんの献身的な仕事ぶりも、昨日のこのように目に浮かびます。4年間、沢山の知恵とパワーと美しさに接することができました。有り難いことです。

4月から名古屋大学勤務のため、学外からになります。私なりに農学生命科学研究科と東京大学に恩返しができると思います。今後ともよろしく願いいたします。

からだを育み、心を育み、人を育む

前大学院教育学研究科長・教育学部長

武藤 芳照

平成21年度に研究科長・学部長に就任するに当たり、教育を標記のような営みととらえ、共に育み共に育まれるという「共育」の概念をも明示しました。「明朗闊達にして、アットホームでチームワークを大切にする」という基本姿勢で、教職協働、学部と附属中等教育学校との一体化を図りつつ、日々の管理・運営業務及び各種事業・行事を推進して参りました。

幸い、総長他本部役員・職員・並びに研究科・附属学校の教職員の皆様のご指導・ご支援・ご協力のおかげで、この2年間、本研究科・学部・附属学校のプレゼンスを高めることができ、概ね無事に任務を果たすことができ、安堵致しています。

構成員の一人ひとりを大切にすることが組織を充実・強化することに結びつくことを改めて再認識もしています。

丁度、教育学部60周年という大きな節目となる時期の研究科長・学部長になったことも、今振り返ってみれば、誠に幸いであったと考えています。

関係各位のご協力に改めて感謝申し上げます。

退任のご挨拶

前新領域創成科学研究科長

大和 裕幸

研究科内の先生方、事務部の皆様をはじめとして多くの方々に支えられ、このたび任期を終えることができました。大学執行部や他部局長の先生方には常に適切なご

指導をいただき誠にありがとうございました。当研究科は、設置後12年、分野の融合による新しい学術体系の創成を目指してきました。任期中に外部委員による研究科の評価を行い、順調に進んでいるとの評価をいただきましたことは大きな励みになりました。多彩なバックグラウンドをもつ学生を抱える研究科には悩みも多く、様々な教員学生の交流の機会を設けるなどしてきました。柏地区の3キャンパスを整備して国際化と社会連携を強く推進し、教育研究の国際的な拠点とすることが今後の目標です。当研究科に対しまして、学内外からのなお一層のご支援ご指導をお願い申し上げます。

貴重な経験

前医科学研究所長
清木 元治

所長在任期間の4年に、副所長時代の4年間を加えると、合計で8年間も医科研執行部を率いることになってしまった。赴任した当時には夢にも思わなかったことである。不運なことに、私が所長に就任する時点で、全国国立大学附置研究所・センター長会議会長を翌年度から医科研所長が務めることも決まっていた。所長就任直後から全国国立大学附置研・センター長会議の次期会長として、当時の前田正史会長（当時生産技術研究所長、現東京大学理事）の見習いを務め、平成20年には附置研・センター会議の意見をまとめながら共同利用・共同研究拠点化をめぐる折衝を文部科学省と行うことになった。研究に没頭する立場からは大きな転換であったが、それまでとは違った視野で研究および教育の組織を考える良い経験となった。また、他大学出身者としては、科所長会議に参加することにより、初めて東京大学の全体像に触れることができた。研究面では残念な思いが残る一方で、大変貴重な経験でもあった。

最後まで油断してはならない

前地震研究所長
平田 直

私が所長在任中の平成22年4月に、地震研究所は共同利用・共同研究拠点になり、同時に、平成6年の全国共同利用研究所への改組以来の大きな改組を行いました。よりいっそう地震火山の観測研究の推進を図る体制になり、研究所の役割を明確化することができたと思っています。私が所長になった平成21年は、日本での地震や火山の活動が比較的静穏な時期でした。ところが、任期の最後になって、1月26日の霧島山新燃岳の噴火、3月11日の東北地方太平洋沖地震の発生という大事件が続きました。これまで日本で経験したことの無い巨大地震です。この地震を迎え打つ研究所の体制は必ずしも十分ではありませんでしたが、もし改組していなかったら研究機能は麻痺していたかもしれないと思っています。とりわけ、技術職員と事務職員が教員とより協力する体制になっていたことが幸いしています。3月31日までは気が抜けません。残した仕事は、次期所長に託します。

退任にあたって

前大気海洋研究所長
西田 睦

この4年間、海洋研究所長（3年間）および大気海洋研究所長（1年間）を務めました。この間、中野キャンパスで半世紀を経た海洋研究所の新たな展開を求めて、柏キャンパスへの移転に力を注ぎました。また、ハードの更新だけではなく、この機会にソフトの更新も行なうことができれば、次の半世紀の展望が大きく開けるであろうと考え、海洋研究所と気候システム研究センターとの統合を通じ、スケールと活力のアップを図りました。幸い、これらの大事業はいずれも成功裏に完了できたかと思えます。これはひとえに総長をはじめとする本部の力強いご支援と、研究所の教職員の熱心な協力・尽力のおかげです。また、これらだけでも私の力に余ったのに、さらなる仕事も回ってきました。国立大学の共同利用・共同研究拠点の全国組織の立ち上げです。これは当研究所事務の絶妙のサポートと、本学内外の研究所長らのご協力のおかげで、無事遂行できました。任期の最後には、岩手県大槌町にある当研究所附属の国際沿岸海洋研究センターが今回の地震・津波により被災しました。これまた本部の的確なご支援と多くの所員やOBの協力により、何とか緊急対応の時期を乗り切ることができたところです。ここから新所長に引き継ぎますが、本部をはじめ学内外の皆さんの、大気海洋研究所と附属国際沿岸海洋研究センターへのご支援を、引き続きよろしくお願い申し上げます。



本部留学生・外国人研究者支援課

「東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会」を開催

3月3日（木）18時から、東天紅上野店において「東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留学生支援団体等と総長との懇談会」が開催された。

この会は、本学の学部を卒業または大学院修士課程・博士課程を修了する予定の外国人留学生、留学生支援団体等の関係者及び総長ほか役員をはじめとする本学教職員が一堂に会して親睦を深めることを目的としており、会には留学生約140名に加え、日頃より留学生をサポートしていただいている支援団体、各国大使館及び行政機関等の関係者、並びに本学教職員の総勢約350名の参加者があった。

会は濱田純一総長の挨拶に引き続き、留学生支援団体の代表として公益財団法人東京海上各務記念財団 常務理事 内田潔氏からご挨拶をいただき、田中明彦国際本部長（理事・副学長）による乾杯のご発声で幕を開けた。



来賓スピーチをいただいた（公財）東京海上各務記念財団常務理事 内田潔氏と奨学生 グェン ルートウイ ガンさん（情報理工学系研究科博士課程修了予定）

しばらくの歓談ののち、東京大学中国留学生学友会及び在日インドネシア留学生協会東京大学支部による歌・舞踊・伝統楽器演奏の披露があった。その後、本年3月に経済学部卒業予定の ラン カイさん、大学院農学生命科学研究科修士課程修了予定の カツ ホウさん、大学院工学系研究科博士課程修了予定の デイン ミン フンさんの3名から、日本での経験や思い出、研究生活や卒業・修了後の抱負などに関するスピーチがあった。

会場では留学生が、総長をはじめ本学役員や研究科長、留学生支援団体等からの出席者とともに記念写真を撮る姿などが見られ、終始和やかな雰囲気にも包まれた。会の終盤近くでは、東京大学運動会応援部と参会者一同による東京大学応援歌「ただ一つ」の合唱、応援部によるエールののち、予定時間の20時、小島憲道国際センター長（理事・副学長）から閉会の挨拶があり、会は盛会のうちに終了した。



歌・舞踊・伝統楽器演奏を行った東京大学中国留学生学友会及び在日インドネシア留学生協会東京大学支部のメンバー



スピーチを行った留学生と濱田総長
（左から）ラン カイさん、デイン ミン フンさん、濱田総長、カツ ホウさん



海洋アライアンス

シンポジウム「我が国における海洋教育及び研究のありかた」開催

3月4日（金）、日本財団ビル（港区赤坂）にて、標記シンポジウムが海洋アライアンスと日本財団の共同で開催された。大学等教育機関、官公庁、企業等、幅広い分野からの参加があり、総参加者数は157名であった。シンポジウムは4部構成で、日英同時通訳付きで行われた。

第1部「東京大学における海洋研究の横串型取り組み」ではまず浦 環 機構長より、2008年より開始された総合海洋基盤（日本財団）プログラムの概要説明、及びシンポジウムの趣旨説明があった。続いて、海洋政策学ユニット長（城山英明教授）、学際海洋学ユニット長（福代康夫教授）より成果報告及びユニット活動の将来展望について紹介があった。最後に分野横断的研究課題「イニシアチブ」の成果として、許淑娟特任講師より「海洋科学調査をめぐる法的諸問題」について発表があった。



シンポジウム会場の様子

第2部「東京大学の大学院における海洋教育の学際的連携」では、東京大学横断型教育プログラムの1つである「海洋学際教育プログラム」について、木村伸吾教授から横断型教育の重要性と成果が概説された。続いて履修生により「海洋問題演習」、「海洋法・海洋政策インターンシップ」について、本教育プログラムに参加することの意義や感想、また、同じく履修生から生物多様性条約締約国会議第10回（COP10）で開催したワークショップやポスター発表を通して得られた体験と意義が語られた。このような教育活動を通じた学生間の異分野交流によって、幅広い専門知識のみならず、自分が思いもよらなかった視点・考え方に触れた経験が、これからのキャリアにおいて貴重な財産となることが期待される。

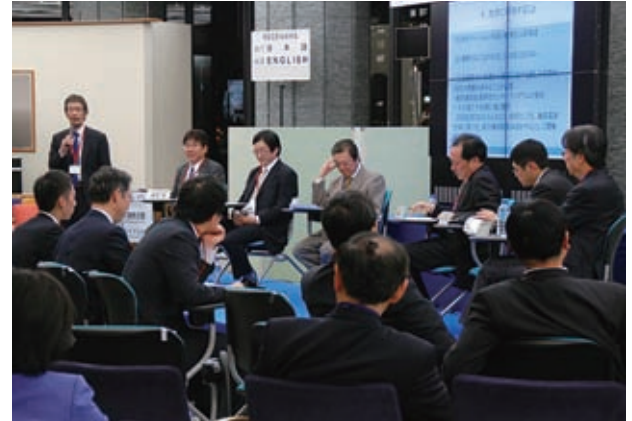
第3部では、海外における海洋に関する学際的な教育・研究について、3名の外国人講演者から紹介があった。まず、中国海洋大学の李巍然教授より、同大学における学部・大学院教育についての紹介があった。海洋関連知識を問うコンテストを開催し、優秀者には北極・南極観測への参加資格が与えられるなどのユニークな取り組みが印象的であった。また山東半島において計画されている海洋経済特区の構築等に貢献できる学際的な人材育成を目指していることが紹介された。

続いてRobert Thompson博士（米国・ロードアイランド大学）は、海洋研究・教育が学際的であることの重要性を、分野別の環境管理から生態系ベースの管理への移行を軸に挙げながら語っていただいた。特に近年急速に利用形態が変化しつつある沿岸環境のspatial planning について紹介された。

また、Porter Hoagland博士（ウッズホール海洋研究所）からは、毎年100名以上の学生が履修するマサチューセッツ工科大学（MIT）とのジョイントプログラム、ウッズホール海洋研究所海洋政策センターにおける有毒藻類ブルームについての分野横断的な研究の取り組み等が紹介された。


「横断型の海洋研究の展開と新たな人材の育成」と題した第4部では、海洋アライアンスの新たな展開について、浦辺徹郎 副機構長より紹介があった。ここで総合海洋基盤（日本財団）プログラムのこれからの計画につ

いて、1) 総合研究集団によるシンクタンク機能の強化、2) 大学院教育の充実と社会需要に合わせた人材育成、そして3) 教育・研究国際ネットワークの強化と、国際組織への拡大等の目標が示された。最後に行われたパネルディスカッションでは、藤井輝夫教授司会の元、官公庁（文部科学省、外務省、国土交通省）、国際機関（FAO）、民間企業（日立製作所、読売新聞東京本社）の関係者7名のパネリストによる討論が行われた。英語によるコミュニケーション能力は重要だが、まずは自らの専門を高めること、そして広い視野を獲得すること、そうした資質を持った人材を社会に送り出してもらいたいというのが、大学へのパネリスト共通のコメントであった。



パネリストによる討論の様子

海洋アライアンスホームページ：
<http://www.oa.u-tokyo.ac.jp/>



本部外部資金課

**国際高等研究所設立記念一般講演会
を開催**

1月に設立した国際高等研究所の発足を記念して、3月9日（水）13時30分から、安田講堂にて、東京大学国際高等研究所設立記念一般講演会「宇宙はどこまでわかったか？」を開催し、一般の方を中心に約900名にお越しいただいた。

国際高等研究所には、世界トップレベルの研究を行う研究機構を置くこととしており、その第一号として数物連携宇宙研究機構（IPMU）を決定したところである。

開会のあいさつでは、濱田純一総長から国際高等研究所の発足の経緯等について説明があり、岡村定矩国際高等研究所長（理学系研究科教授）から国際高等研究所の略称であるTODIASの解説やロゴマークのお披露目があった。さらに、鈴木寛文部科学副大臣の代理として、金森越哉文部科学審議官に来賓あいさつをいただいた。鈴木寛文部科学副大臣は直前までご出席いただける予定であったが、国会対応のため残念ながら欠席となった。村山斉国際高等研究所数物連携宇宙研究機構長による講演「宇宙は何でできているのか？」では、宇宙の96%を

占める暗黒物質・暗黒エネルギーの正体や宇宙と素粒子の関わりなどについて、分かりやすく、時折ジョークを交えながら解説していただいた。質疑応答の時間では活発な議論が交わされた。

David J. Gross博士（2004年ノーベル物理学賞受賞者・カリフォルニア大学サンタバーバラ校カブリ理論物理学研究所長）による講演「THE FRONTIERS OF FUNDAMENTAL PHYSICS-宇宙をひもとく基礎物理学の最前線-」では、物理学の最前線での未解決の難問やその回答への試み、基礎物理学で究極の理論を得ることの意味などについて解説していただいた。予定時間をやや超過し、一部には難しい内容も含まれていたが、同時通訳が用意され、一般の聴講者も熱心に耳を傾けていた。

最後の松本洋一郎理事（副学長）による閉会のあいさつまで会場の熱気が冷めることはなかった。



講演会当日にお披露目されたTODIASのロゴマーク



講演を行う村山機構長



講演を行うGross博士



一般

本部留学生・外国人研究者支援課

東京大学アサツー ディ・ケイ中国
育英基金奨学生 大学院修士課程修了
了報告会

3月10日（木）12時から、山上会館において「東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金奨学生大学院修士課程修了報告会」が開催された。

この報告会は、「東京大学アサツー ディ・ケイ中国育英基金」による奨学生が、平成23年3月に修士課程を修了する予定であることを機に、寄附者である株式会社アサツー ディ・ケイの稲垣正夫代表取締役創業者をお招きし、奨学生および本学関係者から修了の報告とこれまでの支援に対するお礼を述べる機会とし、関係者と懇談を行うことを目的に開催されたものである。

会は、修了が間近である学生へのお祝いと、支援をいただいた株式会社アサツー ディ・ケイに対するお礼を述べる総長の挨拶に始まり、次いで、稲垣代表取締役創業者から奨学生に対して、「東京大学での経験を生かし、大きな視点から日中両国の懸け橋になっていただきたい。」との激励の言葉が贈られた。

奨学生一人ひとりからの修了報告では、二年間の留学生活の思い出や、今後の抱負、また、支援をいただいた株式会社アサツー ディ・ケイに対する感謝の意が述べられた。

昼食をとりながらの懇談は、稲垣代表取締役創業者をはじめADK関係者、総長ほか本学関係者と奨学生との間で和やかに進み、会の終盤では、稲垣代表取締役創業者から奨学生に対して記念品の贈呈があった。その後、小島理事（副学長）から閉会の挨拶があり、報告会は閉会となった。



奨学生へ激励を送るADK稲垣正夫代表取締役創業者



一同揃っての記念撮影

男女共同参画室
「女子の進学促進、女子学生比率向上への提言—多様な学生構成の実現を目指して—」の提出

昨年6月24日に濱田純一総長から村尾美緒男女共同参画室長に対して「女子の進学促進に向けて、審議と提言のお願い」と題する審議依頼があった。これを受けて男女共同参画室では進学促進部会を中心に調査・検討を重ねてきた。男女共同参画室の審議を経てまとめられた「女子の進学促進、女子学生比率向上への提言—多様な学生構成の実現を目指して—」と題した提言が、3月25日(金)総長室において、村尾美緒男女共同参画室長と加藤淳子同室進学促進部会長から濱田純一総長に手渡された。

提言では(1)東京以外の高校生へのはたらきかけ、(2)安心・安全な学生生活の担保、(3)魅力あるキャリア、身近なロール・モデルの提示、(4)文理選択前の中高校生へのはたらきかけの4点が最重要課題として挙げられている。特に女子専用学生宿舎の確保等、地方出身者が安心して上京できる環境づくりや広報活動の充実をはかり、これまで本学を進学対象として検討していなかった層の掘り起こしに重点を置いた内容となっている。今後、この提言を踏まえて着実に女子の進学促進を進めていくこととなる。



濱田総長へ村尾男女共同参画室長から提言の提出

部局
ニュース

大学院総合文化研究科・教養学部
リベラルアーツ集中講義を南京大学で開催

中国の南京大学で集中講義「記憶と記録」が、2月28日(月)から3月25日(金)まで開催された。本学から派遣された8名の講師によるオムニバス講義で、「記憶と記録」をテーマに、文理それぞれの専門領域から興味深い講義が行われた。これは、リベラルアーツ教育の国際発信として、駒場の前期課程の講義をそのまま海外へ送り出そうという試みで、南京大日本語科を対象に、日本語で行われ、40名から50名が参加した。講義の一部は、駒場キャンパスからインターネットを使った遠隔講義として実施し、これもなかなか効果的であった。日本語未履修者も多く聴講するため、日本語科4年生が同時通訳を担当し、みごとな語学力を披露してくれた。

また、集中講義の期間中には、長谷川壽一研究科長や山影進前研究科長など4名の本学教員による講演会も行われ、数百名を超える聴衆を集める会もあった。

この教育交流プログラムの特徴は、講義と並行して学生交流を行うことにある。集中講義に合わせて、本学の学生を派遣し、南京大生と同じ講義を聞き、それをもとに討論を行うというもので、今回は、前期課程の学生を中心に、希望者から19名を選抜した。彼らを3班に分け、一週間ずつ派遣する予定であったが、残念ながら大震災の影響で2班11名を派遣するにとどまった。このような時期に行った交流は、双方の学生に得難い経験となったであろう。

この集中講義は、教養教育高度化機構に所属するリベラルアーツ・プログラム（南京）LAPが、南京大学と連携して実施したが、駒場の教員にとどまらず、各部局からも講師の派遣ではご協力をいただいた。南京大学からも多大な協力を得たが、とくに張栄副学長（国際交流担当）からは、今回の大震災に際して、本学へのお見舞いといかなる支援も惜しまない旨の表明がなされた。深く感謝する次第である。



廣瀬通孝先生の講義を聴く学生達



高橋哲哉先生が駒場から行った遠隔講義



南京大学の学生と討論の輪が広がる

先端科学技術研究センター



アイントホーフェン工科大学の学生が先端研を訪問

2月28日（月）にオランダのアイントホーフェン工科大学（Technische Universiteit Eindhoven）の学生一行が先端科学技術研究センターを訪れた。同25日から始まった約3週間のジャパン・スタディーツアーの一環で、大学の他、企業や研究所などを訪問するという内容で、東京での研修後は京都、大阪へ移動するとのことであった。

あいにく当日は冷たい雨になってしまったが、本格的なツアー開始初日にあたり、2名のスーパーバイザーを含む総勢32名が、男子学生はスーツにネクタイ、女子学生もスーツというフォーマルな装いで9時前に到着した。冒頭、先端科学技術研究センター 中野義昭所長より歓迎の挨拶が述べられた。続いて先端研の概要と、中野所長がプロジェクトリーダーを務めるエネルギー・環境技術国際研究拠点（ソーラークエスト; Solar Quest）プロジェクトに関する説明を行った。



中野所長によるごあいさつ

その後、学生たちが今回の訪問にあたって希望していたバリアフリー関連の研究紹介が行われた。中邑賢龍教授（人間支援工学）と巖淵守准教授（支援情報システム）の研究室で取り組んでいる研究内容がメインで、手書き文字を自動的に電子化するデジタルペンを実際に用いたデモンストレーションは特に関心が高かったようだ。

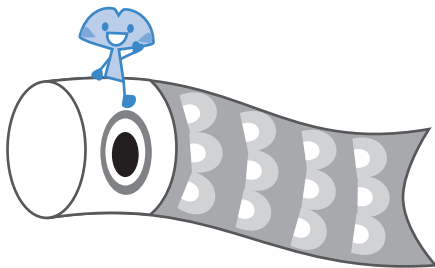
そしておみやげに渡されたのは中邑研究室の神原秀夫特任研究員がデザインしたカドが28個もある消しゴム、「カドケシ」。神原研究員は、活躍中の若手プロダクトデザイナーでもあり、独創的な作品のプレゼントにデザイン大国オランダから訪れた学生たちも興味津々の様子であった。

最後は8人ずつのグループに分かれて、4つの研究室（中野研、岡田研、宮野研、宮山研）を見学し、キャンパス敷地内にあるイタリアンレストランで昼食をとってから次の目的地へと向かった。今後とも、先端研は海外

からの研究者の卵を積極的に受け入れて、交流を図って参りたい。



熱心に話を聞く学生たち



大学院工学系研究科・工学部

部局横断で「科学技術イノベーション政策の科学の構築に向けて」ワークショップを開催

3月1日(火)に工学部2号館にて、「科学技術イノベーション政策の科学の構築に向けて」と題したワークショップを、工学系研究科総合研究機構イノベーション政策研究センターが主催する形で開催した。

本学工学系からは、イノベーション政策研究センターのセンター長である元橋一之教授、丸山剛司非常勤講師、梶川裕矢特任講師が、法学政治学研究科から城山英明教授、経済学研究科から金本良嗣教授、新領域創成科学研究科から松橋隆治教授が講演を行い、部局の垣根を越えて、我が国における科学技術イノベーション政策の科学の在り方を議論した。また学外からも、青島矢一准教授(一橋大学)、楡井誠准教授(一橋大学)、藤末健三客員教授(早稲田大学)、柿田恭良氏(文部科学省)が講演・コメントを務め、産官学から100名を超える参加者が集まり、本領域に対する関心の高さが窺えた。



講演者の話に熱心に耳を傾ける参加者たち

現在、世界各国におけるイノベーション政策の強化と、グローバル化の加速の中で、科学的な知識や手法に基づき、政策を立案、実施、評価することの重要性が増している。米国では、イノベーション政策の強化と併行して、マーバーガー前大統領科学顧問の提唱により、「科学イノベーション政策の科学」が立ち上がり、米国科学財団が、その方法論の開発のための研究助成を行っている。また、我が国においても、同領域において科学的な取り組みを強力に促進することの重要性・必要性が認識され始めている。

我が国の大学においては運営費交付金の継続的な減額など厳しい情勢が続くが、科学技術、イノベーション、人材育成における大学の重要性は今後とも疑いもなく、工学、経済学、法学、公共政策など様々な分野の知を結集し、科学技術イノベーション政策の科学の構築に部局横断的に取り組んでいく必要がある。

低温センター

部局

「低温センター研究交流会及び利用者懇談会」開催報告

3月3日(木)、弥生講堂アネックス・セイホクギャラリーにおいて、「第2回低温センター研究交流会」が開催された。昨年度から始めた「低温センター成果報告会」を、今年度からすべての寒剤ユーザーを対象を広げ、農学、工学、理学にまたがる計16件の発表が行われた。木の香りのする開放的な雰囲気の中で、普段はあまり聞くことのできない異分野の研究内容に触れることができ、大変活発な質疑応答がなされた。また、「技術交流セッション」では技術職員から寒剤供給業務に関する発表も行われ、低温センターと利用者の相互理解を深める有意義な機会ともなった。なお、専門的な研究を異分野の研究者に分かり易く説明する点で優れた発表を行った若手研究者に与えられるベストプレゼンテーション・アワードは、大学院理学研究科化学専攻の所裕子さん(大越研究室特任助教)が授賞された。来年度以降もさらに充実した研究交流会に発展するよう、皆様のご協力をお願いしたい。



研究交流会の様子

研究交流会終了後に「低温センター利用者懇談会」が向ヶ丘ファカルティハウス内のレストラン「アブルボア」で開催された。歴代センター長をはじめ低温センター利用者約40名が参加し、よりリラックスした雰囲気の中で情報交換や親睦を深めることができた。また、席上、ベストプレゼンテーション・アワードの発表と賞状・副賞の授与が行われた。



受賞者の所裕子さんと福山寛センター長

大学院農学生命科学研究科・農学部

平成22年度第3回農学生命科学研究科技術職員研修会開催される

3月3日（木）13時から4日（金）12時まで、附属生態調和農学機構において、本研究科主催による第3回農学生命科学研究科技術職員研修会が開催された。

今回の研修会では、「データ・情報の基盤整備と教育研究への活用」を共通テーマに、全附属施設の代表10名で構成された実行委員会が中心となって企画・運営を行った。

3日の研修内容は、口頭発表6演題、附属技術基盤センターの後藤茂子技術専門員による、退職記念講演「人と機会に恵まれて」のほか、附属生態調和農学機構プログラムとして、施設見学や実習が行われた。4日には共通テーマ12演題、自由テーマ6演題のポスター発表と、

新領域創成科学研究科の斎藤馨教授による特別講演「フィールドのデジタル化による教育研究情報の記録・蓄積・発信」が行われた。

参加者は、本研究科の技術職員56名のほか、理学系・工学系・医学系の技術職員合わせて9名、教員・研究員18名、事務職員4名の合計87名であった。

この研修会を通して、日常行っている業務の質を向上させるとともに、本研究科技術職員の結束力が高まったと確信している。

ご協力いただいた生源寺眞一研究科長をはじめ、すべての教職員に御礼を申し上げます。



研修会参加者

大学院医学系研究科・医学部

「香港大学看護学部教員・学生のAcademic Visit」報告

医学部健康総合科学科では、3月4日（金）に、香港大学看護学部の教員27名、大学院生6名、学部生8名を迎えて、カンファレンスと病院訪問を開催した。学科からは、健康総合学科長、健康科学・看護学専攻長を含む看護系研究室の教員16名と大学院生7名が参加した（総勢64名）。

この企画は、香港大学看護学部のAcademic Visitの一環として、香港大学からの依頼により、二大学間での学術交流や共同研究を将来的に目指すことを意図して開催された。

カンファレンスは、上別府圭子准教授（家族看護学）の挨拶に始まり、北潔健康総合学科長（生物医化学教授）から学科紹介が行われた。続いて、村嶋幸代健康科学・看護学専攻長（地域看護学教授）より学部・大学院での看護学教育と研究について紹介された。次に、香港大学のProf. Sophia Chanより、香港大学看護学部における学部・大学院教育と研究が紹介され、最後に、仲上豪二期講師（老年看護学）より、附属病院との共同研究の一例に関する講演が行われた。

その後、医学部附属病院へ移動し、小見山智恵子看護部長から病院と看護師の体制や業務に関する説明が行われた後、4グループに分かれて、4病棟（脳神経外科、皮膚科・麻酔科・整形外科、整形外科・脊椎外科、眼科・

視覚矯正科)を見学した。見学中は、各病棟の看護師長より説明を受けた。

見学後は、参加者全員で昼食をとりながら、教育・研究、医療制度や看護実践について活発な意見交換が行われた。その後、本学の看護系研究室(基礎看護学、家族看護学、地域看護学、精神看護学、母性看護学・助産学、成人/緩和ケア看護学、老年/創傷看護学)の紹介が行われ、二大学間の交換留学や共同研究について討議された。

閉会では、真田弘美教授(老年看護学)から全体のサマリーを含めた挨拶があった。

香港大学では、6月にHong Kong International Nursing Forumが開催される。今回のAcademic visitをきっかけに、交流を継続し発展させていく予定である。



集合写真



カンファレンスの様子

平成23年度 学内広報 発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日 (校了)	配布
1413	5月 27日(金)	6月 22日(水)	6月 28日(火)
1414	6月 29日(水)	7月 25日(月)	7月 29日(金)
1415	7月 28日(木)	8月 25日(木)	8月 31日(水)
1416	8月 30日(火)	9月 26日(月)	9月 30日(金)
1417	9月 29日(木)	10月25日(火)	10月31日(月)
1418	10月28日(金)	11月24日(木)	11月30日(水)
1419	学生生活実態調査号		
1420	11月24日(木)	12月16日(金)	12月22日(木)
1421	1月 5日(木)	1月 25日(水)	1月 31日(火)
1422	1月 31日(火)	2月 23日(木)	2月 29日(水)
1423	2月 29日(水)	3月 26日(月)	3月 30日(金)

都合により変更になる可能性がありますので最新のスケジュールは下記URLよりご確認ください。

学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html

【東京大学ホームページ】→【左下の学内広報アイコンをクリック】

問い合わせ先・原稿提出先

本部広報課 広報企画チーム

TEL: 03-3811-3393 内線 82032

E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp





平成23年度本学入学者選抜の第2次学力試験（前期日程）の合格者3,009人の受験番号及び第2次学力試験（後期日程）の第1段階選抜合格者の大学入試センター試験試験場コード・受験番号が3月10日(木)12時30分頃、本郷構内で掲示により発表された。

また、併せて、合格者の科別成績（最高点・最低点・平均点）も発表された。
なお、各科別の合格者数等は次のとおりである。

平成23年度第2次学力試験（前期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	合格者科別成績		
						最高点	最低点	平均点
文科一類	401	1,557	1,206	1,199	401	453.0111	353.4111	377.7506
文科二類	353	1,194	1,066	1,064	353	432.1111	345.4333	365.1526
文科三類	469	1,478	1,407	1,404	479	425.4778	346.9444	365.8396
理科一類	1,108	2,930	2,772	2,766	1,128	452.6778	325.3000	353.6993
理科二類	532	2,055	1,865	1,854	548	454.0667	326.3889	352.6262
理科三類	100	565	401	392	100	496.9444	392.8333	417.3052
合 計	2,963	9,779	8,717	8,679	3,009			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成23年度第2次学力試験（後期日程）第1段階選抜合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	倍率	第1段階選抜				合格者成績		
				合格者数	不合格者数			最高点	最低点	平均点
					本学前期日程合格による者	左記以外の者	計			
全科類 (理科三類を除く)	100	2,967	29.7	510	1,544	913	2,457	774	716	730.55
合 計	100	2,967	29.7	510	1,544	913	2,457			

本部入試課
キャンパス
第2次学力試験（後期日程）、外国学校卒業学生特別選考の合格者発表

平成23年度本学入学者選抜の第2次学力試験（後期日程）の合格者102人及び外国学校卒業学生特別選考合格者第1種（外国人であって日本国の永住許可を得ていない者）の合格者13人、第2種（日本人及び第1種以外の外国人）の合格者24人は次のとおりである。

平成23年度第2次学力試験（後期日程）募集人員・合格者数等

科 類	募集人員	志願者数	第1段階選抜合格者数	受験者数	合格者数	合格者成績		
						最高点	最低点	平均点
全科類 (理科三類除く)	100	2,967	510	449	102	208	154	168.14
合 計	100	2,967	510	449	102			

(注) 外国学校卒業学生特別選考を除く。

平成23年度外国学校卒業学生特別選考志願者数・合格者数等

科 類	区分		志願者数	第1次選考合格者数	第2次選考受験者数	第2次選考合格者数
	種別					
文科一類	第1種		2	0	0	0
	第2種		22	16	13	7
文科二類	第1種		42	11	10	5
	第2種		30	16	12	7
文科三類	第1種		12	4	4	1
	第2種		23	12	11	3
理科一類	第1種		46	12	11	4
	第2種		31	12	11	4
理科二類	第1種		11	5	5	3
	第2種		17	10	10	3
理科三類	第1種		5	1	0	0
	第2種		3	1	1	0
合 計	第1種		118	33	30	13
	第2種		126	67	58	24

なお、過去3年間の入学志願者数及び合格者数の推移、高校卒業年別の合格比率、出身校所在地別合格者数及び比率は次のとおりである。

入学志願者数及び合格者数の推移

	平成 2 3 年度						平成 2 2 年度						平成 2 1 年度					
	志 願 者			合 格 者			志 願 者			合 格 者			志 願 者			合 格 者		
	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
文科一類	1,557		1,557	401		401	1,265		1,265	401		401	1,643		1,643	401		401
文科二類	1,194		1,194	353		353	1,142		1,142	353		353	1,205		1,205	353		353
文科三類	1,478		1,478	479		479	1,529		1,529	479		479	1,501		1,501	479		479
理科一類	2,930		2,930	1,128		1,128	3,037		3,037	1,129		1,129	2,893		2,893	1,129		1,129
理科二類	2,055		2,055	548		548	1,963		1,963	547		547	2,094		2,094	547		547
理科三類	565		565	100		100	503		503	100		100	541		541	98		98
全科類		2,967	2,967		102	102		3,137	3,137		100	100		3,166	3,166		100	100
合 計	9,779	2,967	12,746	3,009	102	3,111	9,439	3,137	12,576	3,009	100	3,109	9,877	3,166	13,043	3,007	100	3,107

(注) 後期日程(追試験)を含み、外国学校卒業学生特別選考を除く。

高校卒業年別の合格比率

科 類	区 分	平成 2 3 年度			平成 2 2 年度			平成 2 1 年度		
		前期	後期	計	前期	後期	計	前期	後期	計
文科一類	現 役	65.1			64.3			65.3		
	1 浪	31.7			33.4			31.2		
	2 浪	1.7			1.5			3.0		
	3浪以上等	1.5			0.8			0.5		
文科二類	現 役	54.7			58.9			61.5		
	1 浪	42.8			39.7			36.8		
	2 浪	2.0			1.1			1.7		
	3浪以上等	0.5			0.3			0.0		
文科三類	現 役	61.4			58.7			63.0		
	1 浪	35.3			36.7			33.4		
	2 浪	1.5			3.5			1.5		
	3浪以上等	1.8			1.1			2.1		
理科一類	現 役	68.9			71.6			69.8		
	1 浪	29.3			25.7			27.5		
	2 浪	1.3			1.8			1.4		
	3浪以上等	0.5			0.9			1.3		
理科二類	現 役	59.3			58.7			59.8		
	1 浪	35.8			34.7			36.4		
	2 浪	2.5			4.2			2.7		
	3浪以上等	2.4			2.4			1.1		
理科三類	現 役	67.0			72.0			66.3		
	1 浪	22.0			16.0			23.5		
	2 浪	2.0			5.0			3.1		
	3浪以上等	9.0			7.0			7.1		
全科類	現 役		77.4			70.0			70.0	
	1 浪		19.6			22.0			28.0	
	2 浪		1.0			3.0			1.0	
	3浪以上等		2.0			5.0			1.0	
合 計	現 役	63.7	77.4	64.2	64.7	70.0	64.9	65.2	70.0	65.4
	1 浪	33.1	19.6	32.7	31.4	22.0	31.1	31.5	28.0	31.4
	2 浪	1.7	1.0	1.7	2.5	3.0	2.5	2.0	1.0	1.9
	3浪以上等	1.5	2.0	1.4	1.4	5.0	1.5	1.3	1.0	1.3

(注) 後期日程(追試験)を含み、外国学校卒業学生特別選考を除く。

出身校所在地別合格者数及び比率

	平成 2 3 年度						平成 2 2 年度						平成 2 1 年度					
	前期		後期		計		前期		後期		計		前期		後期		計	
	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率	合格者数	比率
東 京	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
北 海 道	48	1.6	4	3.9	52	1.7	52	1.7	1	1.0	53	1.7	63	2.1	2	2.0	65	2.1
東 北	78	2.6	3	2.9	81	2.6	94	3.1	5	5.0	99	3.2	91	3.0	5	5.0	96	3.1
関 東 東京を除く	553	18.4	16	15.7	569	18.3	561	18.6	7	7.0	568	18.3	545	18.1	22	22.0	567	18.2
北 陸	106	3.5	3	2.9	109	3.5	114	3.8	5	5.0	119	3.8	114	3.8			114	3.7
中 部	288	9.6	3	2.9	291	9.3	331	11.0	12	12.0	343	11.0	320	10.6	7	7.0	327	10.5
近 畿	431	14.3	16	15.7	447	14.4	400	13.3	18	18.0	418	13.4	442	14.7	9	9.0	451	14.5
中 国	158	5.3	4	3.9	162	5.2	168	5.6	3	3.0	171	5.5	156	5.2	4	4.0	160	5.1
四 国	76	2.5	4	3.9	80	2.6	73	2.4	3	3.0	76	2.4	106	3.5	1	1.0	107	3.4
九 州 沖縄を含む	251	8.3	10	9.8	261	8.4	237	7.9	7	7.0	244	7.9	296	9.9	10	10.0	306	9.9
検 定 そ の 他	7	0.2	0	0.0	7	0.2	8	0.3			8	0.3	12	0.4			12	0.4
合 計	3,009	100.0	102	100.0	3,111	100.0	3,009	100.0	100	100.0	3,109	100.0	3,007	100.0	100	100.0	3,107	100.0

(注) 後期日程(追試験)を含み、外国学校卒業学生特別選考を除く。



～総長通信～

President's Improvisation Vol.4

このコーナーでは、日々の活動の中で、総長が考えておられることを皆さんにお知らせしていきます

今、被災地の復興と日本の活力の再生を期して

濱田純一

去る3月11日に発生した東日本大震災は、福島原子力発電所事故ともあいまって、私たちに大きなショックを与えました。この震災で亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈りするとともに、被災なさった皆さま、いまなお不自由な避難生活を送っておられる皆さまに、心よりお見舞いを申しあげたいと思います。この惨禍からの復興には長い年月がかかるでしょうし、それは、日本全体の社会、経済の再活性化への努力と重なっていくものと思います。東京大学も、教育研究面から明日の日本を支える中核的な組織として、その社会的責任を最大限に果たしていかなければならないと考えています。3月11日の大地震の折は、各キャンパスでも建物の揺れがひどく、大きな不安を感じた方も多かったと思います。さらに、その後の交通事情による帰宅困難の問題も生じましたが、各部局、本部の皆さんには、冷静にまた的確に対応をいただいたことに感謝しています。これからまだ、余震や放射線の影響への警戒が必要ですので、それぞれの持ち場においては、3月11日の教訓を生かして、引き続き災害対応のための態勢強化を図っていただきたいと思います。学内的な対応と同時に、被災地への支援も始まりました。被災地、被災大学には数次にわたって救援物資の搬送が行われ、附属病院の緊急医療チームもただちに現地入りしました。また、ボランティアとして活動を始めている皆さんも

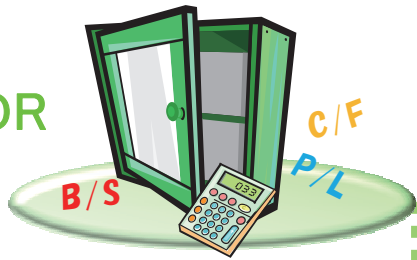
います。東京大学では、大震災の発生からちょうど1月目にあたる4月11日に「東日本大震災に関する救援・復興支援室」をスタートさせ、被災地、被災者の皆さんへの継続的で体系的な支援の拠点を整えました。すでに、学内では、さらなるボランティア活動の動きにくわえて、復興のための町づくり、産業の再生など、さまざまな提案が出されて、具体的な活動が始まっています。救援・復興支援室は、こうした自発的な動きを大学としてまとめていく、窓口としての役割も果たします。このような震災対応の一連の動きを素早くすすめるとともに、東京大学として本来なすべき教育研究活動は、着実に行っていくことが重要であると考えています。この大震災からの復興や、それと重なるであろう日本の活力の再生には、相当の時間を要するでしょうから、その復興や再生の底力として、学術研究の高い水準を確保しすぐれたタフな人材を育成していくことは、何よりもいま求められていることです。その意味で、東京大学の明日の基盤を作る『行動シナリオ』の内容を確実に実現するために、引き続き全力を挙げたいと思います。教職員、あるいは学生の皆さんには、東京大学に期待されているこのような役割を理解し、被災者の皆さんへの救援活動や被災地の復興支援を息長く続けるとともに、こうした時期であるからこそ、より高い水準の教育研究を目指して奮闘いただければと願っています。



濱田総長は4月7日(木)～8日(金)の日程で「救援物資搬送と今後の復興支援のための大槌町訪問」を行った。7日には、岩手大学などを、8日には、本学大気海洋研究所附属沿岸海洋研究センター、大槌町、釜石市、遠野市などを訪問した。

決算のDOOR

～数字が語る
東京大学



第7回 どちらがもったいない？

新年度を迎え、いよいよ決算作業も本番です。と同時に確定申告に向け、消費税の計算が始まりました。

「東京大学が納税者？」「消費税ならいつも払っているよ。」確かに100円の鉛筆は、5円上乗せした105円を支払います。そもそも消費税は、事業者が消費者から一旦預かり納める間接税。この5円もお店の納税額です。法人化と同時に一事業者となった東京大学も例外ではなく、受託研究収入や著作権収入など見返りのある収入が課税対象となります。ちなみに昨年度の納税額はおよそ4億3千万円。運営費交付金や寄附金など対価性のない収入が対象外となる中で、かなりの金額です。そしてこの消費税は国税局の調査対象にもなるのです。さてさて、ここで問題。

A学部のB教授は4月に文科省から受託研究プロジェクトで300万円を頂戴しました。研究終了間近の3月某日、50万円の使い残しが発覚。予定していたアメリカでのワークショップが中止になり、旅費がまるまる浮いたからです。事務から言い渡された伝票の提出期限はあと1週間。また、制度上翌年度に繰り越すことはできません。「う、う～ん、勿体ない…」しばし頭を抱えたB教授、「よし！」と勢いよく立ち上がり…。さあみなさん、国税局が「NO!!」とダメ出しするB教授の行為は次のうちどれでしょう？

- ① 大学生協に駆け込み、当面は不要だけれどいつか必要になるかもしれない備品やら消耗品やら買い込む。
(結果、大量の文房具で研究室があふれる)
- ② 来年度購入予定の実験機器を注文。納期は4月になるが、3月31日付の納品書と請求書を事務に提出する。
- ③ とりあえず懇意の業者に全額預かってもらい、消耗品の購入伝票だけ受け取る。使い道は4月以降ゆっくり考える。
- ④ 涙を吞んで、返還手続きをする。

答えは②と③。消費税は受け取った消費税から支払った消費税を差引いて納税します(仕入税額控除)。ただし、仕入日に対象期間内(事業年度)で、かつ証明できること(帳簿、納品書など)が条件。よって、②は実際の納品日が翌年度であること(期ずれ)、③は実態のない虚偽の納品書があること(預け金)から仕入税額控除と認められず、修正申告を言い



渡され差額以外に延滞税、過少申告税が請求されます。しかも一旦不正行為と見なされた場合は、重加算税(追加納付額の35%)というきつ～いダメ出しが…。

「勿体ない」と思ってしまったことが、さらに「勿体ない」結果を招いてしまう…普段何気なく支払っている消費税、実はとっても大切に侮れない存在なのですね。(青)

毎年6月末が納付期限 ※①は消費税的にはOKですが、受託研究のルール電子申告です 上してはいけません。④が「最善の行為」。

このコラムへのご意見、ご質問をどしどしお寄せ下さい。お待ちしております！

本部財務部決算課 (内線22126)

E-mail: kessanka@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

「魚食文化と鵜飼い」

アジアの隣人を知る12枚の写真
(中国編: その1)

淡水魚は、中華料理に欠かせない。

ソウギョやナマズ、フナ、コイなどは唐揚げや蒸し魚、煮魚となって食卓を賑わす。国土が日本の約25倍もある中国では、淡水魚を食べる文化が非常に発達している。

この魚食文化は、鵜飼い漁も下支えしている。中国では、今でもカワウを使った漁が各地で行われている。カワウは、潜水中に、その場でもっとも獲りやすい魚を獲る。そのため、鵜飼い漁では、一日の漁で獲れる魚が多様である。ただ、多くの淡水魚に商品価値があるため、獲られた魚は市場で瞬く間に売れる。

一方、日本のびわ湖。およそ55種類の淡水魚が生息しているが、商品価値のある魚は10種程度である。仮にびわ湖で鵜飼い漁を行っても魚の買い手が確保できず、生業として成り立たないであろう。

写真は、都市の河川で鵜飼い漁を行なう漁師。都市住民が増えたことでコイなどの需要が増え、鵜飼い漁が続けられる。中国の鵜飼い漁は、魚食文化を背景に、まだしばらくの間、見ることができる。



文・写真: 卯田宗平
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
(ASNET)

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET)は、研究者や学生が分野を超えて繋がり、アジアに関係する教育や研究の新たな可能性を探るために設立された機構です。

アジアのことを広く、深く知りたい学生の皆さんに研究科等横断型「日本・アジア学」教育プログラムも実施しています。

詳しくは下記のURL:

<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>



第6期 アントレプレナー道場 北京大学と学生交流

<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/kigyou/index.html>

東京大学 アントレプレナー道場

Produced by 産学連携本部 事業化推進部
<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/annai/kigyokasuisin.html>

「東京大学アントレプレナー道場」(以下、アントレ道場)のプログラムの一環で、ビジネスプランの最終発表審査会の本学選抜チームと、北京大学との学生交流イベントがこのほど行われました。2005年からスタートした、このアントレ道場。例年4月にスタートし、10月に行われる学生チームのビジネスプランコンテストで終了する6か月間のプログラムです。2008年からは、自らの事業化の提案を国際的な視点から捉え、ビジネスプランのレベルアップを図ろうと、中国・北京大学との交流も始まりました。今回は、このアントレ道場の活動についてご紹介いたします。



北京大学のみなさんと一緒に記念撮影。歓迎式典は和やかに行われました

歓迎式典

北京大学からは今回、同大学ビジネスプランコンテスト(共青团北京大学委員会主催)で優勝した上位3チームの6名と教員4名が来訪しました。今年は3年目の相互訪問となります。

来訪団歓迎式典の中で、来訪団団長の北京大学校務委員会副主任、马化祥氏からは「お互いに訪問し、交流を活発にすることで、良い関係が築けている。今後とも友好的な関係を続けていきたい」と挨拶がありました。

続いて、記念品の交換、記念撮影と、終始、和やかな雰囲気の中で式典が行われました。

事業化へ向けたビジネスプラン発表

この交流の中でメインイベントともいえるのが、両大学の学生によるビジネスプランのプレゼンテーション、そしてディスカッションです。2010年11月には本学から上位入賞チーム3チームが北京大学へ訪問し、プレゼンテーションを行

いました。今回は北京大学の3チームと、本学からは11月には訪中しなかった2チームが、事業化へ向けたビジネスプランを発表しました。

起業支援にメディアも関心

学生起業家に対する関心、そしてここ数年における新卒学生の就職難という事情も重なり、本学における学生への起業支援の取材で、民放テレビ局の報道スタッフが来訪しました。TVカメラを向けられる中、自らのビジネスプランを国際的な視点から英語で発表。両大学の学生間で質疑応答が交わされました。

また、コメンテーターとして、産学連携本部事業化推進部長の各務教授や、(株)東京大学エッジキャピタルの郷治友孝代表取締役社長からも、的確なアド

バイスが両大学の学生に与えられ、ビジネスプラン作成スキルブラッシュアップが図られました。

巣立つ道場生から

参加した道場生からは、「アントレ道場で学んだことが大変役立ち、自分の成長を感じることができました。北京大学の学生からのアドバイスも参考に、中国でのビジネスチャンスも探したい」「彼らの質疑応答の的確さ、英語力のレベルの高さに感心しました」といった感想が聞かれ、北京大学の学生に感化され、今回の交流が大変有意義なものとなった様子が窺えました。

「将来は日本を代表する起業家として、世界で戦いたい」といった、ポジティブな声も寄せられるなど、道場生の成長ぶりが大いに感じられました。



東京大学

- 1 アパレルECでコーディネート
- 2 屋内トレーニング支援アプリケーション

北京大学

- 1 医療分野でのITによるシステム化&効率化
- 2 ITを使用した健康維持・管理・測定
- 3 燃費などを考慮した自動車の衝撃吸収装置



いかに短時間でビジネスプランの内容を理解してもらえるかがポイント。英語できちんとコミュニケーションをとります



取材されるのは関心の高さの表れ

「大学における起業家精神とイノベーション」

事業化推進部長 各務 茂夫教授

現在世界中で「イノベーション」の重要性が叫ばれています。その中で大学の役割は極めて大きい。大学の研究成果や学生のアイデアが、世界を変えるようなイノベーションの実現に繋がるとは、GoogleやFacebookの例を持ち出すまでもないでしょう。そのイノベーション創出に寄与できる東大のポテンシャルが大きいことは、年間に東大から生まれる発明届け出数が、MITや

スタンフォード大学を上回っていることから明らかです。シュンペーターの「経済発展理論」を持ち出すまでもなく、我が国の閉塞感を打破するのは、資本主義の駆動力ともいべき創造的破壊とそれに果敢に挑む起業家(アントレプレナー)であり、その意味において、我が国にとっての最大の課題は、起業家精神とベンチャー企業を創出する起業文化の醸成にあるのではないのでしょうか。「社会が変わる、ベンチャーで変わる」という、東大が変える!



Get More Info

「東京大学アントレプレナー道場」は、学生時代から事業を考える起業家(アントレプレナー)の育成を目的に作られたプログラムです。たとえば、自分の研究成果である「知的財産」をビジネスに結び付けられるのか、または自分のアイデアをもとに起業ができるのかなど、勉強会を通して分かりやすく「伝授」し、学生を鍛えます。もちろん、知的財産や起業に関する専門家などをメンターに迎え、潜在的な可能性を引き出す応援など、バックアップ体制も万全です。続きはWebで。→ → → <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/dojo/dojo.html>
7期の募集が始まっています。お申込はコチラから! → → → <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

連絡先: 産学連携本部 (本部産学連携課)
電話: 内線22857 (外線03-5841-2857)
WEBサイト: <http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

DUCR 検索



東日本大震災・復興への提言

被災された皆様へ、心よりお見舞い申し上げます。亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災地の皆様の生活が、一刻も早く平穏に復することを祈りいたしております。

ゼロベースの発想に転換を

森田 朗

制度や社会の仕組みは幅をもって社会のさまざまな状態に対応できるように作られているが、今回の災害は、それらが想定していた以上の規



模であり、既存の制度では対応できない状態に陥っている。今はまだ被災者の救済と社会機能の回復の段階にあるが、それが一応完了すると次に復興の段階に進むことになる。その時に備えて早急に、復興プランの検討に着手すべきである。

その場合、既存の制度を前提とし、その枠内での復興を考えることは生産的ではない。必要なことは、ゼロベースでこの国のあり方を考え、新たな発想に基づいて、大胆な改革に取り組むことである。

わが国は、これまでも少子高齢化と人口減少、そして財政難に陥っていた。それらの課題への対処に苦慮していたとき、それに加えて今回の災害に遭遇した。極めて厳しい状況であるが、次の世代のためにも、復興しなければならない。

わが国が採用すべき政策の方向は、一言でいえば「コンパクト化」あるいは「ダウンサイジング」である。

これまでの人口規模や財政規模に合わせて作られてきた社会インフラ等は、人口減少によって過剰になる。過剰部分をカットし、あるいはそれらを放棄し、集約化することによって、質を落とすことなく、資源利用の効率化を進めることをめざすべきである。

いかなる分野においても、質を高めつつ、集約化する方向で政策を立案することが肝要である。そのためにまず必要なのは発想の転換であり、これまでのような右肩上がりの発展拡大型の発想を捨てることである。

コンパクト化、ダウンサイジングの発想を貫くためには、既得権益と戦い、関係者に

配分資源の削減を納得させることが重要であり、それこそ政治的リーダーシップが果たさなくてはならない最大の任務である。

明確な政策の優先順位に従って、劣位の政策を断ち切る決断こそ政治の責務であるが、それをスムーズに行うには、政策の必要性、優先性を、客観的なエビデンスに基づいて示すことが必要である。まさに「政策のための科学」に依拠したエビデンス・ベースド・ポリシーメイキングが重要となる。科学的知見に基づいた政策論争を通して、適切な政策選択が行われることを期待したい。

20年先を見据えた社会を

坂田 一郎

今回の大震災と大津波は、人知をはるかに超えたものであり、それらによる被害の爪痕の映像をみるにつけ、大きなショックを隠しきれない。



被災地支援に関して特に、発達著しいウェブ・ソーシャルメディアを利用した民による自律的な活動が目立っている。政府のトップダウンと民のボトムアップとの連携関係の構築により、効果的な生活支援や復旧等に向



けて、これらを活かしていくことも重要な課題と考えられる。

一方で、被災され、大変な苦勞をされている方々の生活や企業の事業の早期再建を考えると、復旧・復興に向けた準備を急ぎ始めておく必要があるだろう。甚大な被害を受けた地区については、現状回復が中心となった阪神淡路大震災とは、異なる対応が必要となると考えられる。被災地からの移転も想定し、地区指定型の措置ではなく、被災した方々や企業が生活や事業を再建する場合は、その場所がどこであっても支援をするという姿勢が求められる。また、被災地の多くの市町村では高齢化率が25%を超えているが、復興後、30%を超える地域が相当数出てくることが想定される。高齢化率30%は、全国平均の予測でみると、2030年頃の我が国社会の姿である。少なくとも20年先取りしたビジョンを描き、都市や住宅の構造、モビリティ、社会とのつながり、医療等について、大胆なアイデアや新技術を取り入れた上で街の新生を図らなければ、持続可能な街とはならないだろう。

上記2つの提言全文はHPをご覧ください。

震災発生時に必要な医療・介護ポータルサイト

秋山 昌範

大規模災害が起こったとき、これまで政府は、各省、各局、各課がそれぞれ独立して、さまざまな通知を大量に発出することによって対応してきた。今回の大震災においても、政府各部署は相互に十分な調整のないまま、おのおのの権限に基づいて膨大な量の通知を出している。これに対して、被災地をはじめ各地の現場において、さまざまな疑義照会が頻繁に発生するという事態が起こっており、各省庁の担当部署が、それに対する解釈や通知などをさらに出し続けている。しかしこのようにして出される通知の

数々は、決して体系的に出されているわけではない為、全体の整合性が失われてしまっている。このように断片的な情報のかたまりから、必要な情報を探し出すことは非常に困難である。

政府は、国民が必要な情報に簡単かつ短時間にアクセスできるように、震災に関連する各種情報を網羅的に整理統合した上で提供できるような体制を整える必要がある。そのための手段の1つとして、災害に関連するさまざまな情報を有機的に集約した「災害ポータルサイト」を政府が開設して、広く国民一般に公開することが有用と考えられる。当センターでは現在、災害医療に関して出されている省庁・各局からの通知をまとめ、下記URLにて公開している。

http://pari.u-tokyo.ac.jp/earthquake/plan_healthcare.html

<http://pari.u-tokyo.ac.jp>



時代遅れの教授の線り言

石浦 章一

総合文化研究科 教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター養成部門

どうしてか知らないが公的機関からアンケートが来ることがある。ほっておくと2週間おきに催促が来る場合もある。普通は捨ててしまいが、たまに間違えてクリックすると、パスワードでログインしろという。例によって、そんなメールは見ずに捨て受信拒否リストに加えるが、最近はこのようなものが多くなった。企業や大学の事務からもパスワード付きのメールが届くことがあるが、皆、パスワードが保存されているなどと思っているのだろうか。パスワードを入れるなど、実に失礼な話だ。私はそんなものは捨てるので、採点の時も科研費申請のときも毎回、当該部署に聞いている。実に無駄なくみである。しかし、無駄なことをしているのは私の方かもしれないと思うことがある。そう言えば、一度も使ったことのないものもまわりにいっぱいある。携帯メール、東大ポータル、図書館、捨てた職員物品購入カード。不要なもの、教員の試験監督、責任逃れのための行動規範、目安箱、無駄な会議、ヒヤリハット、個人情報。

最近気になっていることだが、博士論文審査をしていて、論文を下手な英語で書いてくる時代遅れがいるが、本当に困ったものである。30年前は、ドクターは英語で、ということが必要だったかもしれないが、私の分野では英語で投稿論文を書くのが当たり前なので、博士論文くらいは日本語で書いてほしいと思う。この間も驚いたが、ある理系の教員が「今どき、博士論文を日本語で書く者がいるのか」と言ったのには、ひっくり返った。その教員の分野では日本語で論文を書くのが普通で、英語の論文を書く人はきっと珍しく、称賛されるのだろう。でも私は、日本語も書けなくて博士を出る人がいること自体が問題ではないか、と思う。私は今年、半月で博士論文を7つ、修士論文を6つ読んだが、これはこれで結構大変な仕事である。今年はこれですが、最高1年で14の博士論文を審査した年がある。現実に英語の長文を読むのは大変だ。そして個人的に1枚の感想文(査読結果)をつけてあげるようにしているのだが、これも結構大変なのである。

このようなことは、もう今はないと思うが、あるとき、投稿論文を2つつなげて博士論文を書いてきた人がいた(昔は論文を2つ持っていた人が結構いたが、今の博士には少なくなった。そのため、投稿論文と博士論文がほぼイコールのようなものではないかと推測している)。私が驚いて、二重投稿になるのではないかと尋ねたら、老齢の指導教員は「面倒でしょう、新しく書くのは」と言って、そのままになったことがあった。遠い昔の話だ。投稿論文と全く違う博士論文を、また英語で書くのは大変だろうから、好意で「日本語で書いたら」と言ってあげているのに、なかなかその意図がわかってもらえない日々が続いている。

★科学技術インタープリター養成プログラム

<http://science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp/>



第18回 最後のリユース

一昔前は個人でパソコンを購入するのに、スペックの比較検討を自己満足するまで行い、家電量販店に何度も足を運び、そして何よりも自分の懐具合を確認し、一大決心を経て購入に踏み切った「宝物」でしたが、昨今の価格破壊により手軽に手に入れる事ができ、一家に一台から一人に一台の時代になりつつあります。

パソコンの価格破壊はノートPCリユース事業にも何かしらの影響を及ぼしている事は間違いありません。中古パソコンを再生するにはハードディスクの交換、リカバリー等をして、できるだけ新品と遜色ない状態で学生の手に渡るわけですが、それには当然再生費用が発生します。もちろん新品を購入するより高い金額で再生をするわけにはいきませんので、市場価格を念頭に置きながら再生価格を決定しています。また、市場価格が下がれば、中古品を借りるよりも新品を購入して自分の所持品としたい学生が増える事になるでしょう。

このまま、パソコンの価格破壊が進めば、経済的な問題は抜きにして、もう誰でもパソコンを手にするできるようになり、リユース事業は終焉を迎える事になるかもしれませんが、学生一人一人にパソコンが行き渡れば、それはそれで万々歳な事だと思います。そんな日が来るまで、我々はパソコンを学生に手渡し、パソコンを借りたい学生がいなくなるまで、この事業を推進し、何年、何十年後に別の事業に発展できれば、この事業を立ち上げ、学生支援をしてきた意味があるのではないのでしょうか。

でも、壊れても壊れても立ちあがった傷だらけのパソコンも、人間味があつていいものですよ。(小)

★3月各部局ご提供PC★

工学部 12台 理学部 1台
教養学部 1台 薬学部 1台

以上15台のノートPCは6回目の募集時に利用させていただきます。どうもありがとうございました。

引き続きご協力お願いいたします。

- 問い合わせ先: ノートPCリユースオフィス
(本部資産管理部資産課内)
E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp
URL: http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/
内線: 22135(担当 小川・高橋・戸田)
- ノートPC回収先: 美津野商事株式会社システム事業部
E-mail: reuse@mizuno.net (担当 川崎・石井)
電話: 03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180

ワタシのおシゴト / 第62回

Rings around the UT

法学部会計係

阿部 慧子さん

法学部でのおシゴト



事務室にて 天井は高く広々としています

去年の7月に人事部から法学部へ配属になりました。主な業務は法学部及び公共政策大学院、政策ビジョン研究センターの外部資金の執行と、給与支払処理、共済関係の手続きです。執行では未払金伝票を起票したり、給与では社会保険料・雇用保険料の支給月ごとのデータ作成や振替手続きをしたりと、毎月の仕事をこなしながら、採用・退職手続き、年末調整、会計報告などの季節の仕事を行っています。初めての部局だったので、先生方やTA・RAの学生のみなさんとも交流があるのが新鮮でした。以前の部署とは違う業務に、みなさんに教えてもらいながらの毎日なので、少しでも早く仕事を覚えていきたいです。

現在法学部では、3号館を改修中です。完成するのは来年の3月予定と先なのですが、完成が楽しみです。



法学部会計軍団(2011春)

得意ワザ：道を訊かれる

自分の性格：まったり

次回執筆者のご指名：野村史薫さん

次回執筆者との関係：同期、研修グループが一緒でした

次回執筆者の紹介：末っ子だけどしっかりもののお姉さん

コミュニケーションセンターだより No.175

■イベントのお知らせ★

●5月28日(土)、29日(日) **五月祭**
通常通り営業します！！

もうすっかり春ですね。皆様いかがお過ごしでしょうか。コミュニケーションセンターでは新スタッフも入り、賑やかに頑張っております！！

5月28日(土)、29日(日)に行われる五月祭では、例年通りコミュニケーションセンター前に出店し、皆様に東京大学を紹介していきます！

例年、大変混雑する大イベントです。人気のアミノ酸サプリメント、御酒、蓮香など研究成果商品を通し、広く一般の方から学内の方まで楽しんでいただけるよう頑張ります！

盛り上げて参りますので、ぜひUTCCに立ち寄り、学生スタッフの頑張る姿を見にいらして下さい！！

■営業時間のお知らせ★

3月22日より短縮営業(11:00~16:00)とさせて
いただいていたのですが、4月11日より通常通り

10:00~18:00で営業しています。

ご協力ありがとうございました。今後とも宜しくお願い致します！！

■スタッフお薦め商品★



学際情報学府
社会情報学コース
博士課程1年
山口 絢

こんにちは！

UTCCスタッフの山口です。

私のオススメ商品は「蓮香オードパルファム」です。

「蓮香オードパルファム」は、東京大学の賀博士が発芽に成功した2000年前の古代蓮の香りを再現したものです。時間がたつごとに変化していくさわやかな香りが魅力的な商品です。

淡いピンクの容器も美しく、「蓮香あぶらとり紙」とあわせて贈り物に最適です。

私も調査協力のお礼に女性の方にプレゼントしたところ、さわやかで上品な香りをとても喜んで下さいました。

ぜひ、コミュニケーションセンターでお手に取ってお試し下さい！



蓮香オードパルファム ¥2,100(税込み)
蓮香あぶらとり紙 ¥420(税込み)
大賀蓮ポストカード ¥80(税込み)

担当：UTCC三浦



The University of Tokyo

東京大学コミュニケーションセンター
The University of Tokyo
Communication Center

OPEN：月曜～土曜 10：00～18：00

電話：03-5841-1039

http://www.utcc.pr.u-tokyo.ac.jp

INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

医科学研究所

第38回医科学研究所創立記念シンポジウム 「最先端医療の現状と展望」

医科学研究所では、伝染病研究所から医科学研究所への改組を記念して、毎年、創立記念シンポジウムを開催しており、今年は以下のとおり実施します。

皆様のご来場をお待ちしています。(参加費無料)

日時：6月1日(水) 13:00～17:00

会場：東京大学医科学研究所 1号館講堂

〈プログラム〉

13:00～13:10 開会挨拶

医科学研究所所長 清野宏

13:10～13:50

1. 抗体医薬による新治療戦略

今井浩三(医科学研究所)

13:50～14:30

2. 増殖因子を標的とするがん治療薬のTR

目加田英輔(大阪大学微生物病研究所)

14:30～14:50 休憩

14:50～15:30

3. 幹細胞研究と新しい医療：iPS細胞から臓器を作る

中内啓光(医科学研究所)

15:30～16:10

4. ナノバイオテクノロジーが先導する診断・治療イノ

ベーション ～超分子ナノデバイスによる薬物・遺伝子のピンポイントデリバリー～

片岡一則(大学院工学系研究科)

16:10～16:50

5. がんペプチドワクチン療法の現状と展望

中村祐輔(医科学研究所)

16:50～17:00 閉会挨拶

医科学研究所副所長 村上善則

問合せ先：医科学研究所大学院事務室(内線72045)

gakumu@ims.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

所蔵品展

「レオナルド・ダ・ヴィンチ複製素描画」

ルネサンスの爛熟期を生きたレオナルド・ダ・ヴィンチ(1452-1519年)は、しばしば万能の天才と称されてきました。彼の足跡のうち、完成された絵画作品が少ない(『受胎告知』や『岩窟の聖母』や『ラ・ジョコンダ(モナ・リザ)』を含めた17点)一方で、おびただしい数のスケッチやデッサンが大半を占めています。素描を含めた、科学技術分野での探求の綴られたノートは13,000ページにも及びます。

東京大学駒場博物館所蔵のレオナルドの複製画コレクションはこれらの素描をもとにしています。全部で86点を数えるパネルはユネスコによって制作され、レオナルド生誕500年(1952年)を記念して世界各地を巡業したのちに日本の地に落ち着きました。

今回の展覧会では、このユネスコ・コレクションの全体像をご紹介します。人物(人相学、解剖学)から自然、装置へとレオナルドの関心は広がりを見せ、おそらく「天才」の真価をここに認めることができるでしょう。

会期 3月22日(火)～6月24日(金)

開館時間 10:00～18:00(入室は17:30まで)

休館日 土・日・祝日

入館料 無料

会場 東京大学教養学部駒場博物館1階展示室

TEL: 03-5454-6139

FAX: 03-5454-4929

URL: <http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html>

*東北地方太平洋沖地震に伴う諸情勢を踏まえ、開館時

間の変更、節電のため室内温度の制限等を行う場合があります。ご了承ください。



お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

所蔵品展「一高の書画」

日本の高等教育機関として発足した旧制第一高等学校は、多様な才能を開花させる実に豊かな土壌でありました。一高で得た知識をもとに各界で活躍した学生たちと、彼らを愛し、時には厳しく、時には優しく教え諭してきた教師陣との融和が、一高の風土を作ったといっても過言ではないでしょう。

一高は昭和25（1950）年に閉校しましたが、駒場には幾多の資料が残されました。その中から今回は“書画”にスポットを当て、色紙や短冊、掛け軸などをまとめて紹介いたします。

展示品の中には、芥川龍之介や菊池寛を育てた菅虎雄、和辻哲郎や谷崎潤一郎などを育てた杉敏介、一高寮歌として名高い「嗚呼玉杯」を作詞した矢野勘治、ヘボン式ローマ字に対抗して日本式ローマ字を考案した田中館愛橘などの墨書が含まれています。

一高で学び、一高で教えた人々の多彩な顔ぶれと、彼らの才能、そしてユーモアをご堪能下さい。

会 期 3月22日（火）～5月27日（金）
開館時間 10:00～18:00（入室は17:30まで）
休 館 日 土・日・祝日
入 館 料 無料
会 場 東京大学教養学部駒場博物館2階展示室
問合せ先 駒場博物館
TEL：03-5454-6139
FAX：03-5454-4929
URL：<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/index.html>

*東北地方太平洋沖地震に伴う諸情勢を踏まえ、開館時間の変更、節電のため室内温度の制限等を行う場合があります。ご了承ください。



お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第537（4月6日）号の発行 ——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第537号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

濱田純一：知の森のヴァンデルルク
長谷川壽一：世界を切り拓く皆さんへ
和田 元：失われつつある「研究者の楽園」
池上高志：ロスアラモスの青い空
——金子邦彦さんの仁科記念賞受賞に寄せて
井上 健：駒場の飲食店案内（全面改定版）
教員紹介2011〈1〉：英語、ドイツ語、フランス語・イタリア語、中国語、韓国朝鮮語、ロシア語、スペイン語、古典語・地中海諸言語、法・政治、経済・統計、社会・社会思想史、国際関係、歴史学、国文・漢文学、文化人類学、哲学・科学史、心理・教育学、人文地理学、物理、化学、学生相談所、進学情報センター、留学生相談室、駒場保健センター

石垣琢磨・松島公望：
駒場には「よろず相談所」があります
～その場所は、学生相談所です～
斎藤文修：進学情報センター
宮内由美子：新しい留学生支援体制

古矢 旬：グローバル地域研究機構
アメリカ太平洋地域研究センター

山口和紀：情報教育棟

木村秀雄：駒場図書館

事務部：教育組織・事務部等

伊藤元己：駒場博物館案内

嶋田正和：ようこそ、駒場へ！

——初年次活動センターの紹介

山崎 憲：駒場保健センター

(保健・健康推進本部駒場地区)

〈本の棚〉

石浦章一：太田邦史著『自己変革するDNA』

〈時に沿って〉

福井尚志：駒場への回帰

〈辞典案内〉

田尻芳樹：英語

森 芳樹：ドイツ語

坂原 茂：フランス語

安岡治子：ロシア語

西中村浩：ポーランド語

村松真理子：イタリア語

石橋 純：スペイン語

木村秀雄：ポルトガル語

筒井賢治：古典語——ギリシア語・ラテン語——

吉川雅之：現代中国語

品田悦一：国語

齋藤希史：漢和辞典

生越直樹：韓国朝鮮語

杉田英明：アラビア語

藤井 毅：ヒンディー語

高知 薫：インドネシア語

高松洋一：トルコ語

中井和夫：ウクライナ語

山崎信一：セルビア・クロアチア語

岩月純一：ベトナム語

長谷川修一：ヘブライ語

永ノ尾信悟：古典語——サンスクリット語——

前田君江：ペルシア語

浅見靖仁：タイ語

王 嵐：台湾語

木村理子：モンゴル語

吉川雅之：広東語

楊 凱 榮：上海語

高橋英海：シリア語——シリア・アラム語——

進学情報センター：シンポジウム

ピアノ委員会：選抜学生コンサート

友の会：第11回ピアノ演奏会

お知らせ

情報基盤センター

「はじめての論文の探し方」ほか“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ

講習会に参加して、論文の探し方の基本をマスターしましょう！

情報基盤センター図書館電子化部門では、定期的に、“情報探索ガイダンス”各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

※自宅からの利用方法はどのコースでも説明します。

■5/12 (木) 15:00~16:00

人文社会科学系のためのRefWorks入門

これからRefWorksを使ってみようという人文社会科学系の方向けに、Web版の文献管理ツール「RefWorks」の使い方を説明します。CiNii(日本語論文)、EBSCOhost(英語論文)などご希望に応じてデータベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法を実習します。(過去の「RefWorksを使うには？」コース参加者は受講不要)

■5/13 (金) 12:10~12:30

自宅から検索するには？(20分ワンポイント講習)

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCSアカウント認証によるSSL-VPNGatewayサービスを紹介します。

■5/19 (木) 15:00~16:00

はじめての論文の探し方

「文献検索は初めて」という初心者向けにゆっくりと、文献リストの読み取り方、図書、雑誌、日本語論文(CiNii)、英語論文(Web of Science)の基本的な探し方を実習します。

■5/24 (火) 15:00~16:00

自然科学系のためのRefWorks入門

これからRefWorksを使ってみようという自然科学系の方向けに、Web版の文献管理ツール「RefWorks」の使い方を説明します。

Web of Science、ScienceDirect、PubMed、医中誌Webなどご希望に応じてデータベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法を実習します。(過去の「RefWorksを使うには？」コース参加者は受講不要)

■ 5/25 (水) 15:00~16:00

知っておきたい検索のコツ

「いつも自己流で検索しているが、もっといい検索方法があれば知りたい」という方におすすめのコース。

教わらなくても簡単そうに見えて、意外と難しいのがキーワード検索です。どのように入力すれば欲しい情報が効率良く見つかるでしょうか。いろいろな検索の種類と、データベースごとに知っておくと便利な検索のコツを教えます。(扱うデータベースは当日応相談。例：OPAC、CiNii、Web of Science、EBSCOhost、読売新聞、朝日新聞、医中誌Web、PubMed)

● 会 場：

本郷キャンパス総合図書館1階講習会コーナー
(ECCS無線LANまたは全学共通無線LANサービス utroomの設定済みのノートPC持込OK)

●参加費：無料

●予約不要：各回先着14名。直接ご来場ください。

※上記の他に、韓国語による講習会も実施します。
(参照：別記事「韓国語で講習します！ 留学生のための“はじめての論文の探し方”ガイダンス」)

★授業・ゼミでも講習します！

論文の探し方の出張講習を、随時受付中です(無料)。授業やゼミの内容に合わせて講習いたします。会場のことなど、ご相談に応じます。まずはお気軽にお問い合わせください。どのキャンパスでもOKです。過去の実施例は以下のURLでご覧いただけます。
(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

★Litetopiメールマガジン発信中！

本学所属の方を対象に、データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ：

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線：22649)
literacy@lib.u-tokyo.ac.jp
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>
(ツイッター http://twitter.com/gacos_todai)



お知らせ

情報基盤センター

韓国語で講習します！ 留学生のための
“はじめての論文の探し方”ガイダンス

情報基盤センター図書館電子化部門では、韓国人講師による「留学生のための“はじめての論文の探し方”ガイダンス」を開催します。内容は、レポート・論文作成に役立つ、データベースを使った図書や雑誌論文の検索実習です。入門的な内容ですので、新入学の留学生に限らず、初心者の方の参加も歓迎します。本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どんなにでも参加できます。ぜひご参加ください。



● **講習内容**

- ・ 図書の探し方
- ・ 電子ジャーナルで雑誌論文を入手する方法
- ・ 日本語論文の探し方 (CiNii)
- ・ 英語論文の探し方 (Web of Science)
- ・ 自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法

● **会場：**

本郷キャンパス 総合図書館 1階 講習会コーナー

● **日時：** 5/13 (金) 15:00~16:00

詳細は下記のサイトをご覧ください。(韓国語)
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/k/training-k.html>

● **参加費：** 無料

● **予約不要**

先着14名。直接ご来場ください。

● **問い合わせ：**

情報基盤センター 学術情報リテラシー係
 03-5841-2649 (内線：22649)
literacy@lib.u-tokyo.ac.jp
<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>

お知らせ

情報基盤センター

第74回コンピュータ・ネットワーク利用セミナー
 「Webページ作成—デザイン・作成ツール—」開催のお知らせ

情報基盤センターでは、本学の教職員および学生等を対象として、コンピュータ・ネットワークの利用に関する講義や本センターで提供しているサービスの紹介等、毎回様々なテーマで講習会を開催しています。

今回は、主にWebページの作成・更新を任された教職員（短時間教職員を含む）・大学院生等を対象に、以下のとおり開催しますので、ご参加ください。

多数の皆様のご参加をお待ちしています。

日時・内容：

- 5月17日 (火)
- 13:00~15:00 Webデザイン
- 15:10~17:00 Webページ作成ツール
- 17:00~17:20 WEB PARKサービス概要

会場：

本郷キャンパス 情報基盤センター 4F 遠隔講義室
 駒場キャンパス 情報教育棟 4F 遠隔講義室
 (駒場会場は、本郷会場からのテレビ会議システムによる中継です。)

定員：

各会場60名 (先着順)

概要：

Webページの作成について、デザインおよび作成ツール (Adobe Dreamweaver、ホームページ・ビルダー) の使い方を、外部講師をお招きし初心者でも分かりやすいように解説していただきます。

また、最後に情報基盤センターでサービスしているWebホスティングシステムWEB PARKの概要を説明します。

なお、講師は本郷側で講義を行います。

講師：

株式会社フォーイーチ 廣作 拓郎 氏
 本郷PC塾 中村 徹 氏

参加費：

無料

参加申込み：

以下の参加申込みページからお申し込みください。
 (資料等の準備の都合がありますので、事前に参加申込みをお願いします。)

http://www.itc.u-tokyo.ac.jp/Seminar/074_20110517/

(問い合わせ先)

情報基盤センター
 コンピュータ・ネットワーク利用セミナー担当
 Email : seminar-jimu@itc.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

低温センター

低温センター安全講習会（高圧ガス保安法に基づく保安教育）のお知らせ

本郷キャンパスで液体窒素・液体ヘリウム利用者を対象とした講習会を開催いたします。この講習会は高圧ガス保安法で義務付けられている保安教育の一環として行うものです。各研究室の該当者は必ず出席するようにお願いいたします。

【対象者】

新たに寒剤（液体窒素・液体ヘリウム）を利用する学生及び教職員（修士課程一年生など、特に低温センターから寒剤供給を受ける研究室の方）

【内容】

高圧ガス等管理について／高圧ガス保安法／寒剤の性質、事故原因と事故防止／容器の取り扱い 他

【申込方法】

事前申し込み（web）が必要です。4月1日（金）10:00から受け付けます。

<http://kanzai.crc.u-tokyo.ac.jp/kosyu/>

【申込〆切】5月13日（金）

【開催日】

※第一回または第二回のどちらか1回を受講してください。

〈第一回〉

日時：5月17日（火）13:30～15:30

場所：武田先端知ビル5階 武田ホール（定員300名）

〈第二回〉

日時：5月19日（木）13:30～15:30

場所：理学部1号館 小柴ホール（定員170名）

【問い合わせ先】

低温センター 業務担当 内線22853

【補足】

この講習会の参加者は、6月に実施される環境安全本部主催「化学物質・高圧ガス・UTCRIS取り扱い講習会」のうち高圧ガスに関する講習を受講する必要はありません。

お知らせ

大学院人文社会系研究科・文学部

文学部視聴覚教育センター改修のお知らせ

総合図書館5階の文学部視聴覚教育センターでは、このほど教室の大改修を行いましたので、ご案内いたします。

文学部視聴覚教育センターは、1964年、図書館の「総合化」の一環として、語学教育と非文字資料（音声・映像資料）の収集を行うことのできる施設として、その設

置・運営が文学部に委託されて発足しました。しかし、近年語学学習（教育）の方法や教材が多様化したことで、従来のような語学ラボ施設は必ずしも必要とされなくなり、加えて施設の老朽化もあり、利用が少なくなっていました。

そこで視聴覚教育センターの旧第1・第2教室（各25名収容）の仕切りの壁を取り払って、新第1教室（45名収容）とし、OAフロアにしてインターネットの利用を可能にするとともに（PC47台ネット接続可）、プロジェクター、OHC、DVDプレーヤー、VHSデッキなどを設置して、語学演習だけでなく、視聴覚機器を用いた講義・演習や、学生のプレゼンテーション・スキル向上のための実習などにも利用できる多目的教室としました。大学院人文社会系研究科・文学部の授業での利用を優先させていただいておりますが、空いている時間帯は全学の教職員のご利用が可能です。

利用時間：平日の9時30分から17時まで

（土日、祝日、年末年始および総合図書館の閉館日は利用できません）

利用手続：所定の利用許可申請書を、利用日の1週間前までに、視聴覚教育センターに届け出て下さい。

（利用申請は、本学教職員の方のみ許可します。また総合図書館入館資格のない方は、ご利用になれません）

問い合わせ先：視聴覚教育センターカウンター

（内線23728、E-mailアドレス：avec@lu-tokyo.ac.jp）

※なお、語学教材や授業・学習補助教材として当センターで作成・収集してきた音声・映像資料は、センター内の自習室にて、従来どおりご利用になれます。

詳細は文学部視聴覚教育センターHP

<http://www.lu-tokyo.ac.jp/avec/>をご覧ください。



視聴覚教育センター第1教室

奥田俊洋助教

本郷保健センター内科の奥田俊洋先生は、2月11日御病気のため御逝去されました。享年55歳でした。

奥田先生は昭和55年に東京大学医学部医学科を御卒業後、故尾形悦郎先生が教授を務められていた東京大学医学部附属病院分院第4

内科に入局され、腎臓病学の臨床・研究・教育に携わられました。研究室長の黒川清先生の第1内科教授就任後、第1内科に異動され、その後保健センターにて仕事を続けられました。また、大学以外でも虎の門病院、公立昭和病院、東京通信病院などで熱心に診療に従事され、その卓越した臨床能力で各病院のスタッフと患者の間で尊敬を集めておられました。

奥田先生の大学における御研究は、腎臓の糸球体メサンギウム細胞と尿細管糸球体フィードバック機構に関連したもので、その先駆的な成果は腎生理の理解と進歩に大きな影響を与えました。また電解質異常の病



態に詳しく、授業のみならず、「わかりやすい腎臓の構造と機能」「わかりやすい水・電解質と輸液」をはじめとする著書、および「腎臓病シークレット」などの翻訳を通じて、若手医師の教育に多大な貢献をされました。このような中での先生のあまりに早い御逝去に、関係者一同大きな衝撃と悲しみを覚えています。

奥田先生のまじめで妥協を許さない仕事に対する態度を忘れることなく、臨床・研究・教育に励むことが、我々残された者の責務であると感じております。先生の御遺徳を偲びつつ、心より御冥福をお祈り申し上げます。

(保健・健康推進本部)

人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

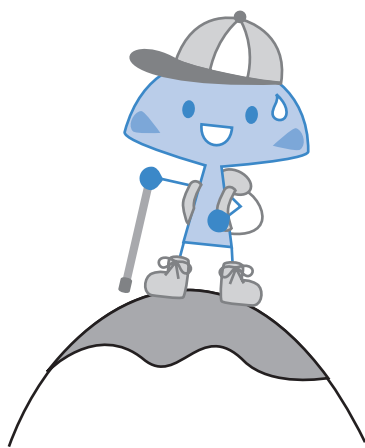
発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
23.3.30	井上 直樹	辞 職（国立高等専門学校機構徳山工業高等専門学校長）	医科学研究所教授
23.3.31	清水 哲夫	辞 職	大学院工学系研究科准教授
23.3.31	平原 聖文	辞 職（名古屋大学太陽地球環境研究所教授）	大学院理学系研究科教授
23.3.31	上坂 友洋	辞 職	大学院理学系研究科附属原子核科学研究センター准教授
23.3.31	生源寺 真一	辞 職（名古屋大学大学院生命農学研究科教授）	大学院農学生命科学研究科教授
23.3.31	落合 芳博	辞 職	大学院農学生命科学研究科准教授
23.3.31	ABBES AHMED	辞 職	大学院数理科学研究科教授
23.3.31	PUEL JEAN PIERRE GEORGES	辞 職	大学院数理科学研究科教授
23.3.31	小澤 登高	辞 職（京都大学数理解析研究所准教授）	大学院数理科学研究科准教授
23.3.31	中谷 明弘	辞 職（新潟大学研究推進機構超域学術院准教授）	大学院新領域創成科学研究科准教授
23.3.31	三尾 典克	辞 職（大学院工学系研究科附属光量子科学研究センター 特任教授）	大学院新領域創成科学研究科准教授
23.3.31	金本 良嗣	辞 職（政策研究大学院大学教授）	大学院公共政策学連携研究部教授
23.3.31	杉本 和行	辞 職	大学院公共政策学連携研究部教授
23.3.31	宮澤 理穂	辞 職（京都大学防災研究所・准教授）	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター准教授
23.3.31	黒田 祥子	辞 職	社会科学研究所准教授
23.3.31	加藤 佳孝	辞 職	生産技術研究所附属都市基盤安全工学国際研究センター准教授
23.3.31	橋本 秀紀	辞 職	生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター准教授
23.3.31	中村 典雄	辞 職（高エネルギー加速器研究機構教授）	物性研究所附属軌道放射物性研究施設准教授
23.3.31	小川 和夫	辞 職	大学院農学生命科学研究科教授
23.3.31	酒井 仙吉	辞 職	大学院農学生命科学研究科教授
23.3.31	小林 孝雄	辞 職	大学院経済学研究科教授
23.3.31	武市 正人	辞 職	大学院情報理工学系研究科教授
23.3.31	米澤 明憲	辞 職	大学院情報理工学系研究科教授
23.3.31	上野 千鶴子	辞 職	大学院人文社会系研究科教授
23.3.31	村田 純一	辞 職	大学院総合文化研究科教授
23.3.31	渡會 公治	辞 職	大学院総合文化研究科准教授
23.3.31	田中 千穂子	辞 職	大学院教育学研究科教授
23.3.31	柳澤 幸雄	辞 職	大学院新領域創成科学研究科教授
23.3.31	辻井 潤一	辞 職	大学院情報理工学系研究科教授
23.3.31	仁田 道夫	辞 職	社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター教授
23.3.31	数間 恵子	辞 職	大学院医学系研究科教授
23.3.31	山崎 喜比古	辞 職	大学院医学系研究科准教授
23.3.31	内藤 廣	辞 職	大学院工学系研究科教授
23.3.31	安藤 直人	辞 職（大学院農学生命科学研究科特任教授）	大学院農学生命科学研究科教授
23.3.31	林 良造	辞 職	大学院公共政策学連携研究部教授
23.3.31	横田 明	辞 職	分子細胞生物学研究所准教授
23.3.31	南 正輝	辞 職	先端科学技術研究センター准教授
（採 用）			
23.4.1	品川 高廣	情報基盤センター准教授	筑波大学大学院システム情報工学研究科講師
23.4.1	菱田 雄郷	大学院法学政治学研究科准教授	東北大学大学院法学研究科准教授
23.4.1	山上 聡	医学部准教授	
23.4.1	小芦 雅斗	大学院工学系研究科附属光量子科学研究センター教授	大阪大学大学院基礎工学研究科准教授
23.4.1	森口 祐一	大学院工学系研究科教授	国立環境研究所循環型社会・廃棄物研究センター長
23.4.1	加藤 耕一	大学院工学系研究科准教授	
23.4.1	小泉 宏之	大学院工学系研究科准教授	宇宙航空研究開発機構宇宙科学研究所助教
23.4.1	中谷 辰爾	大学院工学系研究科准教授	
23.4.1	大宮 勲一郎	大学院人文社会系研究科教授	
23.4.1	葛西 康德	大学院人文社会系研究科教授	
23.4.1	出口 剛司	大学院人文社会系研究科准教授	九州大学大学院人間環境学研究院教授
23.4.1	藤原 聖子	大学院人文社会系研究科准教授	
23.4.1	牧原 成征	大学院人文社会系研究科准教授	宇都宮大学教育学部准教授
23.4.1	櫻井 博儀	大学院理学系研究科教授	理化学研究所和光研究所仁科加速器研究センター主任研究員
23.4.1	鈴木 庸平	大学院理学系研究科准教授	産業技術総合研究所地圏資源環境研究部門研究員
23.4.1	久保 成隆	大学院農学生命科学研究科教授	東京農工大学大学院農学研究院教授
23.4.1	高橋 一生	大学院農学生命科学研究科准教授	水産総合研究センター東北区水産研究所主任研究員

23.4.1	松尾 隆嗣	大学院農学生命科学研究科准教授	
23.4.1	八木 信行	大学院農学生命科学研究科准教授	水産庁漁政部加工流通課付
23.4.1	安永 円理子	大学院農学生命科学研究科准教授	九州大学生物環境調節センター助教
23.4.1	青木 浩介	大学院経済学研究科准教授	
23.4.1	桑嶋 健一	大学院経済学研究科准教授	筑波大学大学院ビジネス科学研究科准教授
23.4.1	小島 憲道	大学院総合文化研究科教授	東京大学理事
23.4.1	上野 和紀	大学院総合文化研究科准教授	東北大学原子分子材料科学高等研究機構助教
23.4.1	杉山 清彦	大学院総合文化研究科准教授	
23.4.1	福岡 安都子	大学院総合文化研究科准教授	
23.4.1	古荘 真敬	大学院総合文化研究科准教授	山口大学人文学部准教授
23.4.1	李 正連	大学院教育学研究科准教授	名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授
23.4.1	小国 喜弘	大学院教育学研究科准教授	
23.4.1	東郷 史治	大学院教育学研究科准教授	労働安全衛生総合研究所研究企画調整部研究員
23.4.1	中村 高康	大学院教育学研究科准教授	大阪大学大学院人間科学研究科准教授
23.4.1	石井 志保子	大学院数理科学研究科教授	東京工業大学大学院理工学研究科教授
23.4.1	金井 雅彦	大学院数理科学研究科教授	名古屋大学大学院多元数理科学研究科教授
23.4.1	下村 明洋	大学院数理科学研究科准教授	
23.4.1	吉野 太郎	大学院数理科学研究科准教授	東京工業大学大学院理工学研究科助教
23.4.1	有馬 孝尚	大学院新領域創成科学研究科教授	東北大学多元物質科学研究所教授
23.4.1	出口 敦	大学院新領域創成科学研究科教授	九州大学大学院人間環境学研究院教授
23.4.1	田中 明彦	大学院情報学環教授	東京大学理事
23.4.1	長谷川 榮一	大学院公共政策学連携研究部教授	
23.4.1	三浦 哲	地震研究所附属地震火山噴火予知研究推進センター教授	東北大学大学院理学研究科附属地震・噴火予知研究観測センター教授
23.4.1	境家 史郎	社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター准教授	
23.4.1	大口 敬	生産技術研究所附属先進モビリティ研究センター教授	
23.4.1	垣澤 英樹	先端科学技術研究センター准教授	物質・材料研究機構ハイブリッド材料センター主任研究員
(昇 任)			
23.3.16	馬渡 和真	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
23.3.16	吉尾 正史	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科助教
23.3.16	中村 尚	大学院理学系研究科教授	大学院理学系研究科准教授
23.3.16	鶴岡 弘	地震研究所附属地震火山情報センター准教授	地震研究所附属地震火山情報センター助教
23.3.16	伊部 昌宏	宇宙線研究所准教授	大学院理学系研究科助教
23.4.1	堀内 秀樹	キャンパス計画室准教授	キャンパス計画室助教
23.4.1	吉田 邦夫	総合研究博物館教授	総合研究博物館准教授
23.4.1	瀬崎 薫	空間情報科学研究センター教授	空間情報科学研究センター准教授
23.4.1	中島 淳	大学院医学系研究科教授	大学院医学系研究科准教授
23.4.1	大竹 豊	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
23.4.1	坂田 利弥	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
23.4.1	関谷 毅	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
23.4.1	関野 正樹	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
23.4.1	長汐 晃輔	大学院工学系研究科准教授	大学院工学系研究科講師
23.4.1	森村 久美子	大学院工学系研究科附属国際工学教育推進機構准教授	大学院工学系研究科附属工学教育推進機構講師
23.4.1	工藤 和俊	大学院総合文化研究科准教授	大学院総合文化研究科助教
23.4.1	松永 茂樹	大学院薬学系研究科准教授	大学院薬学系研究科講師
23.4.1	横島 聡	大学院薬学系研究科准教授	大学院薬学系研究科講師
23.4.1	戸野 賢一	大学院新領域創成科学研究科教授	環境安全研究センター准教授
23.4.1	宇野 重規	社会科学研究所教授	社会科学研究所准教授
23.4.1	岡田 至崇	先端科学技術研究センター教授	先端科学技術研究センター准教授
23.4.1	津田 敦	大気海洋研究所教授	大気海洋研究所准教授
(配 置 換)			
23.4.1	KRAINES STEVEN BENJAMIN	フューチャーセンター推進機構准教授	総括プロジェクト機構准教授
23.4.1	沖田 泰良	人工物工学研究センター准教授	大学院工学系研究科准教授
23.4.1	石川 徹	空間情報科学研究センター准教授	大学院情報学環准教授
23.4.1	岡本 孝司	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科教授
23.4.1	松橋 隆治	大学院工学系研究科教授	大学院新領域創成科学研究科教授
23.4.1	近藤 豊	大学院理学系研究科教授	先端科学技術研究センター教授
23.4.1	酒井 哲哉	大学院総合文化研究科附属グローバル地域研究機構教授	大学院総合文化研究科教授
23.4.1	高橋 直樹	大学院総合文化研究科教授	大学院総合文化研究科附属グローバル地域研究機構教授
23.4.1	柳原 大	大学院総合文化研究科准教授	大学院情報学環准教授
23.4.1	岡田 猛	大学院教育学研究科教授	大学院情報学環教授
23.4.1	陳 昱	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院工学系研究科准教授

23.4.1	金森 修	大学院情報学環教授	大学院教育学研究科教授
23.4.1	木宮 正史	大学院情報学環教授	大学院総合文化研究科教授
23.4.1	佐藤 博樹	大学院情報学環教授	社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター教授
23.4.1	森本 一夫	大学院情報学環准教授	東洋文化研究所准教授
23.4.1	山田 育穂	大学院情報学環准教授	空間情報科学研究センター准教授
23.4.1	飯塚 敏晃	大学院公共政策学連携研究部教授	大学院経済学研究科教授
23.4.1	真鍋 祐子	東洋文化研究所教授	大学院情報学環教授
23.4.1	前田 幸男	社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センター准教授	大学院情報学環准教授
23.4.1	久留島 典子	史料編纂所附属画像史料解析センター教授	史料編纂所教授
23.4.1	箱石 大	史料編纂所附属画像史料解析センター准教授	史料編纂所准教授
23.4.1	中村 尚	先端科学技術研究センター教授	大学院理学系研究科教授
23.4.1	川幡 穂高	大気海洋研究所教授	大学院新領域創成科学研究科教授
(兼 務 命)			
23.4.1	尾張 真則	環境安全研究センター長	環境安全研究センター教授
23.4.1	福代 康夫	アジア生物資源環境研究センター長	アジア生物資源環境研究センター教授
23.4.1	門脇 孝	医学部附属病院長	大学院医学系研究科教授
23.4.1	宮園 浩平	大学院医学系研究科長・医学部長	大学院医学系研究科教授
23.4.1	中地 義和	大学院人文社会系研究科長・文学部長	大学院人文社会系研究科教授
23.4.1	長澤 寛道	大学院農学生命科学研究科長・農学部長	大学院農学生命科学研究科教授
23.4.1	市川 伸一	大学院教育学研究科長・教育学部長	大学院教育学研究科教授
23.4.1	上田 卓也	大学院新領域創成科学研究科長	大学院新領域創成科学研究科教授
23.4.1	清野 宏	医科学研究所長	医科学研究所教授
23.4.1	小屋口 剛博	地震研究所長	地震研究所教授
23.4.1	榎原 雅治	史料編纂所長	史料編纂所教授
23.4.1	秋山 徹	分子細胞生物学研究所長	分子細胞生物学研究所教授
23.4.1	児玉 龍彦	アイントープ総合センター長	先端科学技術研究センター特任教授
23.4.1	新野 宏	大気海洋研究所長	大気海洋研究所教授
23.4.1	山本 一彦	医学教育国際協力研究センター長	大学院医学系研究科教授
23.4.1	山形 俊男	大学院理学系研究科長・理学部長	大学院理学系研究科教授
23.4.1	家 泰弘	物性研究所長	物性研究所教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。



Contents

特集

- 02 平成23年度役員等の紹介
- 10 平成22年度卒業式・学位記授与式
- 19 平成23年度入学式・大学院入学式
- 34 平成22年度第2回「東京大学総長賞」授与式の挙
行及び「総長大賞」受賞者決定
- 38 広報担当者座談会

NEWS

一般ニュース

- 50 部局長の交代
- 56 本部留学生・外国人研究者支援課
「東京大学卒業・修了予定の外国人留学生、留
学生支援団体等と総長との懇談会」を開催
- 56 海洋アライアンス
シンポジウム「我が国における海洋教育及び研
究のありかた」開催
- 57 本部外部資金課
国際高等研究所設立記念一般講演会を開催
- 58 本部留学生・外国人研究者支援課
東京大学アサソー ディ・ケイ中国育英基金奨
学生大学院修士課程修了報告会
- 59 男女共同参画室
「女子の進学促進、女子学生比率向上への提
言—多様な学生構成の実現を目指して—」の
提出

部局ニュース

- 59 大学院総合文化研究科・教養学部
リベラルアーツ集中講義を南京大学で開催
- 60 先端科学技術研究センター
アイントホーフェン工科大学の学生が先端研
を訪問
- 61 大学院工学系研究科・工学部
部局横断で「科学技術イノベーション政策の
科学の構築に向けて」ワークショップを開催
- 61 低温センター
「低温センター研究交流会及び利用者懇談会」
開催報告
- 62 大学院農学生命科学研究科・農学部
平成22年度第3回農学生命科学研究科技術
職員研修会開催される
- 62 大学院医学系研究科・医学部
「香港大学看護学部教員・学生のAcademic
Visit」報告

キャンパスニュース

- 64 本部入試課
第2次学力試験（前期日程）の合格者、同
（後期日程）第1段階選抜結果の発表
- 65 本部入試課
第2次学力試験（後期日程）、外国学校
卒業学生特別選考の合格者発表

コラム

- 67 ～総長通信～
President's Improvisation Vol.4
- 68 決算のDOOR
～数字が語る東京大学 第7回
- 68 ASIAN DIVERSITY No.6
- 69 Crossroad 産学連携本部だより vol.65

◆表紙写真◆

平成22年度卒業式・学位記授与式のひとこま

- 70 Policy + alt vol.19
- 71 インタープリターズバイブル vol.45
- 71 PCリユースのわ 第18回
- 72 Relay Column「ワタシのオシゴト」 第62回
- 72 コミュニケーションセンターだより No.75

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 73 医科学研究所
第38回医科学研究所創立記念シンポジウム
「最先端医療の現状と展望」

お知らせ

- 73 大学院総合文化研究科・教養学部
所蔵品展「レオナルド・ダ・ヴィンチ複製素描画」
- 74 大学院総合文化研究科・教養学部
所蔵品展「一高の書画」
- 74 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第537（4月6日）号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——
- 75 情報基盤センター
「はじめての論文の探し方」ほか「情報探索ガイ
ダンス」各種コース実施のお知らせ
- 76 情報基盤センター
韓国語で講習します！
留学生のための「はじめての論文の探し方」
ガイダンス
- 77 情報基盤センター
第74回コンピュータ・ネットワーク利用セ
ミナー「Webページ作成—デザイン・作成
ツール—」開催のお知らせ
- 78 低温センター
低温センター安全講習会（高圧ガス保安法に
基づく保安教育）のお知らせ
- 78 大学院人文社会系研究科・文学部
文学部視聴覚教育センター改修のお知らせ

訃報

- 79 奥田俊洋助教

事務連絡

- 80 人事異動（教員）

淡青評論

- 84 日本政治の研究と講義

編集後記

毎年、4月号は分厚い号になります。そのため、編集スタッフは特別な
進行で4月号を作り上げます。今年も無事、校了に漕ぎ着けました。そ
ういう意味ではいつもと同じ春なのですが、出来上がった誌面を見てみ
ると、やはり3・11の影響が表れています。今年は卒業式や入学式の記
事に「屋外で嬉しそうに談笑する卒業生・入学生の写真」がありません。
また、総長連載（67ページ）は「総長の被災地訪問の写真」と、総長自
らがお書きになった「東大構成員へのメッセージ」という内容になって
います。教職員の皆様の仕事や生活にも大小様々な形で3・11により引
き起こされた現実が影を落としていることでありましょ……しかし、
どんな環境に置かれようとも私たちには「未来」があります。ぜひ、総
長からのメッセージをご一読いただき、今、日本を蘇らせるために東大
構成員としてなすべきことに思いを馳せていただければ幸いです。（し）



七徳堂鬼瓦

日本政治の研究と講義

東京大学法学部における現代日本政治に関する講義科目は、1971年から京極純一名誉教授が担当された「政治過程論」が最初だと思う。京極先生は、現代日本政治と計量政治分析を専門とされていたが、講義では、日本人論や日本文化論を取り入れて政治家、官僚やマス・メディアの行動様式を学生たちにわかりやすく、おもしろく説明されたものである。その講義に魅せられた学生の一人だった私が先生の指導を受けて研究者の道を歩んだのであるが、当初は、講義内容からはあ

まりにかけ離れた計量政治分析に大いにとまどっていた。しかし、結局、先生の文化論的な了解的・説得的方法の側面を受け継ぐことなく、もう一方の計量政治分析を中心とした現代政治の理論的・実証的研究を続けて今日に至っている。

北海道大学、東北大学での通算29年間の勤務を経て、2009年4月に東京大学に移ってから、法学部で「日本政治」、大学院法学政治学研究科で「政治過程論」を教えている。現在では、日本文化論にもとづく日本の特殊性の説明はほとんど支持を得ることなく、世界標準の社会科学の方法にもとづく理論的・実証的研究が一般的である。自国の政治が対象であるから、いうまでもなく、研究には優位性がある。他方で、教員も学生も日本の中で暮らしているので、新聞、雑誌、テレビ、新書、政治評論などから広く現代日本政治に関する知識、情報を得ている。日々の政治状況を解説するニュース解説や論評する政治評論を読めば、さまざまな個性をもつ政治家たちの間の駆け引きなどがわかり、それだけで十分におもしろい政治がわかったような気がする。しかし、政治評論とは大きく異なり、政治研究は、政治現象を理解したり、因果関係を説明したりするために、仮説を立て、データ・資料の分析を通してそれを検証する作業である。おもしろい現実よりもさらに知的におもしろい政治研究をいかに学生たちに伝えるか、この点では日本政治の講義に優位性はないかもしれない。でも、賢い学生たちだから、その中から優位性のある日本政治研究をめざす人が育つことを確信している。

川人貞史（大学院法学政治学研究科・法学部）

（淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1411 2011年4月22日

東京大学広報室

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報課

TEL：03-3811-3393

e-mail：kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

<http://www.u-tokyo.ac.jp>